

拓殖大学大学院 言語教育研究科
言語教育学専攻 博士論文

「テイル」の用法に関する研究
－「状態」と「立証のための情報提示」の用法を中心に－

曹 倩

指導教授：石川 守 教授

2015年12月

【 目 次 】

第1章	はじめに	1
1.1	研究の背景	
1.2	研究目的と研究方法	
1.3	本研究の構成	
第2章	先行研究	5
2.1	「テイル」に関する研究の発端とその後の流れ	
2.2	「テイル」の用法の分類に関して	
第3章	「テイル」の用法に関する分類	52
3.1	個々の用法のまとめ	
3.2	「進行中の（動作・変化などの）動き」	
3.3	「状態」	
3.4	「長時間の継続・持続」	
3.5	「繰り返し・習慣」	
3.6	「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」・・・	
第4章	「テイル」の「状態」の用法について	65
4.1	先行研究における「状態」の「テイル」の研究とその問題点	
4.2	「単純状態」の「テイル」について	
4.3	「結果の状態」の「テイル」について	
4.3.1	先行研究	
4.3.2	緩慢変化動詞＋「テイル」	
4.3.3	移動動詞＋「テイル」	
4.3.3.1	先行研究	
4.3.3.2	移動結果動詞について	
4.4	本稿の「状態」の「テイル」のまとめ	

第5章 「テイル」の新たな第5の用法——立証のための情報提示……87

5.1 先行研究

5.2 問題提起

5.3 「情報提示」について

5.3.1 「情報」とは

5.3.2 情報理論から考えた「情報提示」とは

5.4 「立証のための情報提示」の「テイル」

5.4.1 談話分析による考察

5.4.2 「言っている」、「言った」、「言っていた」について

5.4.3 「立証のための情報提示」の意味規定とその関連図式

第6章 結論および将来の展望……………134

6.1 結論

6.2 将来の展望

【 参考文献 】

【 謝辞 】

第1章 はじめに

第1章 はじめに

1.1 研究の背景と目的

「テイル」の用法は、日本語学習者にとって最も習得困難な学習項目の一つである。初級の早い段階から習い始めるにもかかわらず、学習者は上級になっても、実際の使用場面で、多くの間違いを犯してしまう。この「テイル」は、これまで多くの研究者により研究されてきたが、まだ多くの点で未解明の問題が残されている。

これまでに、「テイル」の分類についての研究は盛んに行われてきたが、まだ十分に分析されていない用法がある。主な問題点は次の2点に絞ることができる。

一つ目は、「状態」の「テイル」であるが、従来の研究では、「単なる状態」と「結果残存」のように、二つに分かれているが、筆者はこの二種とも「状態」に分類すべきだと考えている。また、この「結果残存」の「状態」は「瞬間動詞+テイル」という形で説明がなされてきたが、「咲いている」の「咲く」や「痩せている」の「痩せる」など、また「行っている」の「行く」、「来ている」の「来る」などの到底「瞬間動詞」とは思えない動詞も存在する。これらの表現は「状態」を表しているから、これらの動詞を「瞬間動詞」と言われても、学習者は混乱するばかりである。この問題を解決するには、「テイル」の「状態」の用法の特徴を明らかにし、どのような動詞に「テイル」をつけると、「状態」となるのか、より妥当な動詞の分類をする必要がある。

二つ目は、今までの先行研究で、いわゆる「経験」と分類されてきた用法である。この用法に関しては、「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」・・・といった解釈がなされてきたが、これもまだ説明しきれない部分である。この問題について、筆者は自分なりの見解を提示したいと思う。

なお、「テイル」の用法は多岐にわたるが、それを全体的に整理した研究は、管見ではあるが、まだないような気がする。本論文では、この「テイル」の全用法を整理し、また、今述べた未解決の問題を明らかにし、言語教育上の一助とすることを目指している。

1.2 研究方法

先行研究に基づき、「テイル」の用法を整理し、新たな分類を立てる。更に、それらに関する用例を、文献資料や、教科書、コーパス、新聞記事、ドラマ等を使用して収集して分析を行う。更に、第5章の分析に当たっては、梅棹の情報理論を基礎に、従来行われてきた短文だけの分析ではなく、文脈のわかる文章例を用い、談話分析の手法を使って考察

を行っていく。

1.3 本研究の構成

第1章 はじめに

第1章では、研究の背景と目的、研究方法、論文の構成について論じる。

第2章 先行研究

2.1では、「テイル」の意味と用法について、金田一春彦をはじめ、現在に至るまでの藤井正、高橋太郎、吉川武時、寺村秀夫、工藤真由美、庵功雄、江田すみれなどの研究者によって、どのように研究が行われてきたかについて見ていく。

2.2では、これまで、「テイル」が各研究者によって、どのように分類されてきたかを簡潔にまとめる。

第3章 「テイル」の用法に関する分類

3.1の個々の用法のまとめでは、第2章の個々の用法に関する先行研究の結果をまとめる。

3.2～3.6では、「テイル」の個々の用法について、先行研究に基づき、筆者なりの見解を提示する。

第4章 「テイル」の「状態」の用法について

第4章では、まだ多くの問題が残されている「状態」に関する「テイル」の用法に関して、詳しく分析を行う。

4.1では、先行研究で述べられてきた「単純状態」と「結果残存」について分析する。

4.2は4.1の結果に基づき、「単純状態」の用法について筆者なりの分析を行う。

4.3では、「結果の残存」について従来の説に基づき、分析を行う。更に、従来の説では、説明のできない「咲く（咲いている）」、「痩せる（痩せている）」、「疲れる（疲れている）」、「曇る（曇っている）」のような動詞と、「行く（行っている）」、「来る（来ている）」のような移動を表す動詞について分析し、新たな「結果残存」の「状態」を表す動詞の分類を提示する。

第5章 「テイル」の新たな第5の用法——立証のための情報提示

5.1では、従来問題にされてきたいわゆる「経験」の用法について論じる。この「経験」という用法については、現在、「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」・・・といった様々な解釈が述べられている。これについて、「経験」などと主張している藤井正、高橋太郎、吉川武時また、「効力持続」などと主張している工藤真由美、庵功雄、江田すみれの説を分析していく。

この先行研究の結果を踏まえ、梅棹の情報理論を基礎に、従来行われてきた短文だけの分析ではなく、文脈のわかる文章例を用い、談話分析の手法を使って考察を行う。その結果から、筆者なりの新たな用法を提示する。

また、この結果を踏まえ、引用の「テイル」について、分析、考察を行う。

最後に、この章で明らかになった結果について、図式化を行う。

第6章 結論および将来の展望

この章においては、第2章から第5章までで明らかになった「テイル」の様々な用法に関する考察の結果をまとめ、「テイル」の用法の全体を概観できるようにする。更に、今回の研究において、十分に行えなかった問題について、将来の課題として述べる。

第 2 章 先行研究

第2章 先行研究

これまで、「テイル」に関する研究は数多く行われてきた。本章においては、その中から、主な研究を見ていくことにする。なお、「テイル」に関する表記は、研究者によって異なっており、「動詞＋ている」、「シテイル」、「～ている」、「ている」、「テイル」形など様々である。本研究においては、原則として引用部分では原文のまま表記し、基本的には「テイル」を用いる。表記が時に統一されていないように見えるかもしれないが、先にお断りしておく。

2.1 「テイル」に関する研究の発端とその後の流れ

「テイル」に関する研究は、かつては、「～シ」、「テ」、「イル」とバラバラに分け、説明されていたので、一つの形態素としては捉えられていなかった時代がある。そのため、アスペクトの概念も生じにくかった。また、「テイル」のような日常頻繁に用いられる基本的なものは日本人にとっては、当たり前のもので、研究の対象として捉えられることはなかった。これを一つの構文として研究を始め、アスペクトという概念から「テイル」を説いたのは金田一春彦である。

現在につながる「テイル」の用法に関する研究は、金田一春彦の「日本語動詞のテンスとアスペクト」(1955)に始まる。

「日本語動詞のテンスとアスペクト」では、金田一はアスペクトを二つに分けている。一つは「状態相のアスペクト」と、もう一つは、「動作相のアスペクト」である。このうち、「テイル」に関するものは「状態相のアスペクト」である。

「状態相のアスペクト」について、金田一は「状態相のアスペクトには基本的なものとして四つのもがある」と述べ、それぞれ「已然態」、「進行態」、「将然態」、「単純状態態」に分けている。このうち、「テイル」に関するものは「已然態」と「進行態」の二つである。

「已然態」は「以前起った動作・作用の結果がまだ存続している」という状態を表わしている。

「進行態」については、「動作・作用がそれ以前から始まっており、その時も継続中であり、更にそれが後にまで持ち越されるべきことを表わす」と述べている。

また、「進行態」には「反復進行態」というものがあり、これは「ある動作・作用がくり返し行われていることを表わすもの」と述べている。

この金田一の研究は、現在に至るまでの藤井正(1966)、高橋太郎(1969)、吉川武時(1976)、

寺村秀夫(1984)、工藤真由美(1982、1995)、庵功雄(2001、2003、2010)、江田すみれ(2011、2013)などの日本語におけるアスペクト研究の第一歩を踏み出したもので、画期的な業績と言えるが、多くの問題点を含んでいた。

金田一春彦

日本語の「テイル」のテンス・アスペクトに関する研究は、金田一春彦(1950、1955)から始まる。ここでは、金田一春彦の二本の研究を取り上げ、論じていきたい。

1) 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」

「テイル」のテンスとアスペクトの研究は一般的に金田一の「日本語動詞のテンスとアスペクト」(1955)に始まると考えられているが、それに先立つ研究として、同じ金田一の「国語動詞の一分類」(1950)が存在する。この論文は国語動詞の分類に関する研究であるが、従来の分類法が金田一が述べるように「自動詞と他動詞とに分ける方法」、「意志動詞と非意志動詞とに分ける方法」、「独立動詞と補助動詞とに分ける方法」、「完全動詞と不完全動詞とに分ける方法」などによって行われて来たが、金田一は、この論文によって、「時間的に見た動作・作用の種類による分類」、即ち「アスペクトの観点から観た国語動詞の分類」というものを提唱した。この研究が「日本語動詞のテンスとアスペクト」(1955)に先立つ日本語動詞におけるテンスとアスペクトの研究の嚆矢となるものである。

金田一は、この論文において、動詞を四つの類型に分けている。第一の分類は「状態動詞」で、「動作・作用を表わす」というよりも、寧ろ「状態を表わす」ものであるとしている。この動詞は「時間を超越した観念を表わす動詞」として、「テイル」をつけずに用いることができる動詞であり、実例としては「ある」、「出来る(可能を表わす)」、「切れる」、「話せる」、「見える」などである。

第二の分類は「継続動詞」であり、「動作・作用を表わす動詞」で、「ある時間内続いて行われるような種類のものであるような動詞である」としている。具体的には「読む」、「書く」、「笑う」、「泣く」などである。

第三の分類は「瞬間動詞」であり、「その動作・作用は瞬間に終わってしまう動作・作用である動詞」と述べている。その具体例としては「死ぬ」、「点く」、「消える」、「触る」、「届く」、「離れる」などである。

第四の分類は「第四種の動詞」であり、「ある状態を帯びることを表す動詞」で、常に「テイル」の形で状態を表すのに用いられるものだと述べている。その具体例としては「聳える」、「すぐれる」、「おもだつ」、「ずばぬける」、「ありふれる」などである。

金田一はこの研究で国語動詞を「テイル」の形に結び付けて、動詞の種類と「テイル」の用法の深い関係を示した。この研究は動詞の分類であるが、同時に「テイル」の用法の分類とも深く関連している見方として意味がある。

また、金田一は国語動詞について「いつもたった一類だけにおさまっているわけではない」とも指摘している。例として、「読む」を挙げ、分析を以下のように行っている。

例えば、「読む」は継続動詞の一例として挙げたが、「あの人の本の読み方の早いには驚いた、今読み初めたと思ったらもう読んでいる」の場合の、「読む」は「読み終わる」の意で瞬間動詞として用いたものである。「この子は相当難しい本でも読む」と言う場合は、「読む」を「この子」の属性と考えたもので「読む」は状態動詞として用いたものだと思う。

(「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』pp11～pp12)

つまり、金田一は「もう読んでいる」の完了、結果の継続を表す機能は「読む」という動詞にあると指摘しているが、こちらの用法は動詞の意味にあるというより、まさに「テイル」にあると言ったほうが適切ではないかと思う。こちらの「テイル」の問題は後の章で分析を行うことにする。ここで言いたいことは無論、「テイル」を研究するには、動詞の分類は重要であるが、金田一（1950）の分類は本人も言った通り、創案であり、その後の研究者から様々な異論も出ている。ただ、この分類は「テイル」を研究する初期段階において、その後の研究に良いヒントを与えることになったということは言うまでもない。

2) 金田一春彦（1955）「日本語動詞のテンスとアスペクト」

I テンス

「国語動詞の一分類」（1950）に続き、「日本語動詞のテンスとアスペクト」（1955）では、金田一は、それまでの研究は「アスペクトという体系を構成する一つ一つの態の関係がまだはっきりしていない」とし、「アスペクトの態の種類」と「それら相互の関係」につ

いて論じ、「テンスおよびアスペクトの態と言われているものを整理・分類」を行っている。そして、各態について「日本語の動詞はどのような表現法をもっているか」について考察している。

この研究では、アスペクトに関する内容を検討するに先立ち、金田一はまず「アスペクトと密接な関係をもっている『テンス』」について論じている。そして、日本語のテンスの定義について、以下のようにまとめている。

ある現象が、話し手がそれについて話しているよりも、時間的に前の事柄であるか、あとの事柄であるか、(或いはちょうど話の行われている時に起っている事柄であるか)を、言葉の上にしめすしるしである。

(「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』 p30)

この定義に従い、金田一は「た」について、同じテンスの中でも、「過去」と「完了」を表わすものは違う種類のものであると指摘し、過去の意味を表わすものを「状態相のテンス」と名付けた。つまり、「た」が「状態動詞や形容詞につく場合は、過去の助動詞」であるとしている¹。

その次の節において、金田一は「来年受けてだめだった時は、来来年²受けるさ」のような「た」の使い方について、「過去を表わすものではなくて、以前を表わす」というより進んだ考えを示した。そして、「た」の用法について以下のように述べている。

「た」は状態動詞や形容詞につく場合、二種類の意味をもつことができる。(甲)話の行われている時よりも以前、すなわち過去であることを示す場合、と、(乙)次に述べられる事実よりも以前であることを示す場合、とである。

(「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』 pp33～34)

そして、三上章氏の「境遇性のある語」³という名称を借りて、甲種の過去態は「境遇性」

¹ 金田一は「きょうはぼくの誕生日だった」の用法に関しては、「た」は「時に『想起』を表わす場合がある」と指摘している。これは「いつも終止法として用いられる」ことから、「た」の特殊用法であると述べている。

² 「来来年」は原文のまま。

³ 三上章『現代語法序説』において、「話し手との関係がその語の意義の一部となっているような単語」のことを指す。「すなわち、一切の代名詞、名詞のうち『今年』『来年』『きのう』『きょう』の類、動詞の

を持ち、「代名詞」的であるのに対し、乙種の過去態は「境遇性」を持たず、より「一般名詞」的であると述べている。

また、「雪が降った」の「一た」のような用法は「ある動作なり作用なりが、すでに実現済みだ」という事態を表わす形であり、「完了態」と名付けた。金田一は「完了態」と上記の「過去態」の違いについて、「た」は「状態を表わす動詞や形容詞などについた場合」は「過去態」であり、「動作・作用を表わす動詞についた場合」は「完了態⁴」であると指摘している。また、「この完了態およびそれと同類のもの」を「動作相のテンス」と名付けた。

ところが、金田一は「書く」といったような動詞を「継続的な動作を表わす動詞である」とし、「た」の形をつけて「書いた」という時は、「書く」の『継続的』という意味を無視して用いている」と指摘している。そして、「あの人はたくさんの小説を書いている」という用例を挙げ、この時の「書く」は「継続動詞としての意味を無視して使っているようなもの」、つまり「このような場合『書く』は臨時に瞬間動詞として用いられている」というふうの説明している。

この「書いている」に関しては、その後、反論も出ている。例えば、これについて、藤井（1966）はこの「書いている」は「過去において行われた動作・作用そのものが問題であって、それを現在から眺めた場合に用いるもの」という反論を出し、この「テイル」の用法を「経験」としている。詳しくはあとに述べるため、ここでは触れるだけにとどめることにする。

II アスペクト

アスペクトについて、金田一は大きく「状態相のアスペクト」と「動作相のアスペクト」の二つに分けている。「状態相のアスペクト」とは、「雪が積っている」の「テイル」のような「何かがある状態にあることを表わす」ということに対し、「動作相のアスペクト」とは、「(雪が)消えてしまう」の「てしまう」のような「一種の『動作・作用』が行われることを表わす」と述べている。そして、「状態相のアスペクトが『一ある』の形に換言できるのに対して、動作相アスペクトは『一する』の形に換言できるものである」と主張している。

うちの『来る』『行く』『やる』『くれる』などはいずれも境遇性のある語である。

⁴ 「過去態」と同様に、「動作動詞」に「た」の形をつけると、「いつも完了態を表わすとは限らない」と金田一は述べている。例として、「よし、買った!」の「買った」を挙げ、これは『買う』ということに決定した」という意であると説明している。

「状態相のアスペクト」

また、「状態相のアスペクトには基本的なものとして四つのものがある」と指摘し、それぞれ「已然態」、「進行態」⁵、「将然態」、「単純状態態」である。これらはちょうどテンスの「過去態」、「現在態」、「未来態」、「超時態」に対応するものであるとも述べている。

金田一は「已然態」について「以前起った動作・作用の結果がまだ存続している」という状態を表わし、テンスの中の「過去態に対応する」と述べている。用例の「雪が積っている」は、まさにこの用法である。また、「已然態」には「非過去態の已然態」と「過去態の已然態」とがあり、「積っている」は「非過去の已然態」に属し、「積っていた」は「過去態の已然態」に属していると指摘している。

「進行態」は「動作・作用がそれ以前から始まっており、その時も継続中であり、更にそれが後にまで持ち越されるべきことを表わす」ものであり、テンスの中の「現在態⁶に対応するものである」と述べている。また、「進行態」には「過去の進行態」と「非過去の進行態」とがあり、「読んでいた」は「過去の進行態」であり、「読んでいた」は「非過去の進行態」である。「進行態」をとり得る動詞は「継続動詞に限る」としている。

更に、「進行態」には「反復進行態」⁷というものがあり、これは「ある動作・作用がくり返し行われていることを表わすもの」であり、「この頃栄養失調で人がどんどん死んでいく」のように、瞬間動詞でもこの態が作られると述べている。これは「その瞬間動詞がくり返しという現象を表わすために用いられた結果、継続動詞化して用いられたもの」と主張している。

さらに、金田一は「将然態」は「ある動作・作用がまだ起らないが起る前の状態にある」ということを指し、テンスの「未来態に対応する」と述べている。これは「已然態」と「進行態」それぞれ「過去態」と「非過去態」があると同様に、「将然態」にも「過去の将然態」と「非過去の将然態」とがある。「二時を打とうとしていた」は「過去態の将然態」に属し、「二時を打とうとしている」は「非過去の将然態」に属すると述べている。そして、「将然態」は「瞬間動詞」或いは「瞬間動詞的に用いられた継続動詞」に限って作り得ると主張している。

最後に、「単純状態態」については、「動作・作用の起りに全く無関係であること」が特

⁵ 「已然態」と「将然態」という名称は松下大三郎『標準日本文法』によるものである。

⁶ 金田一はこの「現在態」について、「日本語においては、テンスにおける現在態は存在しないが、状態相アスペクトにおいてそれに対応する態、進行態は立派に存在する」としている。

⁷ 金田一（1955）に川上シン氏の説とある。

徴であり、「形容詞的な意味を表わしている」ということで「現象の起り終りということを考えずに、ある状態にあることを表わす形」としている。これは「テンス」の中の「超時態に対応する」と述べている。そして、「単純状態態」にも、「過去態」と「非過去態」とがあり、「ある」、「白い」、「似ている」は「非過去態の単純状態態」であり、「あった」、「白かった」、「似ていた」は「過去態の単純状態態」であると主張している。

「動作相のアスペクト」

金田一は「動作相のアスペクト」について「終結態⁸」、「既現態」、「始動態」、「将現態」、「単純動作態」、「継続態」の六つの下位分類を行っている。

金田一は「一てしまう」の形を例にして「終結態」と「既現態」について分析を行っている。「終結態」は「読んでしまう」、「書いてしまう」のように「継続動詞に現れ」、「ある動作・作用が完全に行われる」、即ち「完了する」という意味であるとしている。これに対して、「既現態」は「瞬間動詞に現れ」、「その動作・作用がかりそめでなく本当に行われる」、つまり、「本当に実現する」という意味を持ち、「もとに戻る望みはない」や「残念だ」というような意味が宿ることが多いと述べている。「終結態」と「既現態」には、「完了態と不完了態」、「既然態と将然態」とがあり、金田一は以下のように例を挙げ、まとめている。

読んで <u>しまう</u> 。	終結態の不完了態
読んで <u>しまった</u> 。	終結態の完了態
読んで <u>しまっている</u> 。	終結態の既然態の非過去態
読んで <u>しまおう</u> としていた。	終結態の将然態の過去態
死んで <u>しまう</u> 。	既現態の不完了態
死んで <u>しまった</u> 。	既現態の完了態
死んで <u>しまおう</u> としている。	既現態の将然態の非過去態
死んで <u>しまっていた</u> 。	既現態の既然態の過去態

(「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』 pp48～50)

次に、金田一は「一てかける」を例にし、「始動態」と「将現態」について考察を行っ

⁸ 宮田幸一氏『日本語文法の輪廓』により提唱された名称である。

ている。「始動態」は「ある動作・作用が始まることを表わす」ものであるのに対し、「将現態」は「……状態に達する」という意味を表わしていると述べている。「――かける」は動詞が継続動詞か瞬間動詞かにより、この二つの動作相アスペクトを表わしている。実例として、以下のようなものを提示している。

(雨が) 降り <u>出す</u> 。	始動態の不完了態
(雨が) 降り <u>出した</u> 。	始動態の完了態
書き <u>かけている</u> 。	始動態の既然態の非過去態
書き <u>かけようとしていた</u> 。	始動態の将然態の過去態

消え <u>かける</u> 。	将現態の不完了態
消え <u>かけた</u> 。	将現態の完了態
消え <u>かけている</u> 。	将現態の既然態の非過去態
消え <u>かけていた</u> 。	将現態の来全体の過去態
消え <u>かけようとしている</u> 。	将現態の将然態の非過去態
消え <u>かけようとしていた</u> 。	将現態の将然態の過去態

(「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』 pp51～52)

最後に、金田一は「単純動作態」と「継続態」について考察を行っている。「読む」、「書く」、「死ぬ」、「消える」のような「動作・作用を表わす動詞単独の形」が「単純動作態」を表わすのに対し、「一つづける」、「待つ」などのように「継続的な意義を持つ動作・作用を表わす形」が「継続態」を表わすと指摘している。例として、以下のようなものを挙げている。

死 <u>んだ</u> 。	単純動作態の完了態
二時間も書き <u>続けている</u> 。	継続態の進行態の非過去態

(「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』 p55)

以上のように、金田一はテンスとアスペクトの各態について、整理と分類を行い、それらの態を言い表わすには、日本語ではどのような形があるのかについて述べている。結論

としては、金田一は従来と異なり、新たにテンスおよびアスペクトの定義として以下のよう
に示している。

テンスとは、ある動詞その他用言の意味する状態・動作・作用が、ある標準から眺
めた場合、時間的にそれより以前であるか、同時であるか、以降であるかを示す形
態のちがいである。そしてテンスの一つ一つの態は、他の動詞でおおうことがで
きないような意味を有する。

(省略)

アスペクトとは、動詞その他用言の意味する動作・作用の進行の相を示す形態の
ちがいである。そして、アスペクトの一つ一つの態は、他の動詞で置き換えるこ
とができるような意味を有する。

(「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』 p60)

以上のように、金田一は「テンス」について、時間的な形態を示すものであり、「アスペ
クト」については、その動作・作用の相を表わすものであるとしている。

鈴木重幸

鈴木重幸 (1957) 「日本語の動詞のすがた (アスペクト) について—～スルの形と～シ
テイルの形—」

金田一春彦の「国語動詞の一分類」に基づき、鈴木重幸 (1957) は日本語の「動詞のす
がた」、即ちアスペクトについて研究を行っている。鈴木はアスペクトの定義について、「一
定の時間におけるそのようなプロセスのちがいを示す形態論的な現象に名づけられた名ま
えである」と述べ、「～スルの形」を「もとになるすがた (基本態)」とし、「～シテイルの
形」を「つづいているすがた (持続態)」としている。

それを中心に、「～スルの形」と「～シテイルの形」について数多くの例文を用いて比
較しながら、日本語の動詞を「すがた的な性格」にわけ、「基本態すぎさらず」および「持
続態すぎさらず」の形の意味に関する考察を行っている。

この「すがた的な性格」について以下のように定義している。

すがた的な性格は、動詞の語彙的な特徴（その表わすプロセスがどのようなものであるか）と文法的な（形態論的な）特徴（とき、すがた）の両方にかかわることであって、語彙＝文法的な（語彙＝形態論的な）カテゴリーである。このカテゴリーは、それぞれの動詞にみとめられるが、ときやすがたのような特定の形態論的な形をもっていない点で、単なる形態論的なカテゴリーから区別される。

（「日本語の動詞のすがた（アスペクト）について—～スルの形と～シテイルの形—」

『日本語動詞のアスペクト』p67）

そして、日本語の動詞を大きく三つに分け、それぞれ、「歩く」、「作る」、「こわす」などのような「状態の変化を表わすもの」を「動作性動詞」と、「ある」、「いる」、「あますぎる」のような「変化をともしない現象（存在、性質）を表わすもの」を「状態性動詞」としている。更に、その使われ方により、「動作性にも状態性にもなるものがある」と指摘し、「動作状態性動詞」あるいは「中間的な動詞」と名づけている。

動作性動詞について、鈴木は「基本態すぎさらず」と「持続態すぎさらず」の形での性質をまとめている。「動作性動詞の基本態すぎさらず」に関しては「未来における動きを表わす」とし、「動作性動詞」は「持続態の意味のうえから二つに分かれる」とし、次のように述べている。

（イ）継続動作性動詞 例）歩く、書く、話す、降る、……

（ロ）瞬間動作性動詞 例）来る、行く、立つ、積もる、……

（イ）は状態の変化とともに、そのプロセスが問題となる動きを表わす動詞であり、

（ロ）は変化だけが問題となる動きを表わす動詞である。

（中略）

継続性動詞の持続態すぎさらずは、まず、現在（一定の未来、特殊なばあい一定の過去）において進行中の動きを表わす。（中略）この形は、また、現在の具体的な特定の動きを表わさず、くりかえされる動き、習慣的な動きを表わす。

瞬間動作性動詞のばあいには、動詞の表わす状態の変化が以前におこり、現在（特定の未来、特定の過去）なおその結果がたもたれていることを表わす。

なお、鈴木は本稿の 2.1 の最初にまとめた金田一春彦の「国語動詞の一分類」の中の「第四種の動詞」もこの種類の動詞であると指摘している。

「状態性動詞」について、鈴木は「この種類の動詞には持続態がない」とし、「基本態は、現在（特定の未来、および特殊なばあいには特定の過去）の存在、性質を表わす」としている。

「動作状態性動詞」について、鈴木はこの種類の動詞に共通する特徴は「基本態すぎさらず（～スル）で現在の現象を表わすことが一般的になっている」、ただし「持続態がある点で動作性動詞と似ている」と指摘している。

鈴木はこの種類の動詞を大きく六つに分けている。それぞれ「浮く」のような《ポテンシャルな能力を表わす動詞》、「見える」、「聞こえる」、「目につく」のような《現象を感覚とむすびつけて表わす動詞》、《（頭、はら、足が）いたむ、（頭痛が）する、……、（さむけ、はきけが）する、……》、《ちがう、似あう、～にあたる（相当する、あたいする）、～にかぎる、……》、《話し手の態度、主張を表わす動詞》、「思う」、「考える」などのような《心理的な内容の形式を表わす動詞》である。ただし、この六つの分類に関しては、一部分の分類には特定の名称を与えずに、個々の動詞そのもの挙げている。恐らくこの段階では、その分類はまだ明らかになっていなかったためであると思われる。

鈴木は移動を表わす動詞「行く」、「来る」を「瞬間動詞」と分類しているが、「行く」、「来る」は明らかに「瞬間動詞」という名称には適合しない。これは、鈴木が金田一の「国語動詞の一分類」の分析を受け、「行く」、「来る」は「テイル」をつけると、動作が終わった後の状態を表わすため、逆算して「瞬間動詞」と分類したものと思われる。しかし、この分類では、意味的に矛盾が生じてくる。この「行く」、「来る」について、後章で詳しく分析を行うことにする。

藤井 正

藤井 正 (1966) 『動詞＋ている』の意味

そのほか、藤井正 (1966) も全面的に金田一春彦の「国語動詞の一分類」を基に、「主観的な観察と合わせて、修飾語の受け方や、助動詞等への続き方」といったような「用法」を用いて、「動詞＋ている」を「その表わす時間的な意味」によって分類を行っている。

ただし、藤井は金田一春彦の「国語動詞の一分類」での分類について、イ「動詞そのものの意味」、ロ『動詞＋ている』の意味、ハ『ている』がつく、つかない」という「三種の異なった基準」により分類を噛み合わせようとしているとし、実際には金田一の動詞四分類では「うまくかみ合わさることは困難で、そこに多少のずれが生じることが考えられる」と疑問を呈し、以下のように問題点をまとめている。

▷イ,ロ,ハの規準によるそれぞれの分類を、単純な形でかみ合わせることが困難であること。

▷上を解決するために、一つの動詞を二つ以上の種にまたがせると、「ている」以外の付属辞がついた場合、いずれの種であるか決しがたくなる場合があること。

▷動作・作用を表わすと言い難い動詞は、a, c に属するものだけでなく、b に属するものの中にもあり、これらのものは、継続動詞、瞬間動詞の考えで律することができないこと。

(『動詞＋ている』の意味)『日本語動詞のアスペクト』p105)

また、金田一は「あの人はたくさんの小説を書いている」の「書いている」を「結果の残存」を表わすものとしているのに対し、藤井はこの「書いている」は「過去において行われた動作・作用そのものが問題であって、それを現在から眺めた場合に用いるものである」とし、「現在の状態」を表わしていないとの反論を出している。藤井はこの「書いている」のような用法は「動作・作用そのものに注目する」ということで、それを「結果の残存」と区別し、「経験」と名づけている。

そして、「結婚する」、「(花が) 散る」のような動詞を「結果動詞」と名付け、この「結果動詞」は「あとにある結果をもたらすような動作・作用を表わす動詞」とであると提出し、

金田一が分類している「結果の残存」は「動詞が瞬間動詞であるためではない」と反論を出している。

また、藤井は「動詞そのものの意味」により、動詞を以下のように、9つに分類している⁹。

- ① 必ず「ている」（連体法では「た」）をつけて用いられるもの。
「すぐれる」「おもだつ」「じっとする」「（ある事を）黙る」等。
- ② 必ず「ている」「て来る」をつけて用いられるもの。
「にやける」「似る」「あかぬける」「（服装が）洒落る」等。
- ③ 潜在能力を表わすもの。これはほぼ『分類』¹⁰の状態動詞に相当する。
「足りる」「（採算が）とれる」「引き立つ」「（勉強が）できる」等。
これらには、「た」や「ている」をつけると「その潜在能力が実際に発揮される」という意味を表わすものがある。
○うまく泳げた
○今通勤に三時間を要している
したがって逆に動作・作用を表わす動詞がこの潜在能力を表わす場合がある。
○この子は相当難しい本でも読む（『分類』）
○あの人は大型トラックを運転する
- ④ 「物と物との関係を表わす」と言い得るもの。これは『分類』の第一種の状態動詞と第四種の動詞と兼ねているものに相当する。
「（叔父に）当る」「異なる」「適する」「共通する」等。
- ⑤ 人の態度に関する意味を表わすもの。
「かいかぶる」「（ケチに）徹する」「ひねくれる」「薄化粧する」等。

⁹ この分類は筆者がまとめたものである。

¹⁰ 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」

⑥ 徐々の変化の結果を表わすもの。

「ささくれる」「すりきれる」「ふとる」「つかれる」等。

上の⑤、⑥は動作・作用を表わすものではないので、時間に関する修飾語を受けたり、時間に関する名詞を修飾したりしにくいですが、

○ どんな謙虚な人でもうぬぼれる時がある

○ あの人でもつかれる時があるのかね

のように「一時」という形にはなることができる。

⑦ 継続動詞。ある時間内継続して行われる動作・作用を表わすもので、「長い

間」「いつからいつまで」など時間のひろがりを表わす修飾語を受け、「一間」

「一始める」の形をもつ。この中には結果動詞であるものも若干ある。

「読む」「書く」「働く」「歌う」等。

結果動詞

「(花が) 散る」「落ちる」「着る」「乗る」等。

⑧ 瞬間動詞。瞬間に終わってしまう動作・作用を表わすもので、多くのものは

「一瞬間」の形をもつ。結果動詞が非常に多い。

「一瞥する」「遭遇する」「知り合う」「(上程を) 見送る」等。

結果動詞

「結婚する」「終る」「(なくしたものが) 見つかる」「(病気が) なおる」等。

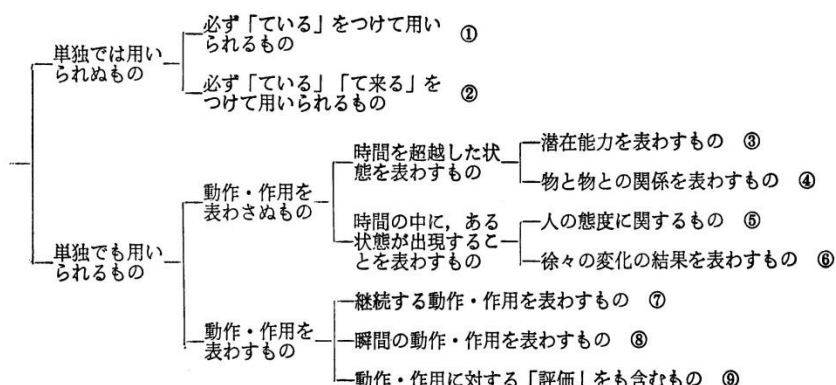
⑨ 動作・作用を表わすが、同時にそれに対するある種の「評価」をも含んでい

るため、瞬間動詞とも継続動詞ともきめ難いもの。

「悪走する」「即行する」「朝起きする」「誤診する」等。

藤井は、この動詞分類について、以下の表のように示している。

110



(『動詞＋ている』の意味)『日本語動詞のアスペクト』 p110)

そして、藤井は「テイル」について、先行研究の中で最も多い7つに分類している。それぞれ「動作の進行」、「持続」、「結果の残存」、「経験」、「単純状態」、「反復」、「存在」である。例文と解説は以下のようにまとめられる。

① 動作の進行

これは動作がある時間内継続すること、または現在継続中であることを表すもので、次の様な用法を有するものである。

今読んでいる

いつも読んでいる

長い時間読んでいる

② 持続

これは①に非常に近いものであるが、①が「こきぎみな運動」の連続であるのに対し、これは「同一の状態の継続」である。

今じっとしている

いつもじっとしている

長い間じっとしている

①と異なるのは「—最中」の形を②が持たないことだけである。

③ 結果の残存

これは「過去の動作・作用の結果が現在に残っている」ことを表すもので、「今（は）」「現在（は）」などで修飾され得るが、「長い間」などでは修飾され得ず、また「一間」「一られる（可能）」などの形のない所にその特色がある。

今は結婚している

④ 経験

これは「過去の動作・作用を現在から眺めた」場合に用いられるものである。これは「すでに」「今までに」「以前」「その時」などで修飾され得るが、「今（は）」「現在（は）」などのような現在の時点を表すものでは修飾されず、その点に③との違いが現われている。得ないと述べている。

すでに知り合っている

今までに知り合っている

以前知り合っている

⑤ 単純状態

すぐれている

おもだっている

⑥ 反復

これは「瞬間の動作のくりかえしがつづくこと」を表わす。

今有名人がどんどん死んでいる

⑦ 存在

これは時間を表す修飾語のつくことがなく、場所を表す修飾語のつくものである。

小説の中に表現されている人物

(『動詞＋ている』の意味)『日本語動詞のアスペクト』pp110～114 より)

藤井のこの分類は、金田一春彦の「国語動詞の一分類」と「日本語動詞のテンスとアスペクト」に基づき、より進んだ理論を提唱し、分類を更に詳しくしたものであるが、混乱が随所に見られる。例えば、藤井は「いつも読んでいる」を「動作の進行」と分類しているが、これはまさに典型的な動作のくりかえしを表わしているもので、「反復」に分類すべきである。また、「今じっとしている」は「持続」と言っているかもしれないが、ただし「いつもじっとしている」は果たして「持続」と分類して良いかどうかは疑問である。このような混乱は論文全体で見られ、その原因としては、藤井は「テイル」と動詞の意味のみに着目し、副詞については何も考えないため、混同してしまい、多くの矛盾点が生じたのではないかと思われる。

揺籃期の混乱が見られるが、評価すべき点は二つある。一つ目は、金田一春彦の動詞分類では、「継続動詞」と対立しているのは「瞬間動詞」であると提唱しているのに対し、藤井は、「瞬間動詞」とは別に「結果動詞」という動詞分類を立てた。二つ目は藤井が「経験」という用法を示したことがそれからの研究にとっては、新しい視野を開いたという点で大いに評価ができるのではないかと思う。

高橋太郎

高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」

高橋はアスペクトについて、「すがた」という名称を使い、「動詞のあらわすうごきの過程のどの部分を問題にするか」という「文法的な意味」を示すと述べている。また、テンスとムードは語形によって表わされるものであるのに対し、アスペクトは「文法的な単語づくりによってあらわされる」と述べている。この観点は今までのテンス・アスペクトに関する定義の主流と同じものである。

また、「すがた動詞」には「している」と「してある」、「してしまう」、「しておく」、「してくる」、「していく」などがあると例を挙げている。

その中、本稿の研究対象となっている「テイル」に関しては、高橋は「うごきのつづいていることをあらわす動詞」と述べ、「テイル」の用法を以下のように四分している。

「している」の基本的な用法

(1) [進行の状態]

うごきがつづいていることをあらわす。

(1) になる動詞は継続動詞である。瞬間動詞は(1)にならない。

(56) 二時すぎまで、植源の人達はさわいでいた¹¹。

(2) [結果の状態—主体]

うごきがおわったあとにうごきの結果としてうごきの主体の変化した状態がつづいていることをあらわす。

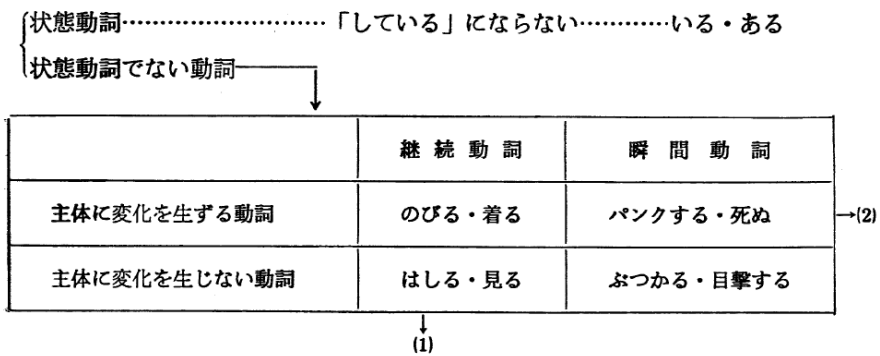
(2) になる動詞は、動きによって、状態が変わることをあらわす動詞である。

(59) 夜はとうにあけている。

(2) のなかには、うごきの結果ではなく、はじめからそういう状態のものをあらわすものがある。

(64) 山がそびえている。

(1) と(2) から、高橋は以下の図のように動詞を分類している。



(「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』 p126)

(3) [くりかえしの進行]

おなじ主体や複数の主体がつぎつぎにおなじうごきをくりかえす

¹¹ 実際、本文の中にいくつかの用例が挙げられているが、本稿では、分りやすい例を一つだけ取り上げることにした。

とき、その全体を一つの進行過程とみて、この過程がつづいていることをあらわす。

(75) 十日に一ぺんぐらいのわりでけんかをしていた。

(4) [経験・記録]

以前のうごきを経験や記録としてあらわすものである。

(78) 私は若い時に二三度この山にのぼっています。

(「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』 pp124～127)

この高橋太郎の分類は現在の「テイル」研究の基本となっているように思われる。

吉川武時

吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」

吉川は「現代日本語動詞のアスペクトの研究」で、アスペクトを表す諸形式について考察を行っている。本研究では、研究対象の「テイル」のみに絞り、まとめることにする。

吉川は「している」の意味は基本的には(1)「動作・作用の継続」と(2)「動作・作用の結果の状態」の二つであるとしている。

(1)「動作・作用の継続」のうち、「動作」、「作用」と「継続」の意味について、以下のよう定めている。

「動作」とは人又は動物についてその動きを言い、作用とは人又は動物以外のものについての動きを言う。「継続」とは動きがその過程の途中にあることを言う。ある動きが始まって、まだ終わらない状態にあることを言うのである。

(「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』 p165)

その例として、「読む」を挙げ、『読む』という動作はある時間的長さの過程である。『読んでいる』はその『読む』という動作が始まってから終わるまでの過程の途中をあらわす

としている。この種の動詞は金田一(1950)が言う「継続動詞」にあたりとし、以下のように「継続動詞」の下位分類を行っている。

<人間の活動をあらわす動詞>

人間の肉体的活動はほとんどある時間を必要とするものである。

遊ぶ, 洗う, 歌う, おどる, 書く…

人間の心理の動きもある時間継続する。

案ずる, いやがる, うらやましがる, 思う, がまんする…

人間の精神活動もある時間継続する。

解釈する, 信ずる¹²

<人間の活動以外をあらわす動詞>

自然現象をあらわす動詞。

(風が)なる, ふきすさぶ, ふきまくる, ふく, (雨が)ふる…

<移動をあらわす動詞のうちのいくつかは継続動詞>

主体が人間及び動物のもの。

歩く, 動きまわる, およぐ, はう, 走る

主体が人間及び動物以外のもの。

したたる, 流れる

主体が限定されないもの。

上がる, 浮かぶ, 近づく, 通る, 飛ぶ…

(「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』 pp165～166)

また、(2)「動作・作用の結果の状態」について、吉川は「動作・作用が行われて、ある結果があらわれた場合、その結果に注目してその(静的)状態をあらわすものである。多くの場合は主体の状態である」としている。(2)「動作・作用の結果の状態」に関しては、吉

¹² 挙げている例が多いため、基本的に最初の5つを取り上げることにするが、原文で5つ以下の例の場合すべて取り上げ、「…」は付けないこととする。

川は多数の用例を挙げ、それぞれ細かく分析を行っているが、本稿ではそれらは省略することにする。

そのほか、吉川は「テイル」には(3)「単なる状態」、(4)「経験」と(5)「くりかえし」の三つの用法もあるとし、(3)「単なる状態」も(4)「経験」も(2)「動作・作用の結果の状態」から派生したものであると主張している。(2)「動作・作用の結果の状態」と(3)「単なる状態」の共通点は「静的な状態を表す」ことであると述べている。両者の違いは、「(2)では前提となる動作・作用を考えて、その結果の状態をあらわしたのであるが、(3)では前提となる動作・作用を全然問題にしない」というように説明している。その例として、「高い塔がそびえている」のように、注目しているのは「いつ」そびえたかの開始時間や過程の問題ではなく、「そびえる」という現在の状態を問題にしていると主張している。

(3)「単なる状態」について、吉川は以下のように述べている。

この「単なる状態」は主に過程をあらわさない動詞（非過程動詞）から作られる。動詞の語法的意味で決まるのである。それと、過程をあらわす動詞（過程動詞）から作られる場合もある。この場合は文脈によって決まるのである。

過程をあらわさない動詞とは、動作・作用をあらわさない動詞のことである。動作・作用をあらわす動詞のうちでも、瞬間動詞は過程をあらわし得ないと考えられる。

（『現代日本語動詞のアスペクトの研究』『日本語動詞のアスペクト』p182）

また、「単なる状態」の動詞に関しては、吉川は「過程をあらわさない動詞から作られる場合」と「過程をあらわす動詞から作られる場合」、「単なる状態の意味にならないもの」の三種に分け、以下のようにそれぞれいくつかのパターンに分け、考察を行っている。詳しい単語の分析になるので、ここでは引用しないことにする。

また、(4)「経験」について、以下の例を挙げている。

すでに読んでいるからよくわかる。

吉川は、この「読んでいる」とは、『読んだ』結果の状態であるが、(2)のような直接的な結果、直後の状態ではなく、間接的な結果、ずっと後の状態、しかも目に見えないよ

うな形の結果なのである」としている。また、『『ている』は『た』と言いかえても同じ意味をあらわす。『ています』は『～ました』、『ていない』は『～なかった』となる」とも主張している。

そして、(5)「くりかえし」は(1)「動作・作用の継続」から派生し、「同じことばであらわされる個々の過程がいくつかあつまったものの全体を一つの課程と見て、個々の過程が次々に行われること」であると述べている。その例として、「毎日、大工さんが来ているので、家をあけられないのです」を挙げ、「毎日」という副詞で「来ている」ということを示し、「大工さんが来る」という過程がいくつか集まっていることを示すと説明している。また、「くりかえし」に関しては、「同一主体による『くりかえし』では単数の主語が現われる」、「別々の主体による『くりかえし』では複数の主体が現われる」というのが原則であるとも指摘している。

寺村秀夫

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』

寺村は金田一春彦、奥田靖雄、工藤真由美などの説に基づき、「テイル」の用法には「(a) 動作や現象が継続していることを表す場合」と「(b) ある過去（以前）のできごとが終わって、その結果がいまある状態として残っていることを表す場合」があるとし、そのほかに三つの「派生的」意味も持っているとして述べており、以下の五つの分類にまとめることができる。

(a) 動作や現象が継続していることを表す場合

赤ン坊ガ泣イテイル。

雪ガ降ッテイル。

(b) ある過去（以前）のできごとが終わって、その結果がいまある状態として残っていることを表す場合

金魚ガ死ンデイル。

アソコニ百円玉ガ落ちテイル。

(c) 現在での習慣を表す用法

父ハコノ頃 6 時頃ニ起キテイル。

父ハ最近朝 30 分程ジョギングヲシテイル。

(d) 過去の事実を回想して、いわば頭の中に再現させるような用法

ソノ年，東京ニハ二度大雪ガ降ッテイル。

アノ人ハタクサンノ小説ヲ書イテイル。

(e) 品定めの、性状規定的、その意味で形容詞のような、物事の様子、性質、形状、印象などを表す用法

コノ作品ガ一番スグレテイル。

団子ハ繭ノ玉ノ形ヲシテイル。

(『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 pp125～126)

この五つの用法のうち、(a)～(d)が「アスペクトを表す用法」であり、最後の(e)は「動詞でありながら形容詞と同様の働きを¹³持っている」とし、アスペクトの用法ではないとしている。そして、それらを通じて見られる「テイル」の「中心的な意味」は「既然の結果が現在存在していること」であり、つまり、「あることが実現して、それが終わってしまわず、その結果が何らかの形で現在に存在している(残っている)、というのが～テイルのアスペクト的意味の中心的、一般的意味」であると説明している。

また、寺村は「既然」には「事が既に始まっている場合と、事が既に終わっている場合がある」とし、この定義により、上の(a)と(b)の用法について以下のように述べている。

動詞が「(赤ん坊が泣ク)」「(モチヲ) ツク」「(雪ガ)降ル」「(鐘ガ) 鳴ル」のように、本来時間的な幅をもつ動作、現象を表わすものであるとき、その～テイルは、その動作、現象が始まって、終わらずに今存在している、つまり開始の結果が今もある、という意味をもつのがふつうである。それが上の(a)の「継続」ということの意味で、「ふつう」というのは、その動詞とその主体、対象を表わすことば以外

¹³ 原文のまま。

に、かくべつの文脈（副詞その他）や状況がなければ、聞き手はその意味に解釈するということである。

これに対して、「死ヌ」「(祭りガ) 始マル/終ワル」「落ちル」のような、ふつう瞬間動詞とされるもの、つまり本来、始まると同時に終わるような現象を表わす動詞の場合、～テイルは、(当然) その現象が既に実現した、つまり終わってしまったが、その結果（痕跡）が物理的にあるいは心理的に、現在存在するということを表わす。これが上の(b)の意味である。

(『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 p127)

また、(c)の「現在での習慣を表す用法」については、寺村はこの用法は「過去に実現したことが終わらず現在も存在する」、つまり、基本的意味の(a)「動作や現象が継続していることを表す場合」とは「本質的に同じ」とであると述べている。ただ、その違いは「個人の一つの動作、単一の事象について、現時点での継続をいうのではなく、一つ一つの動作は、それぞれ始まって終わるもの、つまり、点であるけれども、それらが何回もくり返して起こるとき、全体としては点の連続として、つまり線として捉えられるのである」としている。

そして、「習慣」の用法として、寺村は「アフリカデハ、毎日数万ノ人ガ食料不足ノタメニ死ンデイル」のような例については、「集団としての現象の継続」とし、この場合、「異なる主体の動作、できごとが、連続して線とみなされる場合」とであると述べている。

また、過去の出来事について「テイル」を用いる用法に関しては、寺村は二通りの場合があると考え、それぞれ「コノ金魚ガ死ンデイル」のような「結果の状態」と、「葛西善蔵ハ芥川自殺ノ翌年、昭和3年7月ニ死ンデイル」の場合とある。この「葛西善蔵ハ芥川自殺ノ翌年、昭和3年7月ニ死ンデイル」という例について、寺村は「過去の事実を、いま改めて確認し、ある現実の文脈の中でその意義を吟味しようとする心理を反映している」というふうに分析している。そのため、「回顧的」という言葉を使い、この「テイル」は「過去の事実の意義・意味を考える心理の反映である点が特徴である」と述べている。そして、使用場面として、「推理小説で、事件の当事者が、過去の事実を前にして推理を働かせる場面」や、文学史、作家研究、「スポーツ、囲碁将棋の記録、解説記事」などで、「過去の事件を改めて吟味し、その意義づけを行なおうとする場面にひんばんに現れる」としている。

最後に、(d)にあたる「形容詞的動詞の～テイル」について、寺村はこの「テイル」は「その眼前の事態の、他者と比較してのありかたを描こうとする方向に傾くとき、動詞の

一つのアスペクトを表わすというよりも、形容詞のような性格を帯びるようになる」としている。つまり、この種の動詞は金田一が言う「第四種の動詞」にあたる動詞である。

工藤真由美

工藤真由美は(1982, 1995)が日本語のアスペクトについて、「パーフェクト」という概念を提唱している。「パーフェクト」は「完了」という用語の問題点を避け、「テイル」や「テイタ」の機能を明らかにした点で評価されている。本稿では、工藤の「シテイル形式の意味記述」(1982)と『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』(1995)を取り上げ、論じていきたい。

1) 工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」

工藤(1982)は「テイル」の用法の中の「動きの継続」と「変化の結果の継続」について、この二つの意味の共通点は「継続」であるが、「何の継続かで異なっている」と指摘している。また、両者の違いをもたらすものは「動詞の語彙的な意味(正確には、語彙的な意味の共通な側面、すなわちカテゴリーカルな意味)」であるとしている。また、「スル」との対立を以下のように述べている。

基本的意味においては、スルが継続性を排除しつつ、一つの運動をまるごととらえているのに対して、シテイルは、一つの運動を、動きの側面と変化の側面に分割しつつ、どちらかの側面の継続を表している。つまり、「動きの継続」「変化の結果の継続」という二つの基本的意味は「継続」という点で統一しつつ、スルに対立している。(従って、シテイルには二つの基本的意味があるというべきではなく、「継続」という一つの基本的意味の二つのバリエーションであると考えられるべきかもしれない)

(「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第13巻第4号 p74)

また、工藤(1982)は「テイル」が表す「継続」という「アスペクチュアルな意味」がなくなってきた際、「派生的意味が発生する」とし、「テイル」の「派生的意味」は「反復」、「現在有効な、過去の運動の実現」、「単なる状態」の三つであるとしている。

「反復」の「テイル」について、「わたし、強い。夜、父のをこっそり飲んでるから」

のような「同一主体による運動の反復」と、「戦果が毎日挙ってるじゃないか」のような「複数主体による運動の反復」があるとし、「動き動詞からも変化動詞からも区別なく作られる」と述べている。また、「反復」の意味については、「スル」との違いを以下のように指摘している。

「反復」の意味は、「近頃、最近、この頃」のような巾の広い期間を表わす形式、「よく、時々、たびたび、しばしば、しょっちゅう、たまに」のような頻度を示す形式、「毎日、毎朝、一週間に一度、三日おきに、三日ごとに」「いつも、いつでも、常に」などの形式がついたときには、その意味が明示される。このような場合には、スルとシテイルはどちらを使ってもほぼ同じだが、何もつかない場合には、スルには「恒常的反復」（「習慣」）、シテイルには「一時的反復」という差（ニュアンスの差）がでてくるかもしれない。

（「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第13巻第4号 p77）

また、「現在有効な、過去の運動の実現」には、二つの用法があるとし、それぞれ「①過去に実現した運動が、記録として現在残されていることを表わしているもの」と、「②過去に実現した運動が現在の状態になんらかのかかわりをもっていることを表わしているもの」であり、両者とも、「運動の実現そのもの」を問題にしつつ、①の「記録」は「そのことが記録として現在残っていること」を示し、②は「その運動が現在ときりはなされているのではなく、現在と密接な関係をもっていること」を示すと述べている。この派生的意味について、工藤は以下のように述べている。

この派生的意味は、基本的意味の「変化の結果の継続」から派生してきたものと思われるが、この基本的意味においては、以前に実現した一つの運動の変化の側面が継続していることの方を問題とするのに対して、「現在有効な、過去の運動の実現」の場合には、以前に実現した運動そのものが問題となっていて、「変化性」もそしてその「継続性」も問題となっていない。

（「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第13巻第4号 p79）

また、「夏の風邪は湿っている」などのような「運動そのものが問題とならなくなって

いる」というものを「単なる状態」とし、次のような三つの条件の下で、「単なる状態」が動き動詞からも変化動詞からも区別なく発生すると述べている。

- ① 主語が意味上、状態主体でしかありえず運動主体になりえない場合。
- ② 主語が総称的である場合。主語は、特称的な場合には運動主体（変化主体）となりえるが、総称的な場合には運動主体となりえず、状態主体を表わしている。
- ③ 主体のアクチュアルな運動が問題とならなくなって、二格をとりつつ存在文化する場合。

（「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第13巻第4号 pp81-83より）

最後に、工藤は以上述べてきた「テイル」の五つの意味の相互関係を次のようにまとめている。

- (I) 継続 (1) 動きの継続
(2) 変化の結果の継続
- (II) (1) 反復
(2) 現在有効な、過去の運動の実現
- (III) 単なる状態

（「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第13巻第4号 pp84-85）

2) 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』

工藤(1995)は、テンス・アスペクトについて、「文レベルの、様々な表現手段¹⁴からなる<機能・意味的カテゴリー>」として広義に使われているのに対し、「単語レベルの<文法的=形態論的カテゴリー>」をさして狭義にも使われているとし、前者を「アスペクチュアリティ」、「テンポラリティ」と、後者を「アスペクト」、「テンス」と呼んでいる。また、次の表のように奥田靖雄(1977)、鈴木重幸(1979)が行なった体系化を「基本的アスペクト・テンス体系」を呼んでいる。

¹⁴ 工藤によると、形態論的、構文論的、単語派生的、語彙的手段およびその複合を指す。

アスペクト テンス	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

このパラダイムにおける本質的なことは次の2点であると述べている。

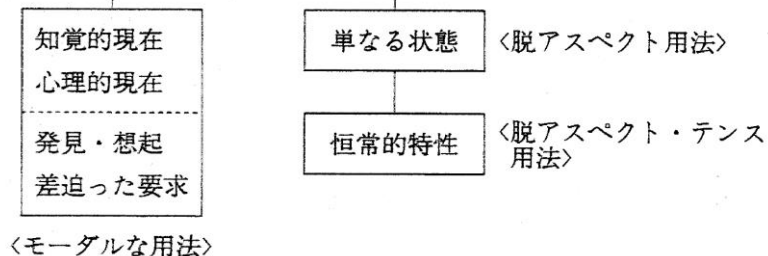
- ① アスペクトもテンスも， marked form と unmarked form の相補的対立関係による一般的文法的意味である。
- ② アスペクトとテンスは，〈内的時間(の様態)〉か〈(発話時との)外的時間〉かで対立しつつ，同時に，〈時間〉を表す点で統一している。

(『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』p36)

「基本的アスペクト・テンス体系」に対し、工藤は次のような「拡大アスペクト・テンス体系」の表を作成している。

〈テンポラルな用法〉

アスペクト テンス	完成性	継続性	パーフェクト性	反復性
未来	スル	シテイル	シテイル	スル /
現在	/	シテイル	シテイル・シタ	スル・シテイル
過去	シタ	シテイタ	シテイタ	シタ・シテイタ



(『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』p43)

また、「テイル」というアスペクト形式の基本的意味は、『動作の継続』であれ『変化結果の継続』であれ、〈継続性〉である」とし、そのほか、以下のように「派生的な意味」も挙げている。

・〈パーフェクト性〉

その本なら、一度読んでよ。

病院にかけつけた時、父は既に 30 分前に死んでいた。

・〈反復性〉

あの子は、マンガばかり読んでいる。

あの頃は、よく、人が結核で死んでいた。

・〈単なる状態〉

この道は曲がっている。

昔、このあたりには川が流れていた。

(『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』p38)

工藤は、「パーフェクト」について、基本的な意味の「継続性」とは異なり、「後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存」を表すものと規定している。また、この「パーフェクト」は、「アスペクト的なものとテンス的なものとは、相互浸透していて(複合化されていて)、単純なアスペクト的意味ではない」と述べている。

「反復性」は、「幅広い期間において繰り返し起こる」ものであり、「ポテンシャルな運動をとらえるものである」としている。従って、「反復性」も単純なアスペクトの意味ではなく、「時間的限定性の抽象化とアスペクト的把握(運動の複数性)とが複合化されている」としている。

また、工藤は「単なる状態」が「脱アスペクト化している」とし、この種の「テイル」は「時間のなかでの展開性を問題にしなくなって、ものの性質や、空間的配置関係をとらえるものである」と述べている。

工藤の「パーフェクト」理論は斬新であり、その後の研究にも深く影響を与えているこ

とは言うまでもない。しかし、近年、この「パーフェクト」に対して反論も現れている。この「テイル」の「パーフェクト」に関しては、第5章で詳しく論じることにする。

庵 功雄

1) 庵 功雄 (2001) 「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」

庵 (2001) は工藤 (1982, 1995) の「パーフェクト」について、「本来機能的に異なる『完了』と『効力持続』が混在しており、その結果、かえってその特徴がわかりにくくなっている部分がある」と反論し、「パーフェクト」を「完了」と「効力持続」とに解体すべきであると主張している。

庵は「-てい-」の中心的な意味は「継続」であるとし、「-てい-」には以下のような用法があると述べている。

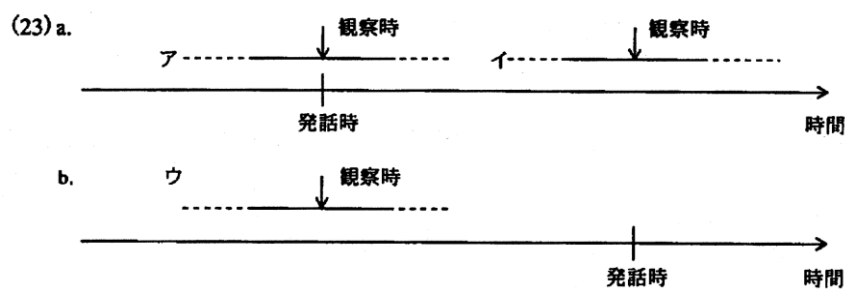
- a. 進行中：田中さんは部屋で本を読んでいる。
外では雨が降っていた。
- b. 結果残存：窓ガラスが割れている。
- c. 繰り返し：田中さんは毎朝ジョギングをしている。
- d. 効力持続：この橋は5年前に壊れている。
- e. 記録：犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。
- f. 完了：彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいた。
- g. 反事実：彼が助けてくれなかったら、私は死んでいた。
- h. 単なる状態：学校の北側に高い山がそびえている。

(『一橋大学留学生センター紀要』4 p79)

「進行中」と「結果残存」を動詞の種類によって区別するとし、「動作が非状態動詞で、主体変化を表さない動詞（非変化動詞）であれば『進行中』の意味になり、主体変化を表す動詞（変化動詞）であれば『結果残存』の意味になる」と述べている。また、「進行中」

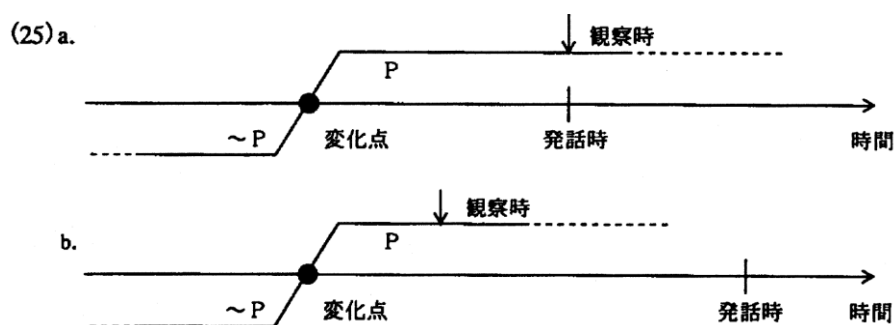
は「ある観察時¹⁵において動作または出来事が続いている」ということを表すのに対して、「結果残存」は「観察時以前に起こった出来事の結果が観察時にも存在している」ということを表すと述べている。また、この二つの用法を図にすると以下のようになるとしている。

「進行中」



(『一橋大学留学生センター紀要』4 p80)

「結果残存」



(『一橋大学留学生センター紀要』4 p81)

「進行中」の図では、アは「～ている」、イは「～ている (だろう)」、ウは「～ていた」を表し、「結果残存」の図では、a.は「～ている」、b.は「～ていた」を表すと述べている。

また、「繰り返し」の「テイル」について、「田中さんは毎朝ジョギングしている」のように「同一主体による動作・出来事が複数存在する場合」と、「地球上では多くの子どもが栄養不良で死んでいる」のように「複数の主体による動作・出来事が存在する場合」があると述べている。

庵は「効力持続」について、「父は若いころたくさん遊んでいる」のように、「過去に起

¹⁵ 庵は「動作・出来事・状態が観察される時点」を「観察時」と呼んでいる。

こった動作・出来事の結果生じた効力が観察時（多くの場合は発話時）にも存在する」ということであると定めている。つまり、この例で言うと、『若いころたくさん遊んだ』という事実の効力として『若い者の行動に理解がある』という現在観察される事実/属性が存在する」ということであると説明している。

「効力持続」と似た用法で、「記録」という用法もあるとして、「記録」とは、「犯人は3日前この店でうどんを食べている」のように、「観察時以前の出来事を何らかの証拠に基づいて述べたり、主語の経歴として述べたりする際に用いられる用法である」としている。また、この用法の特徴として、「何らかの証拠（記録）に基づいて述べる」という点を挙げている。「犯人は3日前この店でうどんを食べている」は、「事件の聞き込みに回っている刑事が聞き込みで得た情報を基に述べている」という場面が典型的な例であるとしている。

また、「完了」とは、「基準時以前に動作や出来事が完結している」という意味を表すとし、「基準時の違い」により、「現在完了」と「未来完了」、「過去完了」があり、「未来完了」は「～ている（だろう）」、「過去完了」は「～ていた」と指摘している。

「反事実」について、以下の三つの例のように、「事実とは反対の内容を述べる場合である」としている。

(52) 彼が助けていなかったら、彼女は {死んでいた/??死んだ}。

(53) もう少し勉強していれば、試験に {合格していた/?合格した}。

(54) 今お金があったら、あのカメラを {買っている/(?)買う} よ。

（『一橋大学留学生センター紀要』4 p89）

この用法の解釈を裏付けるのは英語の「仮定法」の表す主節は「would」ではなく、「通常の（即ち、直説法の）過去形より1つ前の時制を表す完了形が使われていること」から、日本語では「日本語の場合も、通常の過去より1つ前の時点を表す過去完了形を使うことによって、それが直説法ではなく、仮定法の文であることが示されていると考えることができる」と指摘している。ただし、日本語には「法助動詞」がないため、日本語の場合は、あくまでも、「～たら」、「～ば」のように「前件によって反事実が保証された場合に限り、『-てい-』が反事実を表せるにすぎない」と指摘し、この用法はやはり「-てい-」が「過去」より「以前」という意味を持っているという前提に基づいているとしている。

また、この研究では、庵は「単なる状態」という用法を挙げているが、それについてはほとんど論じていないため、本稿では取り上げない。

2) 庵 功雄 (2003) 『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・アスペクト—』

庵の「新しい文法教育のパラダイム構築のための予備的考察」(2012)では、「テイル形」が「日本語学で最も研究が進んでいる分野であることの反映か、教科書でもかなり丁寧に扱われている」と指摘し、以下のように「テイル形」の教科書での提示順について調査を行い、次のように述べている。

具体的には、進行中、結果残存、繰り返し、現在完了（主に否定）については基本的に初級で扱われている。一方、過去完了は初級で扱っているものもある（『JBP』『進学』『新文化』『JBB』）半面、中級以降で扱っているのは1冊（『文化中級I』）だけであり、経験・記録（工藤 1995 の言う「パーフェクト」）に至っては全レベルを通して扱っているのが『みんなの中級I』だけであった。

（「新しい文法教育のパラダイム構築のための予備的考察」

『日中言語研究と日本語教育』第5号 p42）

また、「進行中はともかく、結果残存は産出レベルで考えると、必ずしも習得しやすいわけではなく、中国語話者は次のような誤用をすることが多い」と指摘し、原因を分析している。

(10) (部屋に入ったとき、ガラスが散乱しているのを見て) (張 2001)

?あつ、ガラスが割れた。(cf. あつ、ガラスが割れている。)

(中略)

日本語では、変化動詞においてタ形が使えるのは変化の時点を見たときに限られ、そうでない場合は変化のあとの状態(=テイル形)として捉えなければならないのに対し、中国語では変化が存在したということだけが関与的なので、変化を表す「了」

が使われ、学習者はそれを転移するために(10)のような誤用を犯しがちであるということになる。このような情報は教科書に書かれていれば学習者にとって有益であると考えられるが、今回調査した教科書の中にそのような記述は見られなかった。管見のかぎり、このことを日本語教材で明示的に述べているのは庵・清水(2003)だけである。

(「新しい文法教育のパラダイム構築のための予備的考察」

『日中言語研究と日本語教育』第5号 p42)

では、庵・清水(2003)『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・アスペクト—』¹⁶では、「テイル」の用法については、どのように述べているかを見てみよう。

庵・清水(2003)は、「～している」の基本的な用法は「進行中(動作や出来事が続いている)」と「結果残存(変化の結果が続いている)」とし、それぞれ以下のように説明している。

- ・**進行中**は、動作や出来事を見たとき、その動作や出来事が続いている(続いていた)ということを表す。
- ・「～している」が進行中になるのは、状態動詞¹⁷以外の動詞で、動作や出来事を表す動詞の場合である。

A: 今日、7時ごろどこにいる？

B: そのころは友だちと食事をしていると思う。

- ・**結果残存**は出来事の結果生じた状態がそのときまで続いていることを表す。
- ・「行く、来る、着く、帰る」などの移動を表す動詞の「～している」は進行中を表さない。これは、これらの動詞が存在場所の変化を表すためである。

(『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・アスペクト—』 pp28-30 より)

¹⁶ 『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・アスペクト—』は「上級レベルの日本語を適切に産出するために、文法をわかりやすく整理・説明し使い方の練習をするもの」であるため、練習問題の形として出されるものは筆者がテキストの後ろの解答を参考にし、文章にまとめた。

¹⁷ 『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・アスペクト—』では、「状態動詞」とは、「動作や出来事を表す動詞は『～している』の形を持つが、状態、存在、能力などを表す動詞や動詞の可能形は普通、『～している』の形を持たない。このような動詞を状態動詞と言う」と定義づけている。

また、庵・清水は「～している」のその他の用法について、「繰り返し」、「経験・記録」、「完了」、「反事実」の四つがあるとし、次のように述べている。

繰り返し：同じ動作・出来事が繰り返された場合にも「～している」が使われる。

田中さんは毎日6時に起きている。(同じ主語による繰り返しの場合)

世界では栄養失調で多くの子どもが亡くなっている。(複数の主語の場合)

経験・記録：経験・記録を表す「～している」は、過去の出来事を現在と関連づけて表現する。そのため、過去の出来事であっても、「～している」の形が使われる。

犯人は3日前その店で食事をしている。

完了：「～している/していた」の中には基準となる時間(基準時)よりも前に、「～」の出来事が起こったということを表す用法がある。

田中さんが部屋に入ったとき、電話がなっていた。

反事実：「～している/していた」には、「実際には～ない/なかった」という意味を表すものがある。これを反事実と言う。

(『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・アスペクト—』 pp30～37 より)

また、「完了」の「テイル」について、この場合、「テイル」、「テイタ」ではなく、「スル」、や「シタ」を使うと、たとえば「田中さんが部屋に入ったとき、電話が鳴った」のような場合は、「2つの出来事が連続的(同時の場合もある)に起こることになる」と述べている。

また、庵は「テイル」について、「反事実」という新しい分野を切り開いた興味ある指摘をした。そして、「現在の反事実」は「テイル」で、「過去の反事実」は「テイタ」で表すとも指摘している。「反事実」の文は、「理由の文よりも、後悔やほっとした気持ちなどを表すことが多い」と述べている。ただし、「田中さんが助けていれば、山田さんは{死んでいた/死ななかった}」のように、「否定形」の場合は、「テイル」にしなくてもよいと書いている。

3) 庵功雄 (2010) 「第 1 回 アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号

庵 (2010) はテンスについて、「時制のこと」とし、「動作・出来事や状態が過去、現在、未来のいつ存在する (した) ということ」を表すとしているのに対し、アスペクトについて、「時間に関する出来事の捉え方」のことであると述べている。「アスペクトを表す形式の中で最も重要なのはテイル形」であるとしている。

庵 (2010) は「テイル形の意味という観点」から動詞を「非状態動詞」と「状態動詞」の二つに分け、「状態動詞」には「テイル形なし」としたのに対し、「非状態動詞」には「非 (主体) 変化動詞」と「(主体) 変化動詞」とがあり、それぞれ「テイル形」をつけると、「進行中」と「結果の状態」を表すことになる旨を指摘している。

また、「財布が落ちている」の「落ちる」という動詞を挙げ、日本語の「結果の状態」の特徴について下記のように分析を行っている。

「落ちる」は変化動詞ですから、どこかの時点で「落ちていない」状態から「落ちた」状態に変化しますが、日本語ではその時点 (変化時) は通常問題にならず、「今の状態は過去の時点において生じた「落ちる」という変化の結果である」という捉え方をします。

(「アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号 p44)

そのほか、庵 (2010) は「結果の状態」について、以下の二つの例文を出している。

(11) 道に財布が落ちている。

(12) 電気がついている。

例文 (11) と (12) について、庵 (2010) は日本語母語話者には同じように「結果の状態のテイル形」として認識されているが、違いもある。それは「(11) は財布が落ちた結果、財布は道に『存在』する」、これに対し、(12) にはそのような関係は見られないと述べている。庵は例文 (11) のタイプを「存在型」、例文 (12) のタイプを「非存在型」と呼んでいる。

吉川 洋

吉川 洋 (2011) 『テイル』 構文の意味と曖昧性

吉川 (2011) は、「テイル」の意味について、「太郎は走っている」のような「動作・作用の継続」を表す「テイル」を基本の意味から、「進行」(もしくは、<進行>の読み¹⁸)とし、「窓ガラスが割れている」のような「事態・出来事後の現在までの結果残存」を表す「テイル」を「結果」(<結果>の読み)とし、「太郎は多くの本を読んでいる」のような「過去に起こった出来事を現在より眺め、現在と関連させること」を表す「テイル」を「回想」(<回想>の読み)としている。また、「船が、今海底に沈んでいる」のような「発話時現在で完了・終了していることを表す事態」を「完了」と名づけている。この「完了」は、「結果」と「回想」の上位に位置づけられる読みであると指摘している。

また、吉川(2011)は「進行」を意味する「テイル」は「発話時現在を中心とし、その後で存在する継続動作・作用を表している」と述べ、「結果」と「回想」を意味する場合、「過去の出来事と現在を関連させ、過去と発話時現在との間で存在する継続状態や継続影響を表している」と指摘している。このことから、「進行」、「結果」、「回想」に共通する意味は、「発話時現在での『継続性』」であると述べている。

また、各読みの意味構造を以下のように示している。

<進行>の意味構造：

<現在時の文>+「テイル」

<完了>の意味構造：

<過去時の文>+「テイル」

<結果>の意味構造：

<過去時の文>+「今…テイル」

<回想>の意味構造：

<過去を表す副詞+過去時の文>+「テイル」

(兵庫県立大学環境人間学部研究報告第 13 号 pp107~108)

¹⁸ 「読み」とは、「意味解釈」とのこと。

江田すみれ

江田すみれ (2011) 『『ている』の論理的な文章中での使われ方—『効力持続』『長期的な動作継続』を重点にして—』

江田すみれ (2013) 『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』

江田 (2011、2013)¹⁹は、「実際の文脈」でどのように使われているかによって、「テイル」を「運動短期」、「運動長期」、「繰り返し」、「結果状態」、「効力持続」、「性状」の6種類に分類している。また、「テイル」が「異なる種類のテキスト²⁰の中でどのような意味をもつのか、中心的な用法、周辺的な用法」についても考察を行っている。江田は「テイル」の分類について、以下のようにまとめている。

「**運動短期**」：動作・作用が一定時間継続していることを表す

A：なんで気持ち悪いの

B：いまこの二人してこうやって見合わせてへらへら笑ってんだもん。

「**運動長期**」：動作・作用などを表し、それが長期間にわたることが文脈から明らかかなものをいう。

70年代以降になると、企業の社会への責任や公共性、国際性、文化性、個人の創造性や自由、高度技術への挑戦、といったことを強調するようになってきている。

「**繰り返し**」：個別の動きが繰り返されていること。

胃酸の分泌は、食後にふえ、夜間眠っているときにすくなくなる、というサーカディアンリズムをしめす。

¹⁹ 江田は2011の論文と2013の著書で「テイル」について分類しているが、その分類は、ほとんど同じであるため、一つにまとめた。「テイル」のそれぞれの用法の定義については、2013のものに従った。

²⁰ 江田は「テキスト」という語について、「資料としてコーパスの文脈という意味で使う」と説明。

「**結果状態**」：ある事柄が起こった後の状態を表しているもの、結果動詞を使った文で性状とはとりにくいものをいう。

よくばりの現代人がもとめる眠りは、自然の生理的欲求のレベルをとっくにこえている。

「**効力持続**」：過去に起こった出来事が現在に効力あるいは影響をもつものである。

事態自身は一度過去に終了しており、現在まで継続していない。

そういう人間の本性を洞察していた、近代政治科学の先駆者トマス・ホブズは、人が自然のままに置かれると、「万人の万人にたいする闘争状態」に陥ると、主著である『リバイアサン』（一六五一）に記している。

「**性状**」：時間と関係がない状態を示すものである。結果状態は、結果動詞が表す事柄があり、その結果としてある一定の状態になるが、性状はそのようなきっかけがないものである。

電子がまわる軌道はとびとびにいくつもあって、安定した状態では、電子は規則にそって低い軌道に乗っている。そこへ光が当たると、電子は一時、上の方の軌道にはね上げられる。

(江田すみれ『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』 pp53～59)

また、江田（2011）は、「運動短期」は「日常的な行動の進行」を表しているのに対し、「運動長期」は「社会現象あるいは自然現象、もしくはある現象に対する著者の考えを提示する」ということを表していると述べている。「長期運動」の「テイル」について、大きく「思考・言語」、「運動」、「現象」、「感情感覚」の四つに分類しているが、その中の「思考・言語」、「運動」、「現象」の三つについて考察を行っている。科学的入門書では、「考える」、「研究する」、「といわれる」、「とされる」のような思考や言語に関する表現は「思考・言語」の類に当たるとし、これらの表現は「あるテーマに従って研究し、その結果を述べる文脈で用いられている」と述べ、「注目している」、「見直されている」、「認識されている」、「示している」、「主張している」などの表現を例として挙げている。また、江田は「…

それら原始は、狭い範囲で振動している」、「この間企業として多大の教育コストを負担していることを、これは意味している」のように、「人やものの長期間にわたる動作・作用」をまとめて「運動」としている。「運動」といったものの特徴として、「行為者を明示しない受身文では動作主を不問に付すところからより一層一般化が進み、社会的な状況に近い表現となり、議論の背景的な情報を提示することになる」と指摘している。そして、「石灰分は陸地と海の間をぐるぐると循環していることになる」のように、「自然現象・社会現象」の表現に見られる「行為や活動があまり感じられない」ものを「現象」としている。また、「運動」に対して、「現象」は「動作性や意志性は低い」と指摘している。

江田の分類と従来分類との違いは、従来分類が「進行中の動作・変化」としてきた用法を「運動短期」と言い、これに対して従来あまり指摘されてこなかった「運動長期」を提唱したことである。また「性状」という用法は実は金田一が言う「単純状態」であると考えられる。また、研究方法としては、江田は文単位ではなく、文章単位として分析を加えていることが大きな特徴である。ただし、江田が挙げている用例を見てみると、連体修飾や「テクル」と「テイル」とが結合した形なども入っており、そのようなものは文末の「テイル」と分けて考察すべきだと考えている。

2.2 「テイル」構文の用法の分類に関して

これまでの「テイル」に関する先行研究の分類のみを簡略に以下にまとめておく。

金田一春彦(1950、1955)

金田一は、「国語動詞の一分類」において、動詞を「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」と「第四種の動詞」の四つの類型に分けている。このうち、「テイル」を付けられる動詞は、「継続動詞」、「瞬間動詞」と「第四種の動詞」の三つであるとしている。

また、金田一は「日本語動詞のテンスとアスペクト」の中で、「テイル」の用法と関係のある分類を以下のようにまとめた。

既然態：雪が積もっている。

進行態：彼は本を読んでいる。

反復進行態：この頃は栄養失調で人がどんどん死んでいる。

単純状態態：この道は曲がっている。

藤井正（1966）『動詞＋ている』の意味

藤井は先行研究の中で、以下の七つの分類している。

動作の進行：今読んでいる

持続：今じっとしている

結果の残存：今は結婚している

経験：すでに知り合っている

単純状態：すぐれている

反復：今有名人がどんどん死んでいる

存在：小説の中に表現されている人物

高橋太郎（1969）「すがたともくろみ」

高橋は「うごきのつづいていることをあらわす動詞」であると述べ、「テイル」の基本的な用法を以下のように四分類している。

進行の状態：千曲川の水はさびしく音もなくながれていた。

結果の状態—主体：夜はとうにあけている。

くりかえしの進行：十日に一ぺんぐらいのわりでけんかをしていた。

経験・記録：私は若い時に二三度この山にのぼっています。

吉川武時（1976）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」

吉川は「テイル」構文を次の五つに分類している。

動作・作用の継続：みんなが外で遊んでいまいます。

動作・作用の結果の状態：ところどころに大木がたおれていまいる。

単なる状態：この道はまがいまっている。

経験：すでに飛行学校を卒業していたガガーリンは、さっそく志願した。

くりかえし：ほんとうは毎日けんかばかりいましているのに。

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』

寺村(1984)は、「テイル」構文を以下の五つに分類している。

動作や現象が継続していることを表す場合：

赤ン坊ガ泣イテイル。

雪ガ降ッテイル。

ある過去(以前)のできごとが終わって、その結果がいまある状態として残っていることを表す場合：

金魚ガ死ンデイル。

アソコニ百円玉ガ落ちテイル。

現在での習慣を表す用法：

父ハコノ頃6時頃ニハ起キテイル。

父ハ最近朝30分程ジョギングヲシテイル。

過去の事実を回想して、いわば頭の中に再現させるような用法：

ソノ年、東京ニハ二度大雪ガ降ッテイル。

アノ人ハタクサンノ小説ヲ書イテイル。

品定めの、性状規定的、その意味で形容詞のような、物事の様子、性質、形状、印象などを表す用法：

コノ作品ガ一番スグレテイル。

団子ハ繭ノ玉ノ形ヲシテイル。

工藤真由美(1982「シテイル形式の意味記述」)

工藤(1982)は「テイル」構文の基本的な意味は「継続」であるとし、その用法を大きく「基本的意味」と「派生的意味」の二つに分類している。それぞれ以下のようになる。

- 1) 基本的意味 (1) 動きの継続
- (2) 変化の結果の継続
- 2) 派生的意味 (1) (a) 反復
- (b) 現在有効な過去の運動の実現
- (2) 単なる状態

工藤真由美(1995『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』)

基本的な意味：**動作の継続**

変化結果の継続

派生的な意味：**パーフェクト性**

その本なら、一度読んでよ。

病院にかけつけた時、父は既に 30 分前に死んでいた。

反復性

あの子は、マンガばかり読んでいる。

あの頃は、よく、人が結核で死んでいた。

単なる状態

この道は曲がっている。

昔、このあたりには川が流れていた。

庵 功雄 (2001. 2)『新しい日本語学入門』

庵 (2001) は『新しい日本語学入門』という著書で、「テイル」構文の意味について論じ、その基本的な意味は継続であるとしている。そして、「テイル」構文の用法を以下の 5 つに分けている。

進行中：子供が遊んでいる。

結果の残存：私が来たとき、窓ガラスが割れていた。

繰り返し：私は毎日公園を散歩している。

経験・記録：3 日前犯人はこの店で食事をしている。

完了：来週までにこの本を読み終わっているだろう。

また、「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」(2001. 7)では、「テイル」と「テイタ」をまとめて、「一てい一」として考察を行い、以下のように用法を挙げている。

進行中：外では雨が降っていた。

結果の残存：窓ガラスが割れている。

繰り返し：田中さんは毎朝ジョギングをしている。

効力持続：この橋は5年前に壊れている。

記録：犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。

完了：彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいた。

反事実：彼が助けてくれなかったら、私は死んでいた。

単なる状態：学校の北側に高い山がそびえている。

庵功雄・清水佳子（2003）『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・アスペクト—』

進行中： A: 今日、7時ごろどこにいる？

B: そのころは友だちと食事をしていると思う。

結果残存

繰り返し：田中さんは毎日6時に起きている。

経験・記録：犯人は3日前その店で食事をしている。

完了：田中さんが部屋に入ったとき、電話がなっていた。

反事実：時間があれば、（今既に）その映画を見ている。

上原由美子（2003）「テイルの反復解釈について」

進行：太郎が新聞を読んでいる。

結果：窓ガラスが割れている。

経験・パーフェクト：その男は、先週この店に立ち寄っている。

反復：太郎は毎朝ジョギングをしている。

石田尊（2011）「テイル構文の項構造と解釈の関係について」

動作継続：健太が走っている。

結果継続：コップが割れている。

経験：涼子は先週その男と会っている。

完了：涼子はそのときにはもう意識を取り戻していた。

習慣：健太は毎日海で遊んでいる。

吉川洋（2011）『「テイル」構文の意味と曖昧性』

進行：太郎は走っている。

結果：ドアの鍵が壊れている。

回想：太郎は3度アフリカへ行っている。

完了：船が、今海底に沈んでいる。

江田すみれ（2013）『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』

「運動短期」：A：なんで気持ち悪いの

B：いまこの二人してこうやって見合わせてへらへら笑ってんだもん。

「運動長期」：70年代以降になると、企業の社会への責任や公共性、国際性、文化性、個人の創造性や自由、高度技術への挑戦、といったことを強調するようになってきている。

「繰り返し」：胃酸の分泌は、食後にふえ、夜間眠っているときにすくなくなる、というサーカディアンリズムをしめす。

「結果状態」：よくばりの現代人がもとめる眠りは、自然の生理的欲求のレベルをとっくにこえている。

「効力持続」：そういう人間の本性を洞察していた、近代政治科学の先駆者トマス・ホッブスは、人が自然のままに置かれると、「万人の万人にたいする闘争状態」に陥ると、主著である『リバイアサン』（一六五一）に記している。

「性状」：電子がまわる軌道はとびとびにいくつもあって、安定した状態では、電子は規則にそって低い軌道に乗っている。そこへ光が当たると、電子は一時、上の方の軌道にはね上げられる。

第3章

「テイル」の用法に関する分類

第3章 「テイル」の用法に関する分類

3.1 個々の用法のまとめ

第2章でまとめてきた先行研究を自分なりにまとめてみると、以下の五つになる。

1 「進行態」、「動作の進行」、「進行の状態」、「動きの継続」、「進行中」、「運動短期」・・・

今、本を読んでいる。

雨が降っている。

2 「既然態」、「単純状態態」、「変化の結果の継続」、「単なる状態」「結果の残存」、「結果状態」、「性状」・・・

雪が積もっている。

この道は曲がっている。

椅子に座っている。

3 「反復進行態」、「反復」、「くりかえしの進行」、「くりかえし」・・・

田中さんは毎朝ジョギングをしている。

この頃は栄養失調で人がどんどん死んでいる。

4 （これまでの先行研究にはこの分類はほとんど見られない）

日曜日は朝から晩まで掃除をしていた。

今日は朝からずっと勉強している。

5 「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」・・・

あの人はたくさんの小説を書いている。

犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。

そのほか：「運動長期」、「反事実」・・・²¹

では、施設に収容されないでもなんとかやっつけていける老人たちはスウェーデン

²¹ これらの用法に関しては、広く認められていないため、本稿では対象外とする。

ではどんな生活をしているか。次に福祉サービス面をみてみよう²²。(運動長期)

彼が助けてくれなかったら、私は死んでいた。(反事実)

このうち、1番の用法、つまり、動作の最中を表す用法と、3番のくりかえしの意味を持つ「テイル」は広く認められており、ほとんど問題がないと言えよう。しかし、「日曜日は朝から晩まで掃除をしていた」や「今日は朝からずっと勉強している」のような、「ずっと」、「朝から晩まで」、「一晩中」などの副詞で表される一定の時間継続して行われる動作に関する「テイル」については、述べているものは少ない。これは1番のある時点での進行中の動作を表すというアスペクトの用法とは異なり、このような「テイル」はある時点からある時点までのある時間内の継続・持続の動作や状態を表しているので、「進行中」としては説明不可能だと考えられる。また、これは3番の「くりかえし」とも異なり、ある行為を何度も何度も行うことではなく、ある一つの行為の継続・持続を表している。おそらく、先行研究では、進行中のアスペクトや繰り返しの一種として考えているのではないだろうか。この「長時間の継続・持続」は、江田(2011、2013)の「運動長期」という名称と似ているが、しかし、江田の「運動長期」の定義を見ると、「運動長期」は「動作・作用などを表し、それが長期間にわたることが文脈から明らかなもの」であり、例文は「70年代以降になると、企業の社会への責任や公共性、国際性、文化性、個人の創造性や自由、高度技術への挑戦、といったことを強調するようになってきている」のようなものであるため、「日曜日は朝から晩まで掃除をしていた」や「今日は朝からずっと勉強している」などとは明らかに異なることがわかる。筆者はこのような用法は進行中でもなく、繰り返しでもなく、「長時間の継続・持続」と考える。

また、「テイル」に関しては、最も問題を残しているものは2番の「状態」に関するものと5番のいわゆる「経験」の用法である。「状態」に関しては、極狭い範囲で研究がなされており、総合的に論じたものはない。また、「結果の残存」と分類されてきた「テイル」については、筆者はこのような「テイル」には既に動作性がなくなっているため、これも「状態」と分類すべきではないだろうかと思う。5番の用法に関しては、「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」……といった名称を用いられているが、これを見てわかる通り、同じような用例から、このように異なる多様な解釈がなされており、問題が未だ残されていることがわかる。従って、

²² 実際の例文は長いので、一部だけ取り上げることにする。

本論文では、この二つの問題に絞って考察を行なっていくが、その前に、「テイル」の用法に関して、筆者の見解をまとめておくことにする。

「テイル」の基本的な用法をこれまでの先行研究と同じ、動作や変化の真っ最中を表すものと状態を表すものの二つであると考え、この二つの用法を「進行中の動作・変化」と「状態」とする。この二つのアスペクト的用法のほかに、派生的な用法が三つあり、それぞれ「繰り返し・習慣」、「長時間の継続・持続」と「立証のための情報提示」としたい。次に、自分なりの分類を示しておくことにする。

1 「進行中の（動作・変化などの）動き」

今、テレビを見ている。

雨が降っている。

雪が目の前でどんどんとけている。

- 2 「状態」
- 単純状態：この道は曲がっている。
 - 父に似ている。
 - 結果の状態：雪が積もっている。
 - 花が咲いている。
 - ニューヨークに行っている。

3 「繰り返し・習慣」

私は毎日朝ドラを録画している。

毎週日曜日に近くのスーパーで買い物している。

4 「長時間の継続・持続」

日曜日は朝から晩まで掃除をしていた。

今日は朝からずっと勉強している。

5 立証のための情報提示

あの人はたくさんの小説を書いている。（金田一）

犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。（庵）

以上の分類のうち、2番の「状態」と5番の用法については、第4章と第5章で詳しく論じていくので、ここでは用例のみを取り上げることにする。次に、その他のほとんど定着していると思われる1番の「進行中の（動作・変化などの）動き」と3番の「くりかえし・習慣」、そして、従来あまり取り上げられてこなかった4番の「長時間の継続・持続」について、先行研究に基づき、考察していきたいと思う。

3.2 「進行中の（動作・変化などの）動き」

これまでの「テイル」の用法に関する先行研究の中で、最も定着している用法は、「テイル」の基本義でもある進行中の動作や変化などの動き²³を表す「テイル」であると言えよう。この種の「テイル」は、ある時点で、動作や変化などの動きが丁度起こっている最中で、その時点より前から継続していることを表す。この定義はほぼすべての先行研究で共通している。過去の時点における進行中の動作や変化などの動きを表すとすれば、「テイト」になる。また、現在や未来のある時点における進行中の動きを表せば、「テイル」になる。

次に、市販の日本語教科書や各メディアから収集した「進行中の（動作・変化などの）動き」を表す「テイル」の用例を挙げる。

- ① ミラーさんは今電話をかけています。（『みんなの日本語』初級 p114）
- ② 今会議室で松本さんと話しています。（同上）
- ③ この辞書を借りてもいいですか。
…すみません、ちょっと……。今使っています。（『みんなの日本語』初級 p122）
- ④ キムさんは立ってテレビを見ています。（『ひらけ日本語』初級 上 p105）
- ⑤ 今雨がふっています。つめたい風もふいています。（『ひらけ日本語』初級 上 p92）
- ⑥ 太郎が（今）ごはんを食べている。（『新しい日本語学入門』 p153）
- ⑦ ピエールさんはへやでほんをよんでいます。（『日本語』 p419）
- ⑧ ジョンソンさんはいまパンをたべています。（『日本語』 p427）
- ⑨ スミスさんはいまおんがくをきいています。（同上）
- ⑩ わたしはいまこどもとあそんでいます。（同上）

²³ ここで、「動き」という言葉を使う理由は、「動作」であれば、有情物でなければならない。しかし、「雨が降っている」や「風が吹いている」のような自然現象については、「動作」とは言えないので、「動き」という両方に対して、使用可能な表現を用いた。

「進行中の（動作・変化などの）動き」は「テイル」の基本的な特徴である「継続性」が最も良く表れている用法であり、図で表すと以下のようなになる。

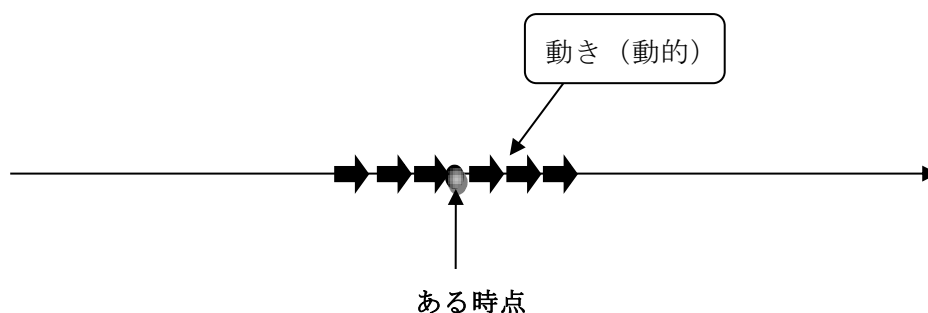


図 3.2 「進行中の（動作・変化などの）動き」の「テイル」

3.3 「状態」

「状態」の「テイル」に関しては、従来の先行研究では、1 番の「進行中の（動作・変化などの）動き」と共に、基本的な用法の一つとされ、「単純状態」と「結果の状態」の二つに分けて分類されることが多かった。しかし、筆者は「単純状態」と「結果の状態」共に「動作性」が見えず、実質は「状態」を表していると考える。この点で、共通性がほかの用法より多いので、同じく「状態」と分類し、それぞれ、「状態」の中の下位分類としたほうが学習者にとってわかりやすいのではないかと考えている。

また、「状態」の「テイル」について研究を行う場合、この用法が動詞の種類と深くかかわっているため、それぞれの用法にどのような動詞が結びつくか、それが重要であると考える。しかし、そのような研究はまだ少なく、また、「行く」、「来る」のような移動を表す動詞のいくつかに「テイル」をつけると、進行中の移動の動きではなく、到着後の状態を表すことになるが、このことに触れているものもあることはあるが、詳しい考察はほとんどなされていないことに気づいた。そのため、ほかの移動動詞も「行く」、「来る」と同じグループに入れていることが多いが、実は、すべての移動動詞にこのような特徴があるわけではない。筆者は第四章で「状態」の「テイル」について詳しく述べるが、ここでは、「状態」に分類すべきいくつかの代表例を挙げるだけに留めることにする。

- ① この道は曲がっている。(金田一 1955)
- ② 山が後に聳えている。(金田一 1955)
- ③ 秀吉の顔は猿に似ている。(金田一 1955)

- ④ わたしは今横浜に住んでいます。(『ひらけ日本語』初級上 p 92)
- ⑤ わたしはくつを8足持っています。(『ひらけ日本語』初級上 p 92)
- ⑥ 今じっとしている。(藤井 1966)
- ⑦ 窓ガラスが割れている。(庵 2001)
- ⑧ きれいなはながたくさんさいています。(『ICJ』初級 Part2 p43)
- ⑨ あそこにくるまがとまっていますね。(『ICJ』初級 Part2 p48)
- ⑩ おおかわさんはフランスにいらっています。(『ICJ』初級 Part2 p51)

また、「状態」の「テイル」の詳しい用法は第4章で論じていくが、この用法のコア・イメージを示すと、以下のようになるだろう。

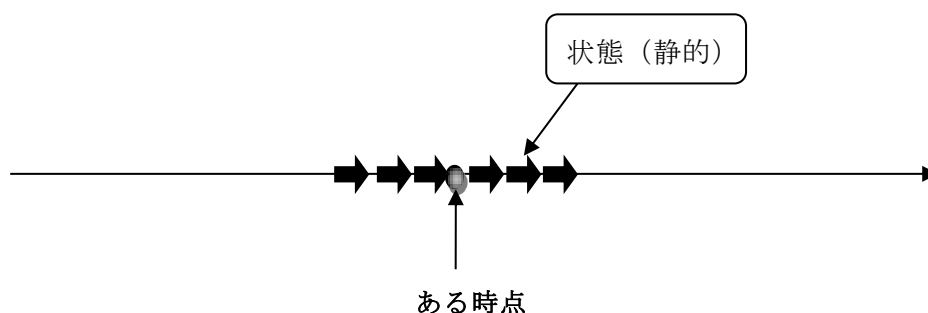


図 3.3 「状態」の「テイル」

3.4 「長時間の継続・持続」

この用法は、これまでの先行研究ではほとんど触れたものがなく、江田(2011、2013)の「運動長期」がこれにあたる用法であると思われる。江田は「運動長期」について、「動作・作用などを表し、それが長期間にわたることが文脈から明らかなものをいう」と述べている。しかし、この「運動長期」という名称は、実は適切ではない部分もあると思う。「運動長期」は字面から見ると、「長期」の「運動」を指していると思われるが、「朝から晩まで勉強している」のような「テイル」は「運動長期」という言葉では説明しにくい。また、「ずっと立っていた」のような用例の「立っている」というのは「運動」ではなく、「状態」であり、「運動長期」という言葉ではうまく説明できない。むしろ、これは「長時間の継続・持続」といったほうがより適切ではないだろうか。

この用法は「朝から晩まで」や「一日中」、「一晩中」、「一年中」などのような「長時間」を示すものが文脈上存在する場合に用いられる。焦点はその時間の長さにある。しかし、

この用法は1番の「進行中の（動作・変化などの）動き」と2番の「状態」の「テイル」とは異なっている。1番の用法と2番の用法はすべてある時点での動作や変化或いは状態の様相を表す典型的なアスペクトの用法であるのに対し、この「長時間の継続・持続」の「テイル」は長時間に焦点がある用法である。そのため、「長時間の継続・持続」はそもそもアスペクトの用法ではない。これは、「進行中の（動作・変化などの）動き」と「状態」とは区別し、他の用法として立てるべきであると考え。また、1番と2番のアスペクトの用法と区別するため、焦点にある「長時間の継続・持続」という名をつけるべきであろう。

また、この用法を扱うテキストはあるにはあるが、用例は比較的少ない。そのため、コーパスなどによって用例を収集した。

- ① アリさんはきのう夜9時から12時まで勉強をしていました。（『ひらけ日本語』初級上 p 93）
- ② 朝から強い風がふいています。（同上）
- ③ ゆうべはひとばんじゅうあめがふっていました。（『日本語』 p419）
- ④ あなたはゆうべもおそくまでべんきょうしていましたか。（『日本語』 p423）
- ⑤ 彼女は一日中、電話でお喋りをしている。（コーパス『少納言』）
- ⑥ 「…永久にしゃべらないんじゃないか」ととても心配だった。しかし、八歳となった今は、朝から晩まで機関銃のようにしゃべりまくっている。（同上）
- ⑦ あんな愚にもつかないことを言ってるやつを相手に一晩中しゃべってるなんて」（笑）とか言っていましたね。（同上）
- ⑧ オリコンでずっと10位以内を保ってるのですよ！（ヤフー知恵袋）
- ⑨ 夕陽がさしこむ病室で長い間、私はその原稿を読んでいました。（コーパス『少納言』）
- ⑩ この歯は数年前からずっとぐらついていて、地元の歯医者さんに様子を見ましようといわれていた歯。（ヤフーブログ）

「長時間の継続・持続」の「テイル」は1番と2番の「テイル」と異なり、アスペクトの用法ではないため、図も次のように異なってくる。

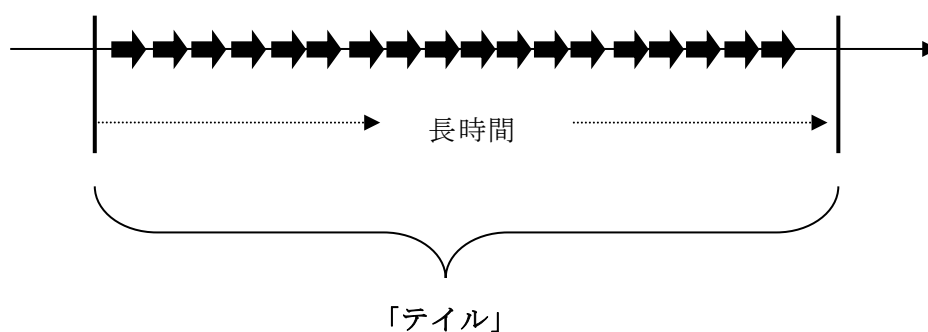


図 3.4 「長時間の継続・持続」の「テイル」

3.5 「繰り返し・習慣」

「繰り返し・習慣」の「テイル」に関しては、同一の主体によって、同じことが何度も反復して行われる行為を指す場合と、複数の主体によって繰り返し行われる動作を指す場合がある。これは、これまでの先行研究では、ほぼ定着した説明であるが、上原（2003）は、「ライトが光っている²⁴」や「京子が太鼓をたたいている」のような、従来「進行中の動作・変化」と分類されてきた用例を、「反復」としている。また、「太郎は毎朝ジョギングをしている」のように、「複数の期間にわたって事象が習慣的に起きること」を表す「複数期間反復」に対して、「ライトが光っている」の二例を「一つの期間に事象が繰り返し起きること」を表す「単一期間反復」と呼んでいる。この「単一期間反復」と解釈される「テイル」について、上原（2003）は『『進行』も『結果』も表さない事象、すなわち事象開始時点から事象が成立していない事象、および主体が変化を被らない事象である』と述べている。上原が指摘した通り、「テイル」のこの用法は状況によって、二つに分かれる。

次に、「繰り返し・習慣」の典型的な用例としては、次のような例が挙げられる。

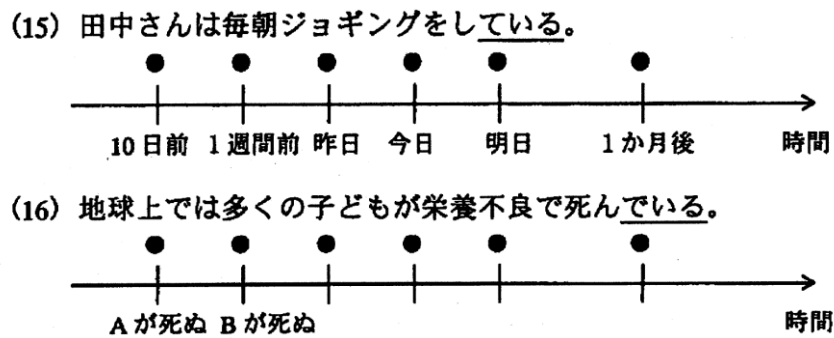
- ① わたしは会社ではたらきながら、夜日本語を勉強しています。（『ひらけ日本語』初級 上 p 118）
- ② わたしは毎日日本語学校で勉強をしています。（『ひらけ日本語』初級 上 p 92）
- ③ マナさんは毎週ざっしを買っています。（『ひらけ日本語』初級 上 p 93）
- ④ 赤いランプがついたりきえたりしています。（『ひらけ日本語』初級 下 p 47）
- ⑤ 田中さんは毎日 6 時に起きています。（『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・

²⁴ 上原はこの「ライトが光っている」の「光っている」は「点滅している」という意味である。

アスペクトー』 p30)

- ⑥ 世界では栄養失調で多くの子どもが亡くなっている。(同上)
- ⑦ わたしは毎年富士山に登っています。(『日本語表現文型辞典』 p169)
- ⑧ この道ではよく交通事故が起きているから気をつけてください。(同上)
- ⑨ 父は昨年から仕事で毎月1回中国へ行ってるんです。(同上)
- ⑩ 健康体操も毎朝欠かさずやっている。最近足腰が弱くなっているのので簡単なものだけをやっている。(コーパス『少納言』)

庵は「繰り返し・習慣」の二つの用法、つまり、単一主体と複数主体の違いを次のように図で示している。筆者も同様に考えている。



(『一橋大学留学生センター紀要』4 p82)

図 3.5.1 「繰り返し・習慣」の「テイル」の二つの用法

この「繰り返し・習慣」は「テイル」のほかに、以下の用例のように「ル」も使われる。

- ① わたしはまいばんじゅうじごろねます。(『ICJ』初級 Part 1 p327)
- ② がっこうははちじはんにはじまります。(同上)
- ③ わたしはまいにちさんじはんにかえります。(『ICJ』初級 Part1 p335)
- ④ ぎんこうはさんじにおわります。(『ICJ』初級 Part1 p342)
- ⑤ あなたはまいあさなんじごろごはんをたべますか。(『ICJ』初級 Part1 p348)

一体この「繰り返し・習慣」の「テイル」と「ル」の違いは何であろうか。次の例を見

てみよう。

田中さんは毎朝ジョギングをしている。(庵 2001)

この例を元に、次のような二つの例を作ってみた。

田中さんは毎朝ジョギングをする。

田中さんは毎朝ジョギングをしている。

この二つの例を見ても区別がつかない。しかし、「三か月前から」という条件を付加してみると、次のようになる。

*三か月前から、田中さんは毎朝ジョギングをする。

三か月前から、田中さんは毎朝ジョギングをしている。

つまり、期間を付加すると、「田中さんは毎朝ジョギングをする」のような「繰り返し・習慣」の「ル」は非文になることがわかる。このことから、「テイル」はある一定の期間内の繰り返しであることがわかる。逆に、「ル」は期間のつかない長年にわたって恒常的に繰り返されている習慣であると考えられる。また、言い換えれば、「ル」は変わらない繰り返しであり、「テイル」は始まりがあり、将来は終わるかもしれない期間性のある繰り返しであるということが言えるかもしれない。

a メッカはイスラム教の聖地であり、毎年多くのイスラム教徒が巡礼に訪れる。

(コーパス『少納言』)

b 佐呂間には10年ほど前から毎年訪れています。

(「佐呂間町サポーターズ倶楽部」HP より)

この a、b の用例に「ル」と「テイル」の違いをあてはめてみると、「毎年多くのイスラム教徒が巡礼に訪れる」という習慣は、長年にわたって恒常的に繰り返されてきたものである。これは「ル」の用法と適合する。これに対して、b の「10年ほど前から毎年訪れて

います」は、「10年ほど前から」とあるように、十年前という一定の期間内の繰り返し、習慣を表していることがわかる。これは「テイル」の用法と適合する。これを図式にすると以下のようなになる。

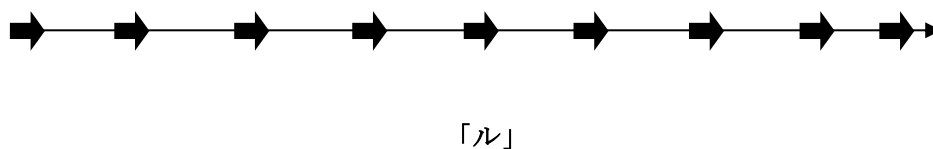


図 3.5.2 「繰り返し・習慣」の「ル」

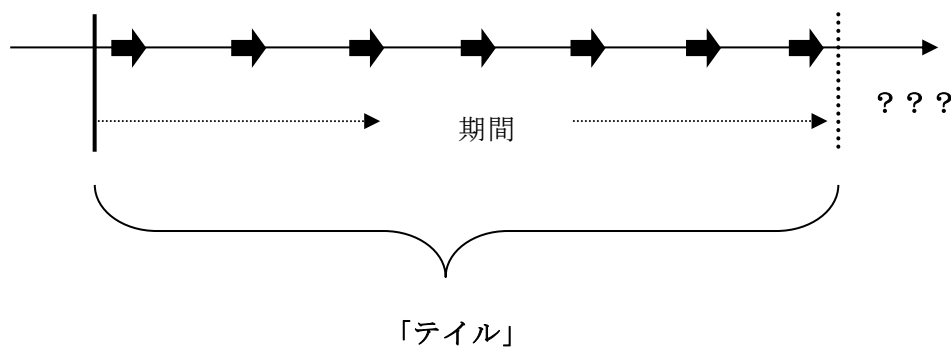


図 3.5.3 「繰り返し・習慣」の「テイル」

3.6 「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」・・・（立証のための情報提示）

「テイル」のこれらの用法は、いわゆる「経験」の用法である。しかし、この用法に関しては、同じことを論じているが、上に示したように様々な見解があり、いまだ統一的な結論は全く出ていない状態である。本節ではこれまでの先行研究やテキストに出てくる用例を並べるだけに留め、詳しい分析は第5章で行うことにする。

- ① あ的那个人はたくさんの小説を書いている。（金田一 1950）
- ② 彼は昔三年間も英国で勉強している。（藤井 1966）
- ③ この橋は5年前に壊れている。（庵 2001）
- ④ 中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の

人物 X に会っています。 (工藤 1982)

- ⑤ その本なら、一度読んでよ。 (工藤 1995)
- ⑥ そういう人間の本性を洞察していた、近代政治科学の先駆者トマス・ホップスは、人が自然のままに置かれると、「万人の万人にたいする闘争状態」に陥ると、主著である『リバイアサン』(一六五一)に記している。 (江田 2013)
- ⑦ アポロ 11 号は 1969 年に月に着陸している。 (『日本語表現文型辞典』 p171)
- ⑧ モーツァルトは 12 歳のときに、オペラを作曲している。(同上)
- ⑨ わたしは 3 歳のときにこの病気 (はしか) にかかっているから、もうかかることはない (同上)
- ⑩ 犯人は 3 日前この店でうどんを食べている。(庵 2001)

第4章

「テイル」の「状態」の用法について

第4章 「テイル」の「状態」の用法について

「状態」の「テイル」という用法をはじめて提示したのは金田一春彦であった。それまでは、「テイル」は単純に「進行態」、すなわち進行中の動作を表すものとして捉えられてきた。しかし、金田一は「すわっている」や「立っている」などは、進行中の動作を表しているのではなく、その動作の終わった後の状態を表しているということに気づき、現在の日本語におけるテンスとアスペクト研究の先駆けとなったことは周知の事実である。

4.1 先行研究における「状態」の「テイル」の研究とその問題点

金田一は、「進行中の動作」を表すものとその動作が終わった後の結果の残存した「状態」を表すものとを区別し、それらの違いを「継続動詞」と「瞬間動詞」という区分によって説明した。つまり、結果の残存した状態を表すものは、「瞬間動詞」に「テイル」を付けることによって表現される。一方、「進行中の動作」は「継続動詞」に「テイル」を付けることによって表現される。

金田一は、「国語動詞の一分類」（1950）では、この動詞と「テイル」の関係についての4つに分類している。

1、「ある」、「できる」、「切れる」などを「状態動詞」と名付け、これらの動詞には「テイル」がつけられない。

2、「読む」、「書く」、「笑う」などのような、「ある時間内に続いて行われるような種類のもの」、つまり、継続可能な動詞を「継続動詞」と名付け、「テイル」をつけると、「動作の進行」を表す。

3、「死ぬ」、「点く」、「消える」などの「その動作・作用は瞬間に終わってしまう動作・作用である動詞」を「瞬間動詞」と名付け、これらの動詞に「テイル」がつくと、「その動作・作用が終わってその結果が残存していること」を表す。

4、「聳える」、「すぐれる」、「おもだつ」、「ずばぬける」、「ありふれる」などを「第四種の動詞」として、「ある状態を帯びることを表す動詞」で、常に「テイル」の形で状態を表すのに用いられると述べている。

この分類のうち、第3の「その動作・作用が終わってその結果が残存していること」について、「花が咲いている」、「太っている」、「曇っている」なども、これに分類されるはずである。しかし、「咲く」、「太る」、「曇る」などの動詞は決して「その動作・作用は瞬間に終わってしまう」動詞ではないことが明らかである。

また、金田一は「日本語動詞のテンスとアスペクト」(1955)で、「雪が積もっている」と「この道は曲がっている」の用法を二つに分け、それぞれ「已然態」、つまり、「以前起こった動作・作用の結果がまだ存続している」という用法と、「単純状態態」、つまり、「現象の起り終りということを考えず、ある状態にあることを表す」という用法の二つに分けている。この金田一の研究から、現在の多くの研究では、「この道は曲がっている」のような「単純状態」と、「窓ガラスが割れている」のような「結果残存(已然態)²⁵」の二つに大きく分けている。しかし、「単純状態」と「結果残存」とには共通した部分がある。それは、発話時点から見て、両方の用法が表しているものには、すべて動作性がなく、状態性を表しているということである。このことから、筆者は「結果残存」はむしろ結果の残った状態を表しているのではないかと思う。従って、「窓ガラスが割れている」のような「テイル」は「結果残存」というよりは、結果の残った状態、即ち「結果の状態」というべきではないかと考える。

このことから、「状態」の「テイル」を、下の図のように、「単純状態」と「結果の状態」の二種に分けることにした。

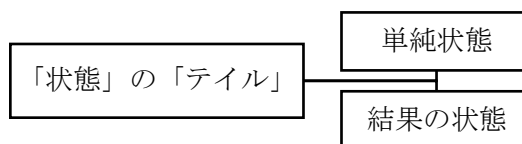


図 4-1 「状態」の「テイル」に関する構造

4.2 「単純状態」の「テイル」について

4.1 で述べたように、「状態」を表す「テイル」を「単純状態」と「結果の状態」に分け、本節では、「単純状態」の「テイル」について論じることにする。

「状態」の「テイル」を考察する際に、最も重要なのは、動詞の種類である。「単純状態」の「テイル」を表す動詞は、金田一が言う「第四種の動詞」とあるという説が広く認められており、金田一は、この「第四種の動詞」について、「聳える」、「すぐれる」、「おもだつ」、「ずばぬける」、「ありふれる」などのような、「ある状態を帯びることを表す動詞」で、常に「テイル」の形で「状態」を表すのに用いられる動詞であると述べている。それ

²⁵ 現在多くの研究で使っている「結果残存」という名称は金田一の「已然態」に当たる。

以降の研究では、この種の動詞の存在と特徴に関してはほぼ定着してきているが、この種の動詞の名称に関しては、定着していないことに気付いた。「聳える」、「すぐれる」、「おもだつ」のような動詞は、物事の様子、性質などを表し、時間の始まり終わりに関係のない動詞であり、常に「テイル」を付けて用いられ、形容詞的な特徴が挙げられる。また、金田一(1950)は「ある」、「できる」のような「テイル」の付かない動詞を「状態動詞」としている。それと区別するため、筆者は「聳える」、「すぐれる」のような動詞を「形容詞的状态動詞」としたい。

しかし、「単純状態」を表しているのは、果たして「形容詞的状态動詞」のみであろうか。コーパス『少納言』から収集した以下の用例を見てみよう。

- ① 保留地で診療所を開いているほかに、町の病院にも勤めている。
- ② いま、札幌に住んでいる。
- ③ 3日程前からずっと微熱があり、風邪だと思いつつ家で休んでいるんですが…

上の用例を見てみると、共通点は「動作性」が見えにくく、「状態」を表していることが挙げられる。①の「診療所を開いている」というのは、患者の治療から、店の経営まですべて店を維持していくためにやっていかなければならないことをやるということを指し、つまり、具体的に一つの動作に絞ることが不可能である。これと同様に、同じ文に現れる動詞「勤める」もこのような特徴を持っている。病院であれ、会社であれ、そこに「勤めている」ということは、単純に一つの動作によって作業ができるわけではないので、すべての仕事内容を含めて「勤めている」と言うのではないかと考えている。また、②の「住んでいる」が指すのは、人間が食べたり、寝たり、掃除したりすることなど、すべての生活に関する動作を含んでいる。これらの「(店を)開く」、「勤める」、「住む」などの動詞は、様々な動作が含まれているため、具体的な動作が感じられなくなり、「テイル」をつけると、「進行中の動作・変化」ではなく、「状態性」が現れてくるものと考えられる。つまり、①の「(店を)開いている」、「勤めている」と②の「住んでいる」のような動詞は多様な動作により成立している動詞であり、具体的な動作は見えにくい。このような動詞と関連しているのは、例えば、「料理をしている」、「掃除をしている」のようなものであるが、「料理をする」や「掃除をする」は、要する時間が短く、一連の具体的な動作をイメージすることができる。しかし、「勤めている」、「住んでいる」のように、通常「継続」している時間

が長く、一連の具体的な動作としてはイメージできないので、「動作性」が弱いということがわかる。また、「住む」と「勤める」場所を表すには、「で」ではなく、「に」を使っていることから動作性が弱いことが覗える。

また、③の「休んでいる」は①の「(診療所を) 開いている」、「勤めている」と②の「住んでいる」の反対で、複数の動作が存在するのではなく、何かをしないということを表している。つまり、なんらかの具体的な動作を意識的にやるということとは正反対であり、具体的な動作がなく、これらの動詞に「テイル」をつけると、「進行中の動作・変化」では説明しにくいから、「状態」となるのではなかろうか。「休む」と同様に考えられるのは「さぼる」や「怠ける」といった動詞である。

つまり、日本語には、「住む」、「勤める」、「休む」、「さぼる」、「怠ける」などに「テイル」を付けると、「進行中の動作、変化」でもなく、「結果の残存」でもなく、ある「状態」の継続を表しているように思われる動詞が存在する。これらの動詞は、多様な動作によって構成されており、具体的な動作が感じられなかったり、何もしないという意味で、全く動作性は感じられないという特徴を持っている。このような動詞を「動作性状態動詞」と名付けたい。

以上のことをまとめ、以下のような表を作成した。

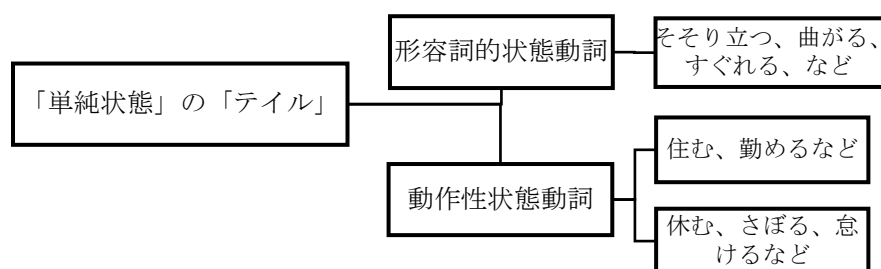


図 4-2 「単純状態」に関する動詞分類

つまり、「単純状態」を表す「テイル」について、従来の研究では、金田一が「第四種の動詞」と名付けた以外は、特に名称を付けた例はなく、今回本稿では、「そそり立つ」、「すぐれる」のような動詞を「形容詞的状态動詞」とし、「住む」、「勤める」、「休む」、「さぼる」などを「動作性状態動詞」とした。この二種の動詞は「テイル」を付けると、全て「状態」を表すことになる。この「動作性状態動詞」に関しては、今まで触れた研究はな

いので、まだ検討する必要があるだろう。今回は時間の関係で、この課題について、ここで終わるが、将来の課題としたい。

4.3 「結果の状態」の「テイル」について

本稿では、従来ほとんど「状態」として分類されてこなかった所謂「結果の残存」を表す「テイル」も具体的な動作が消え、状態しか表さないことから、「結果の状態」としたい。この「結果の状態」という名称は、既に高橋（1969）によって使用されているが、高橋は「山がそびえている」のような「単純状態」も「結果の状態」の中の一つとしている。しかし、筆者はこの「結果の状態」と4.2で論じた「単純状態」と共に「状態」という大きなカテゴリーの下位分類としたい。

また、従来の研究は大抵金田一の研究に基づき、「瞬間動詞」に「テイル」を付けると、「結果の状態」を表すことになる」と指摘してきたが、この種の「テイル」と動詞との関係は研究する余地がまだ残されている。ここでは、どのような動詞に「テイル」を付けると「結果の状態」を表すことになるのかについて、動詞の特徴により、それぞれ論じていくことにする。

4.3.1 先行研究

金田一（1955）は「雪が積っている」のような、「以前起った動作・作用の結果がまだ存続している」ことを表す「テイル」を「已然態」とし、この用法はテンスの中の「過去態に対応する」と述べている。また、「已然態」には「非過去態の已然態」と「過去態の已然態」とがあり、「積っている」は「非過去の已然態」に属し、「積っていた」は「過去態の已然態」に属していると指摘している。

金田一は（1950）は、「死ぬ」、「点く」のような「動作・作用は瞬間に終わってしまう動作・作用」を表す動詞を「瞬間動詞」と言い、この「瞬間動詞」に「テイル」をつけると、「その動作・作用が終わってその結果が残存している」ということを表すと指摘している。金田一の指摘しているように、この種の「テイル」を研究する際には、動詞が深く関わっていることがわかる。

また、鈴木（1957）は「瞬間動作性動詞」に「テイル」をつけると、「涙が出てる」、「来ている」、「貴女の肖像は私の室にかかっております」、「立派な方になっています」などの例のように、「動詞の表わす状態の変化が以前におこり、現在（特定の未来、特定の過去）

なおその結果がたもたれていることを表わす」と述べている。

金田一の「テイル」が「結果の残存」を表わすのは、「その動詞が瞬間動詞であるため」という説に対して、藤井（1966）は「それは、その動詞が、あとにある結果をもたらすような動作・作用を表わす動詞であるためである」と反論している。また、金田一の動詞の分類では、「継続動詞」と対立するものは「瞬間動詞」である。これに対して、藤井（1967）は、「瞬間動詞」とは別に「結果動詞」という動詞分類を立てた。この「結果動詞」は「あとにある結果をもたらすような動作・作用を表わす動詞」とであると定義し、金田一が分類している「結果の残存」は「動詞が瞬間動詞であるためではない」と反論している。たとえば、「結婚する」は「結婚生活」、「(花が) 散る」は「花が地上にある」という「結果」をもたらすと例を挙げている。また、「結婚する」、「(花が) 散る」のほかに、「終る」、「(なくしたものが) 見つかる」、「始まる」、「出発する」、「到着する」、「(病気が) なおる」、「(雨が) 止む」、「知る」、「しゃがむ」なども挙げている。しかし、藤井のこの定義によれば、「結果動詞」は、結果を残す動詞全てを指しているため、「食べる」や「作る」のような動詞もこれに含まれ、「食べている」や「作っている」も「進行中の動作」ではなく、その動作の結果の残った状態ということになってしまう。

高橋（1969）は「夜はどうにあけている」、「会心のえみが彼の心からきえさっていた」、「もうなにもかもかわっています」のように、「うごきがおわったあとにうごきの結果としてうごきの主体の変化した状態がつづいていること」を表す「テイル」を「結果の状態」と名づけている。また、「山がそびえている」や「道がまがりくねっている」のような「うごきの結果でなく、はじめからそういう状態のものをあらわすもの」、つまり、ほかで言う「単純状態」も「結果の状態」の中の一様としている。高橋は「単純状態」と「結果の状態」の共通点に気づいたが、「単純状態」を表すものがはじめから変化がないものであるため、「結果の状態」の下位に置くことで、自らの「うごきがおわったあとにうごきの結果としてうごきの主体の変化した状態がつづいていること」という定義と矛盾している。

また、吉川（1976）も「結果の状態」という名称を使い、これを「動作・作用が行われて、ある結果があらわれた場合、その結果に注目してその（静的）状態をあらわすものである」と定義づけている。また、藤井氏の「結果動詞」の本質について、「変り目のあるものはそれでもよいが、ないものはその先の新しい状態を考えて、そこに至ることを表わすこと」とであると指摘し、実際に「継続動詞と結果動詞とが対立しているように見える」と述べている。また、「結果の状態」の意味を実現する動詞は、「自他の対をなす動詞の自動

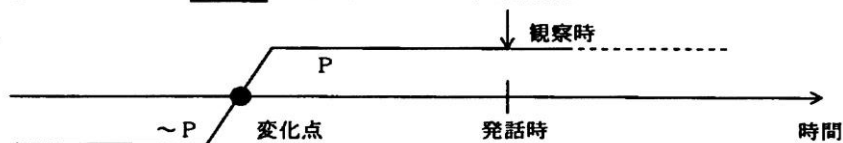
詞の方に多い」とも指摘している。しかし、吉川も「単なる状態」と「動作・作用の結果の状態」のように、それぞれ別の範疇の用法として二つに分けている。

庵（2001）は「窓ガラスが割れている」の「ーていー」を「結果残存」と呼び、これは「観察時以前に起こった出来事の結果が観察時にも存在していることを表す」と述べている。また、この「結果」は「(主体の) 変化の結果」であると指摘している。このことを次の図のように示している。

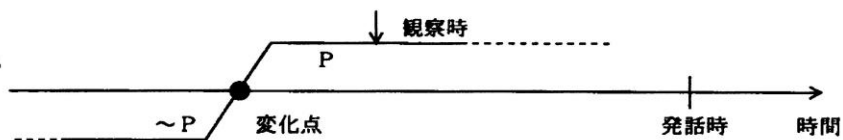
(24) a. 窓ガラスが割れている。(現在における結果残存)

b. 窓ガラスが割れていた。(過去における結果残存)

(25) a.



b.



(『一橋大学留学生センター紀要』4 p81)

4. 3. 2 緩慢変化動詞+「テイル」

4. 3. 1 で述べたように、従来の研究では、「瞬間動詞」に「テイル」をつけると、「結果の状態」を表すことになる。筆者も同様に考える。しかし、逆算して、「結果の状態」を表すものは、全て「瞬間動詞」であろうか。

藤井（1976）は、「疲れている」について、『結果の残存』を表わすと言い得るが、『つかれる』は『瞬間の動作・作用を表わす』とは言い難い」と指摘しているように、「(花が) 咲いている」、「太っている」、「痩せている」、「曇っている」など、「進行中の動作・変化」ではなく、「状態」を表している。しかし、「咲く」、「太る」、「痩せる」、「曇る」は決して瞬間的に変化が起こる「瞬間動詞」ではないことは明らかである。藤井は「つかれる」のような「徐々の変化の結果」を表す動詞はたくさんあると指摘し、「かいかぶる」、「やにさがる」、「ひねくれる」、「ささくれる」、「すりきれる」、「やせる」、「薄化粧する」などを挙げているが、これらの動詞に対する名称までは挙げていない。

藤井の説に対して、吉川（1976）はこれらの動詞について、以下のように述べている。

これらは一方では継続動詞と瞬間動詞の中間に位置し、他方“～ている”の形で結果の状態を表わすところから、結果動詞であると見るわけである。そこで、つかれていない状態からつかれている状態に至るまでに、瞬間的な変り目があるかという、これはないから、変り目に至ることが結果動詞の本質だとする説は修正しなければならなくなる。変り目のあるものはそれでもよいが、ないものはその先の新しい状態を考えて、そこに至ることを表わすことが結果動詞の本質だとしなければならない。

(「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』 p182)

つまり、吉川は「結果動詞」の本質について、必ず動作或いは変化の「変り目」、すなわち、変わった瞬間があるわけではなく、その変わった瞬間がはっきりなくても、「その先の新しい状態」を表すことこそ「結果動詞」の本質であると指摘している。吉川もこのような動詞について、名づけていないが、「太る」、「痩せる」のような動詞は「瞬間動詞」とは別であるが、同様に「結果動詞」の一種であることが指摘している。筆者も吉川の説に基づき、考えていきたいと思う。

初級日本語教科書に必ず出てくる「花が咲いている」を例にして、分析してみると、「花が咲いている」は「花が咲く」という変化の最中ではなく、既に咲いている、ときには満開状態といえる状態になっていることを指している。しかし、「咲く」という動詞が表している動作・作用は決して瞬間的に終わるものではないことは言うまでもない。この「咲く」という動作・作用を分析してみると、むしろ咲き始めて、咲き終わるまでの時間は瞬間とは逆に長時間にわたるものであることが分かる。ただ、この長時間の「咲く」という動作・作用は緩慢であり、それを観察することは不可能である。われわれが知るのは、咲く前と咲いた後の結果のみである。「咲く」のような動詞に「テイル」をつけると、その動作・作用の終わった後の結果の残存した状態を表している。

筆者は「咲く」のような変化が緩慢で人の目では観察できないような動詞を「緩慢変化動詞」と名づけたい。「緩慢変化動詞」はその変化の遅さゆえに人はその結果のみに気づくだけである、その意味で「緩慢変化動詞」も「結果動詞」の一種である。しかし、従来の「瞬間動詞」とは真逆で、瞬間的に起こる変化などがまったくなく、いつ変化が起きたかという「変り目」を観察することは不可能である。また、その徐々に変化していく過程認

識できず、「テイル」で表すことはできないが、長時間にわたっての変化が終了した後の状態を「テイル」をつけて表すこのような動詞を、「瞬間動詞」に対して、「緩慢変化動詞」と名付けたい。この「緩慢変化動詞」と「瞬間動詞」の共通点は、前者があまりにも変化が緩やかでその変化の途中を人は認識できず、また、表すこともできない。また、「瞬間動詞」もその変化の動きがあまりにも短く、その瞬間的な変化の過程を人は表すことはできない。つまり、この変化の過程を表すことができないという点で両者は共通しており、ともに結果のみを表している。従って、「緩慢変化動詞」も「瞬間動詞」も「結果動詞」と分類可能である。

同様に、藤井氏が挙げている「太る」、「痩せる」といった動詞もあまりにも変化が緩慢で、その太ったり、痩せたりする変化中の様子を人は知ることができない。そのほかに、「疲れる」、「風邪を引く」、「病気にかかる」などの人間の生理的状態変化に関する動詞は、症状が出るまで、長時間を要しているため、その変化の境目を知ることができない。したがって、この種の動詞も「緩慢変化動詞」に分類すべきであろう。

また、「曇る」、「晴れる」という動詞も同様である。もし、あえてこの変化の様子を表せば、「テイル」ではなく、「曇ってきた」、「晴れてきた」のように、「てきた」を使うべきであろう。

日本語では、上に挙げたような「結果動詞」は必ず「瞬間動詞」か「緩慢変化動詞」のいずれか一つに入るわけではなく、「瞬間動詞」と「緩慢変化動詞」に跨る動詞も多い。例えば、「髪が傷んでいる」の「傷む」は、髪に熱風を当てると、その瞬間傷んでしまうこともあり、この際の「傷む」は「瞬間動詞」に分類すべきであろう。これに対して、普段頻繁にカラーしたり、パーマをかけたりすることによって、或いは髪へのケアを怠ることによってダメージが生じることもある。この場合は、いつ「髪がダメージを受けた」という変化の境目は全く知ることができないので、この場合は「緩慢変化動詞」に分類すべきであろう。「傷む」のような、両方に跨る動詞も存在している。例えば、「焦げる」、「剥がれる」、「沈む」、「変わる」などは、状況により、「瞬間動詞」とも「緩慢変化動詞」とも説明可能である。

4.3.3 移動動詞＋「テイル」

4.3.3.1 先行研究

「行く」、「来る」のような移動を表す動詞についても、「テイル」をつけると、移動の

途中ではなく、到着した後の状態を表すということが既に指摘されている。しかし、果たして全ての移動を表す動詞に「テイル」をつけると、移動後の状態を表すことになるのだろうか。このことについて、まず、先行研究から見ていくことにする。

既に述べてきたように、金田一（1950）は、「テイル」の用法との関係から、動詞を「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四種の動詞」と分類している。

また、「継続動詞」と「瞬間動詞」とにまたがるものが多いとし、その例として「所謂場所の移動を表わす動詞は総てこの二類の動詞を兼ねている」と述べている。具体例として、動詞の「来る」を挙げ、「向うから此方へ移動する途中の動作全体」を意味する場合は「継続動詞」であり、「此方へ到着した瞬間」を意味する場合は「瞬間動詞」であるとし、「此方へ近づきつつある人」を指して、同時に「今此方へ来ている」と「まだ此処まで来ていない」の両方が言えると主張している。また、「来る」と同様に、「行く」「入る」、「出る」、「上る」、「下る」などの動詞も「運動の途中をも表わし得るし、到着の瞬間をも表わし得る」と述べている。

その後、鈴木（1957）はこの金田一の動詞分類を受け、「来る」、「行く」を「立つ」などと同様に「瞬間動作性動詞」と分類し、この種の動詞の特徴は「変化だけが問題となる動きを表わす動詞である」としている。

鈴木（1957）は移動を表わす動詞「行く」、「来る」を「瞬間動詞」と分類しているが、「行く」、「来る」は明らかに「瞬間動詞」という名称には適合しないと思う。これは、鈴木が金田一の「国語動詞の一分類」の分析を受け、「行く」、「来る」は「テイル」をつけると、動作が終わった後の状態を表わすため、逆算して「瞬間動詞」と分類したものと思われる。しかし、この分類では、意味的に矛盾が生じる。

庵（2001）は「発話時以前のある時点で起こった変化の結果が発話時以前から発話時を超えて発話時以降のどこかの時点まで続くこと」を表している用法を「結果残存」と名づけている。また、「結果残存」を表すのは、「動詞の語彙的意味の中に変化を含んでいるもの（（主体）変化動詞）」に限られると述べている。この「変化の中心的なもの」は「状態の変化」であり、「位置の変化」も含まれていると言っている。その例として、「行く」、「来る」を挙げている。これらの動詞に「テイル」をつけると、「動作が継続していること」を表せず、「結果残存」を表していると述べている。その具体例として、「田中さんはアメリカに行っています」について、「アメリカに向かう途中」を表せず、実際の意味は「田中さんはアメリカに行った＋（今）アメリカにいる」と解釈している。このような動詞を「位

置変化動詞」と名づけ、「割る」のような「変化動詞」の使い方と同じであるとも述べている。

また、吉川(2011)は、「太郎は、アメリカに行っている」という例について、表層表現内の「アメリカに行く」という動詞句は、「その内部に格助詞『に』によって着点が表されており、位置変化を表している」と述べている。また、この「アメリカに行っている」は以下に示されるような意味構造で表される三つの読みが可能であるとしている。

- a. <今+太郎はアメリカに行く>+「テイル」
= <進行>の読み=太郎は、アメリカへ行っている。
- b. <太郎はアメリカに行った>+「テイル」
= <結果>の読み=アメリカへ行き、アメリカにいる。
- c. <以前+太郎はアメリカに行った>+「テイル」
= <回想>の読み=アメリカへ(以前に)行ったことがある。

(兵庫県立大学環境人間学部研究報告第13号 pp104~111 より)

しかし、「太郎はアメリカに行っている」の「行っている」は「今」という現時点を表す副詞をつけるとしても、決して「行く」という動作の進行中を表すことになるとは言えない。「行く」のような移動を表す動詞は、「歩く」、「走る」、「着く」などほかの移動を表す動詞と区別して考察を行わなければならない。

4.3.3.2 移動結果動詞について

これまでの先行研究を見ると、初期段階から移動の動詞「行く」の「行っている」が「進行中」を表していないことは既に認識されているが、ただ、その理由として、「行く」、「来る」は「立つ」と同様「瞬間動詞」であるためだと分析されている。しかし、「行く」、「来る」は明らかに瞬間的に終わる動作ではない。例えば、「家から学校に来る」、「日本からアメリカに行く」という動作は決して瞬間的に終わるものではない。「行く」、「来る」が一定の時間を要して実現する動作であると考えられる。また、金田一は、「近づきつつある人を指す」場合も、「来ている」が使えると述べているが、日本語の「来ている」で表されているのは、やはりその場所、目的地に到着し、そこに既にいるということを表わしているのではないだろうか。その人が「近づきつつある」状態を表わすには「やってくる」見えた

瞬間に「来た」を使うべきではなかろうか。

その後、動詞の分類が進んだことにより、多くの研究で「行く」、「来る」は「瞬間動詞」ではなく、「移動動詞」に分類されている。しかし、このような用法は、限られた動詞にしかなれないが、これまで体系的に整理した研究は見られない。果たして全ての「移動動詞」に「テイル」をつけると、移動の途中を表さず、到着後の状態を表すことになるのか或いはそうではないのかといった検証は今のところ見られない。本節では、「行く」、「来る」の他に、どのような「移動動詞」がこのような特徴を持っているのかについて分析していきたい。

まず、典型的な「行く」と「来る」を挙げ、考察を行なっていくことにする。「田中さんはアメリカに行っています」について、庵（2001）は「田中さんはアメリカに行った＋（今）アメリカにいる」という意味を表していると述べている。また、「メアリーは今日本に来ている」については、「メアリーは日本に来た＋（今）日本にいる」を表していると述べている。つまり、庵は「行っている」について、「行って、そしている」というふうに解釈している。しかし、「行っている」の「テイル」は一体化しており、「テイル」で一つの単位になっているのではないかと思う。また、庵は「行く」、「来る」について、「割る」のような「変化動詞」と同様に「(位置の) 変化を表す」動詞であるとも分析している。しかし、「割る」と「行く」、「来る」は明らかに異質なものであり、広い意味で考えても、「変化動詞」と言うより、「移動動詞」と言ったほうが適切ではないかと思う。

日本語では、過去であれば、「田中さんは去年アメリカに行った」と言えるが、現在のことであれば、「さっき、田中さんはアメリカに行った」というと、田中さんは少し前に出発したということを表す。当然、そこには到着の意味はない。また、現時点における「行った」は「ここ」から離れた瞬間も表すことが可能である。例えば、田中さんがドアの向こうに消えた瞬間、「田中さんは今行った」となる。これは出発を表している。その移動の途中を表すには、「アメリカに向かっている」のように、「向かう」というその他の動詞で表現するか、「アメリカに行くところだ」、「アメリカに行く途中だ」のような「テイル」とは異なる表現を用いなければならない。また、田中さんはアメリカに着いた瞬間から、「行っている」がようやく使えるようになり、その後、田中さんがアメリカに滞在している状態を表すにも、「行っている」が使われる。

また、「来る」も同様である。例えば、相手の姿が現れた瞬間、あるいは話者の視野に入った瞬間、「来た」と言うが、「来ている」で表すのはこちらへ向かって移動中というこ

とではなく、話者のいる場所に既に到着した後の状態を表していると考えられる。こちらへ向かって移動中ということを表すには「やってくる」や「来る途中」のような表現で使わなければならない。

以上のことをまとめてみると、「行った」と「来た」は次の図 4-3 のようになる。

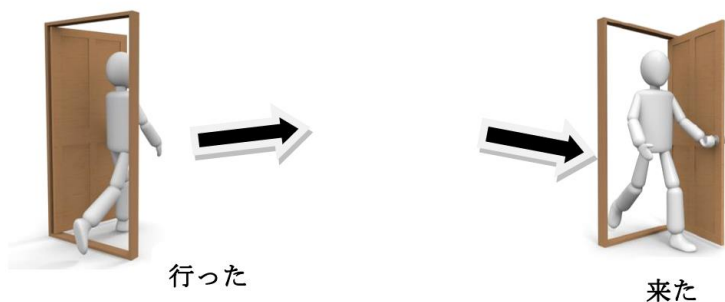


図 4-3 「今、行った」、「今、来た」

次に、行く前から、到着後までの一連の過程を図にすると以下の図 4-4 のようになる。

「今から、会社に行く」

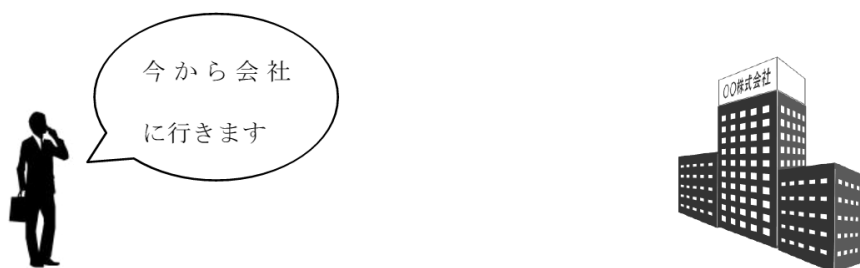


図 4-4 「今から、会社に行く」

「今、会社に行った」



図 4-5 「今、会社に行った」

「今、会社に向かっている」

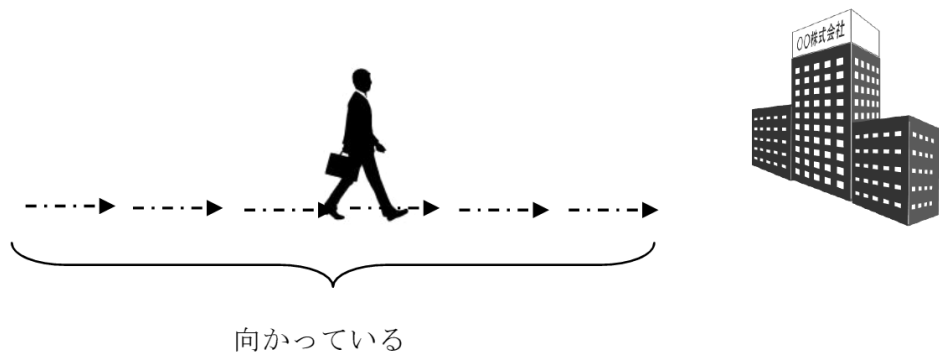


図 4-6 「今、会社に向かっている」

「今、会社に行っている」



図 4-7 「今、会社に行っている」

では、日本語の移動動詞には、「行く」、「来る」の他に、このような特徴を持った動詞はまだあるのだろうか、李善姫（2009）の「日本語の移動動詞の研究」に掲載されている移動動詞の分類表と孫逸珊（2015）の「動詞一覧表」に基づき、考察していきたいと思う。

まず、以下は李氏の「移動動詞の分類と各類の動詞の範疇的意味」の表である。

表 1 移動動詞の分類と各類の動詞の範疇的意味

		動詞類	範疇的意味	その類独自の意味	動詞	
出発 志向 動詞		純粹出発動詞	出発の 位置変化		はなれる	
		出発目的地動詞		目的地への移動	たつ、さる	
		出発到着経路動詞		到着の位置変化、経路動作	おりる	
経過 志向 動詞	経由	純粹経由動詞	経過 動作	経由	すぎる、よぎる、こえる、くぐる	
	志向	経由到着動詞		到着の位置変化	ぬける、わたる	
	動詞	経由経路動詞		経路動作	とおる	
		純粹経路動詞		経路 動作	無方向性	めぐる、つたう、まわる、たどる
	経路	無方向経路動詞			ぶらつく、うるつく、さまよう	
	志向	経路到着動詞			到着の位置変化	くだる
	動詞	模態経路方向動詞			移動模態、ある方向への移動	はう、あるく、かける、およぐ、すべる
	模態経路目的地動詞	移動模態、目的地への移動	はしる			
到着 志向 動詞		純粹到着動詞①	到着の 位置変化		いたる、うつる、つく、おちむく、しりぞく	
		純粹到着動詞②		移動体が複数	むらがる、あつまる、むれる	
		純粹到着動詞③		(経路と結びつく)	もどる、いく、かえる、くる	
		純粹到着動詞④		(経由点と結びつく)	はいる	
		到着出発動詞		出発の位置変化(経由点と結びつく)	でる	
	到着経路動詞	経路動作	あがる、のぼる			
目的地 動詞		純粹目的地動詞	目的地への 移動		むかう	
方向 志向 動詞		方向到着動詞	ある方向へ の移動	到着の位置変化	さがる	
		方向経路到着動詞		経路動作、到着の位置変化	すすむ	
		模態方向経路目的地動詞		移動模態、経路動作、 目的地への移動	とぶ	

この表に挙げられている 45 語の移動動詞は、『角川類語国語辞典』第二版（1985）および『分類語彙表』第十七版（1977）の「移動の開始地点から位置変化」、「移動の終了地点へ位置変化」、「ある場所経過する移動動作」の 3 項目から選び出した「和語自動詞に属する単純動詞」である。

李氏は上の表のように、日本語の移動動詞を「出発志向動詞」、「経過志向動詞」、「到着志向動詞」、「目的地志向動詞」、「方向志向動詞」の 5 つに分けている。また、この 5 類について、更に 21 種に下位分類していることがわかる。しかし、上の表に挙げられている移動動詞は 45 語に限られているので、孫氏の「動詞一覧表」から、五十音順で以下の動詞を選び出した。また、他動詞に「テイル」をつけると、ほとんどが「進行中の動作・変化」になるため、本稿では移動中の動作・変化を表す動詞は対象外とし、また、李氏と同様に、自動詞に属する移動動詞²⁶のみを以下のように選び出した。

²⁶ 複合動詞は研究対象外とする。

《移動に関する自動詞一覧表》（語頭音の五十音順）

歩く、集まる、上がる、あらわれる、いたる、行く、動く、移る、うろつく、追う、陥る、落ちる、訪れる、赴く、泳ぐ、及ぶ、下りる、降りる、帰る、駆ける、通う、消える、下る、来る、超える、転がる、さかのぼる、下がる、避ける、彷徨う、去る、退く、進む、過ぎる、滑る、それる、立つ、発つ、たどる、近づく、近寄る、伝わる、伝う、着く、出る、遠ざかる、遠のく、通る、届く、飛ぶ、逃げる、抜ける、逃れる、のぼる、入る、走る、弾む、外れる、離れる、引く、経る、曲がる、回る、向かう、群がる、群れる、めぐる、潜る、戻る、横切る、渡る

以上の動詞に「テイル」をつけると、「行く」、「来る」と同様に、「移動中の動作・変化」ではなく、到着後の状態を表すものは、「帰る」と「戻る」、「訪れる」、「赴く」の四つのみであり、これらの動詞は同様の特徴を持っていることがわかる。

「家に帰っている」というのは、家に向かって帰る途中を決して表しているわけではなく、既に帰宅し、家にいる状態を表している。また、会社にいる同僚から見れば、その人が会社を出た瞬間に、「今、帰った」と言う。その意味は、ただ会社を出て姿が見えなくなったということであり、「帰る途中」や「家に着いた」という意味ではない。つまり、出発点から見れば、その場所から家に向かって離脱した瞬間を指している。それに対して、家にいる家族から見ると、「今、帰った」というのは、玄関に入ってきた瞬間という時点でのみ使う。その後の家にいる状態は「帰っている」を使わなければならない。つまり、到着点から見れば、「帰った」は帰宅した瞬間を表すことになる。「帰っている」は会社から家までの間を指してはいない。また、「(家に) 帰っている」と同様に、「(会社)に 戻っている」も「戻る途中」を表さず、既に目的地（家）に到着した後の状態を表している。

以上のことをまとめると、「行く」、「来る」、「帰る」、「戻る」は、その動作・作用に一定の時間を要する、すなわち、「瞬間動詞」ではないにも関わらず、「テイル」をつけると、進行中や途中を表さず、その結果の状態のみを表す動詞であることが明らかである。また、その移動中をその言葉で表すことはできないという特徴がある。この種の動詞に「タ」をつけると、その動作に移った瞬間（出発点から離れた瞬間）か、またはその動作が完了した瞬間（到着点に着いた瞬間）しか表さない。また、「行く」、「来る」、「帰る」、「戻る」に

「テイル」をつけると、移動の途中を表さず、結果の状態しか表さない。この種の動詞を「移動結果動詞」と名付けることにする。「移動結果動詞」は日本語には数少ないが、この種の動詞の一番の特徴としては、「瞬間動詞」ではないが、「テイル」をつけると、「瞬間動詞」と同じような行為が終わった後の状態を表すという働きをしているということである。

本稿では、明らかに性質が違う動詞に関する分析は省略するが、一見似たような性質を持っているように思われる動詞、「入る」、「落ちる」、「消える」、「着く」、「出る」、「届く」、「向かう」について、少し分析を加えたいと思う。なお、これらの動詞はこれまでの先行研究では、よく「行く」、「来る」と同じグループに分類されてきた動詞である。

金田一（1950）は「来る」と「行く」は「入る」、「出る」、「上る」、「下る」などの動詞と同様に「運動の途中をも表わし得るし、到着の瞬間をも表わし得る」と述べている。しかし、「入る」と「出る」は瞬間的に終わる動作を表す動詞であり、「行く」、「来る」のように一定の時間を必ずしも要するわけではない。つまり、「入る」、「出る」には、元々「到着」と「出発」の意味が含まれており、李氏が言う「経路点と結びつく」移動動詞であるため、これは「行く」、「来る」などとは異なることがわかる。また、「消える」という動詞の焦点は姿などが消えた瞬間であり、経路などは必須ではないため、典型的な「瞬間動詞」であると言えよう。「入る」、「出る」、「消える」と異なるものは、「向かう」である。「向かう」には到着の意味は全くなく、「向かった」で出発を表し、「テイル」をつけることによって、その移動の途中を表す。

同じ「瞬間動詞」として分析可能なのは「着く」と「届く」である。「着く」と「届く」は両方とも到着の意味であり、区別としては、「着く」は人に関して言い、「届く」は物に関して言うという点で異なっている。この二つの動詞も「瞬間動詞」の一種と思われる。この二つの動詞が着目しているのは経路より、到着の瞬間である。

また、「落ちる」に「テイル」をつけると、二つの意味がある。一つは「進行中の動作・変化」であり、目で確認できる「落ちる途中」を表す。ただし、この「進行中の動作・変化」を表す場合には、「落ちている」に「少しずつ」や「徐々に」、「だんだん」、或いは「急速に」のような継続性を表す副詞などをつけることにより、成立する場合もあることがあるが、非常に稀である。「落ちる」途中を見ている際には、「落ちている」よりも「落ちてきた」と言ったほうが自然である。

もう一つの意味は、地面に到着後の落ちた状態を表す。たとえば、りんごが落ちる瞬間を丁度見かけた時には、「りんごが落ちた」と言うが、この場合、変化の瞬間を目撃したた

め、「落ちた」を使う。また、木の下の道に落下したりんごがあるのを見た時には、「りんごが落ちている」としか言えない。また、木の下を通っている時に、上から落下してくるりんごを見た時には、「りんごが落ちてきた」という表現を使うのではないだろうか。図で表すと、次の図 4-5 のようになる。

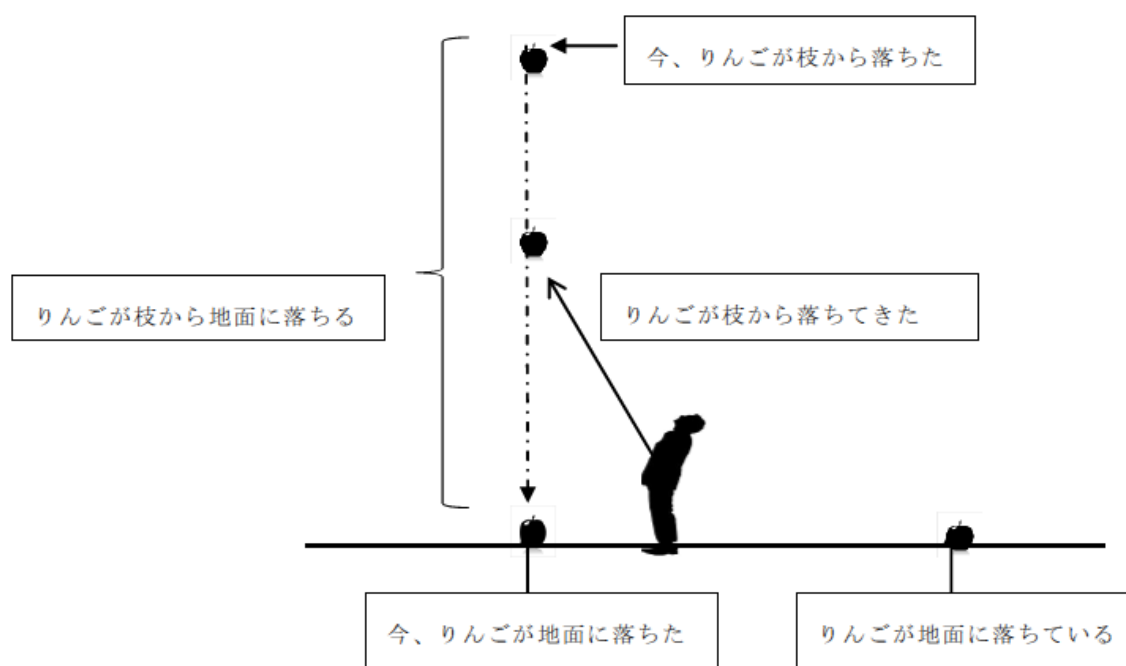


図 4-8 「落ちる」

最後に、以上の《移動に関する自動詞一覧表》について、分析を行った結果、「訪れる」と「赴く」も、「行く」、「来る」、「帰る」、「戻る」と似たような性質を持っていることがわかった。ただし、「訪れる」は「訪問する」という意味で、「来る」あるいは「行く」の意味に近い。また、「赴く」は「行く」の文学的表現であり、「行く」の一種と考えられるかもしれない。

「行く」、「来る」、「帰る」、「戻る」、「訪れる」、「赴く」といった動詞は移動を表しているが、「テイル」を付けると、移動の途中ではなく、移動の動作の終わった後の結果の状態しか表さない。また、「行った」、「来た」、「帰った」、「戻った」を見ると、その移動の動作に移った或いは完了した瞬間のみを表し、その移動中の状態は「向かっている」などの他の動詞で表さなければならないという特徴があり、言い換えれば、これらの動詞は移動を

表すにも関わらず、その移動のなんらかの結果のみを表すという特殊な動詞である。従って、筆者はこれらの動詞を「移動結果動詞」と名付けたい。なお、藤井も「結果動詞」という言葉を使っているが、藤井氏の「結果動詞」とは、「あとにある結果をもたらす動詞」という定義であり、本稿の「結果動詞」とは、「結果しか表さない動詞」という意味で、全く異質のものであるということを最後に断っておく。

つまり、出発点から隔たった到着点を持つ移動動詞は典型的なものは、「行く」、「来る」、「帰る」、「戻る」の四つしかないが、その類例と思われるものとして、「訪れる」、「赴く」が挙げられるかもしれない。

4.4 本稿の「状態」の「テイル」のまとめ

以上のことをまとめると、「テイル」の「状態」という用法には「単純状態」と「結果の状態」の2種類があると考えられる。「単純状態」は、2種の動詞に分かれており、一つは「単純状態動詞」であり、もう一つは「動作性状態動詞」である。「単純状態動詞」とは、「聳える」や「曲がる」などの動詞であるが、その特徴について、金田一（1955）は「動作・作用の起こりに全く無関係である」と述べている。また、このような用法は「形容詞的な意味を表している」とも指摘している。筆者はこの説に従って分類することにした。

もう一つの「動作性状態動詞」とは、「住む」、「勤める」、「休む」などの動詞であり、「住む」、「勤める」などは複数の動作によって成立しており、「休む」などは意識的に何かをしないという意味の動詞である。これらの動詞に共通することは具体的な動作は明示できないが、動作性は感じられるという特徴があり、「テイル」をつけることによって状態を表す。

また、もう一種類の「状態」は「結果の状態」である。「結果の状態」となる動詞は3種類に分けることができる。一つは従来挙げられてきた「瞬間動詞」であり、もう一つ本論文で新たに提示した「緩慢変化動詞」である。そして最後は、これも新たに名付けた「移動結果動詞」である。この3種類の動詞に「テイル」をつけると、進行中の変化や動作ではなく、動作や変化が終わった後の状態を表す。

以上のことをまとめ、「状態」の「テイル」に関して、以下のような表を作成した。

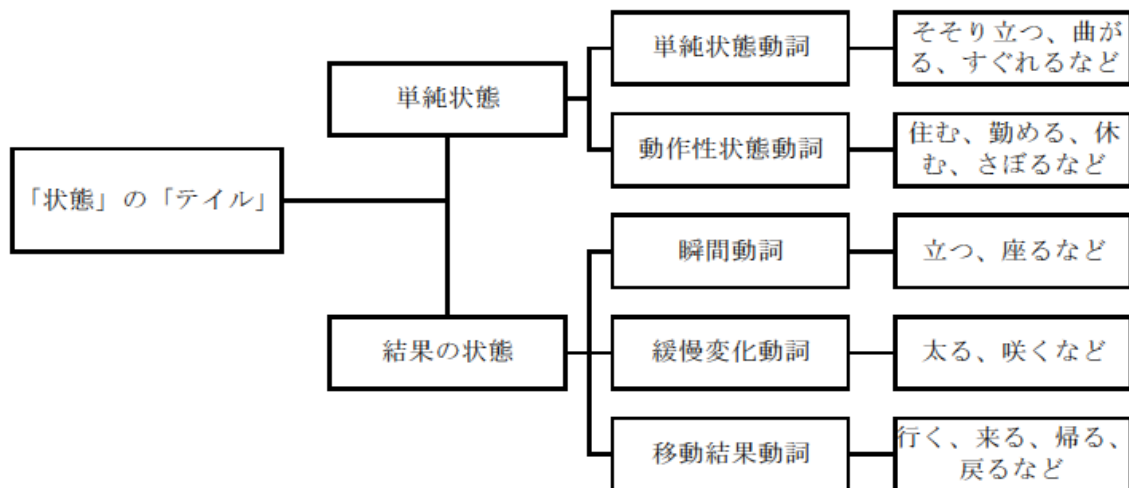


図 4-9 「状態」の「テイル」に関する構造

なお、本稿では、自動詞の移動動詞のみを対象にし、考察を行ったが、他動詞、複合動詞とサ変動詞は今後の研究視野に入れ、より広範囲に移動動詞と「テイル」の関係を明らかにしていきたいと思う。

また、実際の使用上は、既に生じた変化時の結果の残った状態というわけではない。庵は「日本語では変化時は問題にならず、発話時における変化の結果の状態に視点がある」としている。これに対して、稲垣（2013）は「テイル形の二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」では、以下のように反論している。

もしそうであれば「財布が落ちている」ではなくて「財布がある」、「お客さんが来ている」ではなくて「お客さんがいる」になるべきではなからうか。変化は問題にされず、変化の結果状態に着目するのであれば、変化動詞「落ちる」、「来る」は現れないはずである。逆に言えば、「ある」ではなく「落ちている」、「来ている」というように変化動詞も言語化されているということは、変化時にも視点があると考えた方が自然ではなからうか。

（『中国語話者のための日本語教育研究』第4号 p33）

稲垣（2013）は、日本語の変化動詞の「テイル」は、「中国語の『了』に見られる変化への視点と変化の結果の状態への視点との両方を併せ持った表現である」と指摘し、これを

「テイル表現の二面性」と呼んでいる。つまり、稲垣は「落ちている」と「来ている」は、変化動詞の「落ちる」、「来る」の「語彙的意味としての変化」と、「テイル」が示す「結果の状態」という二面を持つ表現であるとしている。

しかし、稲垣の「変化は問題にされず、変化の結果状態に着目するのであれば、変化動詞『落ちる』、『来る』は現れないはずである」と言うが、「財布」の存在する場所が道路や床の上のような場合は、「道路に財布がある」や「床の上に財布がある」とは言わないだろう。逆に、「机の上に財布が落ちているよ」とも言えないであろう。つまり、「落ちる」は「場所」との関係が深く、「変化時」のことが問題にされなくても、簡単に「ある」と言い変えられない。例えば、「水面にゴミが浮いている」と言う場合、もし変化時にも視点があるとすれば、そのゴミが空から落ちてきた場合は、「水面にゴミが落ちている」となり、水面下から浮き上がってきた場合は、「水面にゴミが浮いている」などとなるかもしれないが、しかし、発見者はその「変化時」を目撃しているわけではなく、ただ、現在の状態について述べている場合でも、通常の日本語であれば、「水面にゴミが浮いている」になるはずである。つまり、「落ちている」は「テイル表現の二面性」の問題ではないことがわかる。

また、「店の前に人が立っている」という場合、これは「立つ」という動作の結果が含まれているわけではない。例えば、その人がどこからか歩いてきて、立ち止まっている状態の場合も、「店の前に人が立っている」と言う。この場合、稲垣の「テイル表現の二面性」という観点からすれば、これは「店の前に人が止まっている」となるのである。しかし、立ち上がる動作などは考えられないが、通常の日本語であれば、「店の前に人が立っている」となるはずである。つまり、「状態」の「テイル」は実際に使われる時には、その変化時に全く視点がなく、現在の状態のみを述べる言い方であることがわかる。従って、実際にその表現で用いられているような変化が起こったかどうかは問題ではなく、一般的にそのような状態が生じる最も言語的に慣習化された表現を用いるということができないかもしれない。

第 5 章

「テイル」の新たな第 5 の用法

——立証のための情報提示

第5章 「テイル」の新たな第5の用法——立証のための情報提示

5.1 先行研究

過去の出来事を述べる時の「テイル」については、金田一春彦から既に問題視されていた。しかし、当時、金田一はこれが「テイル」の用法ではなく、日本語の動詞の特徴であると考えていた。金田一（1955）は「あの人はたくさんの小説を書いている」の「書いている」には「書写中」の意味と「著述がある」という意味の二つがあると指摘し、「あの人はたくさんの小説を書いている」という文と、「あの人は現在結婚している」とを同列に扱い、「書く」は「臨時に瞬間動詞として用いられている」と述べている。

これに対して、藤井（1966）はこの「書いている」は「過去の動作・作用は問題ではなくて、その動作・作用のもたらした結果であるところの現在の状態を表している」とし、この用法を「経験」と名づけた。この藤井の理論を踏まえ、その後の研究では、「経験」という用法が定着するようになっていった。

その後、吉川（1976）はこの「経験」という用法について、「すでになされたことがら、経験あるいは記録として現在におよんでいることをあらわす用法である」と述べている。「経験」の意味の「彼は富士山に登っている」は「彼は富士山に登った」と言い換えることができるし、「去年」のような過去を表す修飾語もつけられると指摘している。

しかし、過去の出来事を描写する時に「テイル」をつけると本当にすべて「経験」となるのだろうか。たとえば、次のような例文がある。

この橋は5年前に壊れている。(庵 2001)

『日本語大辞典』や『広辞苑』などの辞書の定義をまとめてみると、「経験」は必ず、「自分自身が直接感じたり、何らかの行動を行ったりした後に、技能や知識というようなものが残っている」となる。この定義に従えば、「経験」をもつことができるのは有情物でなければいけない。つまり、自然現象や社会現象のような無情物や事柄などは、「経験」を持つとは言えない。

また、高橋太郎（1969）は「すがたともくろみ」でこのような用法を「経験・記録」とし、「以前のうごきを経験や記録としてあらわすものである」と定義づけている。「経験」は先に述べたように、この用法のすべての用例に当てはまらず、不完全な言い方である。また「記録」という名称にも問題がある。「記録」というのは『日本国語大辞典』によれば、

「のちのちまで残す必要のある事柄を書きしるすこと」であると書いている。現在、「記録」に関しては、何かを伝えるために、文字、もしくは音声や映像などの手段により残されるという意味を持っているため、「テイル」のこのような用法には、この意味は含まれていないことがわかる。また、日本語では、「記録」は「～と書いてある」や「～と書かれている」などのような表現もあるので、このような名称も不適切である。

そのほかに、寺村（1984）は「その年、東京には二度大雪が降っている」や「あの人はたくさんの小説を書いている」について「過去の事実を回想して、頭の中に再現させるような場合」に用いられると分析している。しかし、寺村のこの定義だと、日本語では「タ」も使えるし、また、自分が経験していないことについては言えないので、「回想」では説明がつかない。

その後の研究としては、工藤真由美の研究が挙げられる。

工藤（1982）は「テイル」構文の用法を次のように、大きく「基本的意味」と「派生的意味」の二つに分類している。

- 1) 基本的意味 (1) 動きの継続
(2) 変化の結果の継続
- 2) 派生的意味 (1) (a) 反復
(b) 現在有効な過去の運動の実現
(2) 単なる状態

また、派生的な意味の中の「現在有効な過去の運動の実現」には、以下の二つの下位分類があると述べている。

①過去に実現した運動が記録として現在に残されていることを表しているもの

例：中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会っています。

②過去に実現した運動が現在の状態になんらかのかかわりをもっていることを表しているもの

例：あのね、その人前に一度結婚しているんですって。

これは、藤井（1966）などが「経験」としていた用法を「現在有効な過去の運動の実現」

と現実に合う名前をつけて分類した点と、その内容に「記録」と「現在との関係」という2つの要素があるとした点が進展と言える。「記録」という問題に関しては、先ほど述べたが、筆者は工藤のこの分類に関しては、過去の出来事に対して、日本語で「テイル」を使うと、現在と「なんらかのかかわりともっている」という部分に賛同する。しかし、この「なんらかのかかわり」とは何であるかについては詳しく述べていない。

その後、工藤は1995年に出した著書『アスペクト・テンス体系とテキスト』でさらに論を進めている。「テイル」構文の用法をテンス・アスペクト、ムード、ボイスに関係付けて論じ、大きく「テンポラルな用法」、「ムード的な用法」、「脱アスペクト用法」、「脱テンス・アスペクト用法」の四つに分けている。金田一（1955）が「単純状態」としていた用法を「脱アスペクト用法」としている。また、「テンポラルな用法」については、「テイル」構文の基本的な意味は「継続性」であり、基本的意味は「動作の継続」、「変化結果の継続」の2つであるとしている。また、派生的な意味は「パーフェクト性」、「反復性」、「単なる状態」の3つであるとし、本章の「テイル」の第5の用法に当たるのは「パーフェクト性」である。「パーフェクト性」について、工藤は以下の用例を出し、定義づけている。

その本なら、1度読んでよ。

病院にかけつけた時、父は既に30分前に死んでいた。

〈パーフェクト性〉は、〈継続性〉とは異なり、〈後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存〉を表すものである。後述するところであるが、パーフェクトという派生的意味では、アスペクト的なものとテンス的なものとが、相互浸透していて（複合化されていて）、単純なアスペクト的意味ではない。

（『アスペクト・テンス体系とテキスト』PP38～39）

工藤は、このような「パーフェクト」の「テイル」の意味について、「基本的意味〈継続性〉」に対し、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」（1995）と規定している。また、〈パーフェクト〉の規定にあたり、工藤は次の三点は「平等に強調されなければならない」と指摘している。

- ① 発話時点，出来事時点とは異なる〈設定時点〉が常にあること。
- ② 設定時点にたいして出来事時点が先行することが表されていて，テンス的要素としての〈先行性〉を含んでいること。
- ③ しかし，単なる〈先行性〉ではなく，先行して起った運動が設定時点とのむすびつき＝関連性をもっているにとらえられていること。つまり，運動自体の〈完成性〉とともに，その運動が実現した後の〈効力〉も複合的に捉えるというアスペクト的要素を持っていること。

『アスペクト・テンス体系とテキスト』P99)

また、工藤(1995)は、「パーフェクト」がもつ「設定時点とのむすびつき＝関連性」について、「設定時点における先行する運動の効力の現存」であるとし、「パーフェクト」の特徴として以下のように指摘している。

〈パーフェクト〉とは，①②③の要素，つまり〈設定時点にたいする出来事時点の先行性〉というテンス的要素と，〈運動自体の完成性＋その効力〉というアスペクト的要素を相互前提的にふくみこんだ，複合的な時間概念であるにとらえなければならないであろう。

(省略)

- a 基本的にはアスペクトだが，〈設定時点にたいする先行性〉というテンス的要素を含みこんでいること。
- b アスペクト的にみても，テンス的にみても，いわば2つの時間段階をとらえていること。アスペクト的には，運動の完成性＋その効力の継続性であること。テンス的には，先行時点＝出来事時点とともに後続時点＝設定時点が常にあること。

『アスペクト・テンス体系とテキスト』PP105～107)

工藤はこの a と b を認めた上で基本的には、「パーフェクト」はアスペクトであると指摘している。また、「パーフェクト」の本質は、「アスペクト要素とテンス的要素が相互浸透

しあって、出来事時点＝運動の完成性，設定時点＝効力の継続性というかたちで、2つの時間段階をとらえている」ところにあると指摘している。さきほどの例に戻るが、

この橋は5年前に壊れている。(庵 2001)

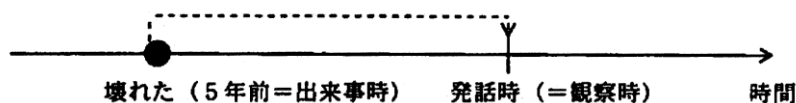
庵はこの用法を「効力持続」と分類している。これは工藤の「パーフェクト」の概念を受けたものと思われる。

しかし、庵(2001)もこの「パーフェクト」について、「本来機能的に異なる『完了』と『効力持続』が混在しており、その結果、かえってその特徴が分かりにくくなっている部分がある」と批判を出している。庵は「テイル」についてではなく、「ーていー」の意味について研究を行い、「この橋は5年前に壊れている」のような例を「効力持続」、「犯人は3日前にこの店でうどんを食べている」のような例を「記録」、「彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいた」のような例を「完了」としている。「効力持続」とは、「過去に起こった動作・出来事の結果生じた効力が観察時(多くの場合は発話時)にも存在する場合である」と述べている。この定義は、「観察時以前に起こった出来事の結果が観察時にも存在していること」を表す「結果残存」と類似しており、両者の共通点は「出来事時と観察時が結びつけられている(両者の間が『継続』している)」という点であり、相違点は「結果残存では具体的な『結果』が存在するのに対し、効力持続ではそうしたものは存在しない」という点であると指摘している。この区別を以下の「効力持続」の「この橋は5年前に壊れている」と「結果残存」の「この橋は5年前から壊れている」の図のように、実線と破線で示している。

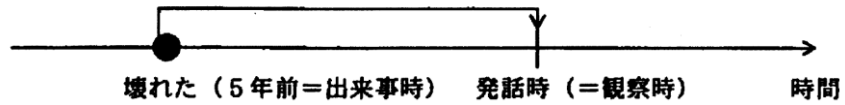
(30) この橋は5年前に壊れている。(効力持続)

(31) この橋は5年前から壊れている。(結果残存)

(30)' この橋は5年前に壊れている。



(31)' この橋は5年前から壊れている。



(『一橋大学留学生センター紀要』4 pp83～84)

また、「記録」とは、「観察時以前の出来事を何らかの証拠に基づいて述べたり、主語の経歴として述べたりする際に用いられる用法である」とし、この用法の特徴は「何らかの証拠（記録）に基づいて述べる」という点にあると指摘している。「犯人は3日前この店でうどんを食べている」のように、「事件の聞き込みに回っている刑事が聞き込みで得た情報を基に述べている場面」はこの用法にあたるとしている。この「記録」と「効力持続」の違いについて、以下のように述べている。

第一の違いは、効力持続の場合は上述のように述部が主語に対して有意な属性付けになっていなければならないのに対し、記録は証拠に基づいて述べているだけであるためそうした制約はないということである。

違いの第二は証拠の存在にかかわるものである。つまり、記録は証拠に基づくため、証拠が現存する場合（典型的には(33)²⁷のように「～によると」などの形で明示される場合）は観察時を中心に述べるのが義務的になり、（観察時が発話時である場合は）タ形との間にニュアンスの違いが存在すると言う以前にタ形が使いにくくなるのである。

(『一橋大学留学生センター紀要』4 p85)

「完了」というのは、「基準時以前に動作や出来事が完結しているという意味である」と述べている。また、基準時の違いに応じて、「現在完了」、「未来完了」と「過去完了」に分けている。しかし、筆者は庵のこの「効力持続」、「記録」、「完了」を見ると、特に「効力持続」と「記録」の部分には、まだ明らかにされていない部分があり、過去の出来事を述

²⁷ 用例(33)は「一昨年夏のテレビ講話をまとめた『権不十年』の著書によると、こんなことを述べている。」である

べるときの「テイル」の特徴は三つのものが混在しているところにある。

そのほか、庵・清水（2003）は「犯人は3日前その店で食事をしている」や「彼は若い頃アフリカで暮らしている。だから、スワヒリ語がうまい」のような例について、「経験・記録」であるとし、この「経験・記録」の「テイル」は「過去の出来事を現在と関連づけて表現する。そのため、過去の出来事であっても、『～している』の形が使われる」と述べている。また、「経験・記録」の自身の分類の「結果残存」の区別について、「過去の時点から今までずっとある状態が続いている場合は結果残存になる。経験・記録の場合、状態は今まで続いていない」と指摘している。また、「経験・記録」の「テイル」は「過去の出来事を現在と結びつける。そのため、過去の経験が今の属性と関連があることを表す」と述べている。

また、江田すみれ（2013）は「『パーフェクト』という用語は日本語の文脈に置いた場合、『それ以前に成立した運動の効力の現存』という意味を表面的に表している」とこの「パーフェクト」という用語について疑問を投げかけている。本稿で言う「テイル」の第五の用法について、江田は「効力持続」とし、「過去に起こった出来事が現在に効力あるいは影響をもつものである。事態自身は一度過去に終了しており、現在まで継続していない」と述べている。この「効力持続」は、「動作・作用などを表し、それが長期間にわたることが文脈から明らかなもの」を表す「運動長期」との区別について、「運動長期が現在まで続く動作・作用を述べるのに対し、効力持続は一度その事柄が終了していることとした」ということであると述べている。

先行研究の説をまとめると、以下のような図になるのだろう。

藤井正、高橋太郎、吉川武時など

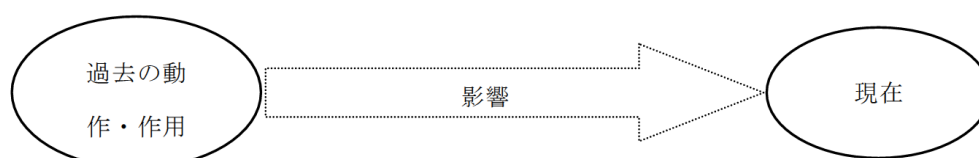


図 5-1-1. 従来の「経験」の説

工藤真由美



図 5-1-2. 工藤の「パーフェクト」の説

庵功雄、江田すみれなど



図 5-1-3. 庵・江田などの説

この図でわかることは、名称は異なるものの、三者ともに構造的には大変似ており、従来の「経験、記録」が後者の二つでは、「パーフェクト」や「効力持続」などになり、前者の「影響」という部分が「効力の現存」などに変わっていることがわかる。つまり、従来の説をまとめると、以下のような抽象的な構造になることがわかる。



図 5-1-4. 先行研究を抽象化した構造

また、先行研究においては、まったくアスペクト的意味から離れて述べるものもある。その一つは柳沢（1993）である。柳沢は従来「経験」としての捉え方は「表層的なもの」であるとし、「タ形による経験とテイル形による経験の本質的な違いを言いあてているとは言い難い」と指摘している。柳沢（1993）は、「テイル」の第5の用法を「語り」というカテゴリーの中で「報告性」という観点から「経験」について、「経験とは、語りにおいて出来事をテイル形で叙述することにより、前提としての意味を持たせる用法である。そして、経験は、後に結論が来ることを予告し、その結論を強調する効果を持つ」と定義づけている。つまり、「テイル形が叙述を前提化する機能を持つ」ということで、従来の研究で言う「経験」はこの機能から生まれているとしている。しかし、「経験」という言葉に全く異なる文法的な意味を与えていることは学習者の混乱を引き起こしてしまうのではないかと思う。また、「テイル」を「語り」の中で「前提」と位置づけているが、果たしてそうだろうか。なお、柳沢が言う「テイル」で述べた過去の出来事は「結論」とかかわる部分に関しては、同様に考えているが、この「結論」の部分がどのようなものであるのかについては詳しく論じていない。

5.2 問題提起

従来の研究では、過去の出来事に関して述べる際に使う「テイル」構文について、前章で述べたように、様々な分析が行われてきた。それらの「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」といった名称が示す通り、同じような用例から、このように異なる多様な解釈がなされており、問題がまだ残されていることがわかる。

5.1 で述べたように、これまでの先行研究では、「テイル」構文を使う理由に関しては、それは過去の出来事自体が「影響」や「効力持続」という要素を持っているから、現在へのつながりができていると分析されている。しかし、筆者は「テイル」構文を使う理由は恣意的であり、過去の出来事自体は何の「影響」も「効力持続」も持っているとは言えないのではないかと考えている。なぜならば、「あの子、小さい頃両親に死なれているから、性格がちょっと暗いんだ」のように、人が経験したトラウマのようなもの場合、その過去の出来事は現在に影響を与え続けていると言えるだろう。しかし、以下のような記事などは「影響」や「効力持続」では説明しにくいのではないだろうか。

(1) 女子アナ界ばかりかテレビ界全体に激震が走っている。きっかけになったのは11日の「ワイドナショー」(フジテレビ系)で元NHKアナ・堀潤氏(38)が放った一言。

「(NHKの) 有働(由美子=46)さんは今年の紅白が終わったら、来年あたりフリーになるかも。この間、本を出したでしょ。NHKでは本を出すと辞めるんですよ」「事務所の争奪戦になるでしょうね」などと話したことだ。確かに有働アナは昨年10月「ウドウロク」(新潮社)を出版している。そこで気になるのは「争奪戦」の方だ。どんな展開が予想されるか。芸能評論家の肥留間正明氏が言う。

(日刊ゲンダイ 2015年10月14日芸能ニュース)

例5-(1)の場合、有働アナの元後輩が有働アナがいずれNHKを辞め、フリーに転身するという予言を出したとの内容の記事である。しかし、「本を出版している」ということ自体は単なる過去の事実であり、有働アナのこの本の出版によってほかの出来事が起きたわけではなく、決して現在に対する「影響」や「効力持続」があるとは言えないであろう。

また、次のような例もある。

(2) 富士山の噴火は「地震の後」で起きたこともあるといます。1707年の「宝永の噴火」の際は、49日前に「宝永の大地震」が起きているそうです。このケースは、多くの火山研究者が「地震に刺激されて噴火が起こった」と考えているそうです。

「火山噴火を誘発する」と見られている「マグニチュード9以上の地震」。先に挙げた「貞観地震」も「東日本大震災」もそのクラスなのだそうです。「東日本大震災の影響で日本中の火山活動が活発化する可能性はあると考えている。箱根山が噴火するか否かに関係なく、富士山は将来的に必ず噴火すると思っています」と藤井名誉教授おっしゃっていました。

(テレビ朝日 2015年5月14日モーニングバード「そもそも総研」)

例5-(2)は「大地震と火山噴火には関連性がある?」という話題について論じている内容であり、下線を引いている部分は「テイル」構文を使っている。藤井名誉教授は「地震に刺激されて噴火が起こった」と考え、それを証明するには、1707年「宝永の噴火」の49日前に「宝永の大地震が起きている」という事実を持ち出した。しかし、これは三百年前

のことであり、現在に対して何の「影響」を与えることはできないだろう。また、三百年前の地震が現在まで「効力」を「持続」しているとも考えられない。

この「テイル」は「立証のための情報提示」ではないかと考えている。本章では、この問題について論ずる。

5.3 「情報提示」について

5.3.1 「情報」とは

まず、「情報」とは一体何であろうか。『日本国語大辞典』では、「情報」の意味について、以下のように書かれている。

①事柄の内容、様子。また、その知らせ。

②状況に関する知識に変化をもたらすもの。文字、数字などの記号、音声など、いろいろの媒体によって伝えられる。インフォメーション。

(『日本国語大辞典』第五巻 p 1315)

つまり、「情報」とは、伝える人と伝えられる人がおり、伝えられた人はこれを知ったことで、ある状況に関する思考、認識或いは行動が変わることになるということである。

また、「情報とは何か」について、梅棹（1995）は以下のように述べている。

わたしたち人間は、ある情報をえることによって、つぎにとるべき行動をきめる。情報が行動に影響をあたえるのである。これが情報というもののもつプラグマティックな意味である。

(中略)

情報というものは、コミュニケーションとは区別しなければなるまい。おくり手からうけ手へながされるものとはかぎらない。情報のうけ手は存在する。

(梅棹忠夫『情報の文明学』 pp186～193)

つまり、梅棹の情報理論を見ると、元々、「情報」となるものに関しては制限がない。ある物や事などが「情報」として成立するのは、情報の認識者（読み取り手）がまず存在し、その者が現象、データなどから、その「情報」（意味・内容）を読み取った時点で「情

報」が成り立つことになる。

5.3.2 情報理論から考えた「情報提示」とは

現象・データから情報が読み取られ、それが発信者から受信者へ伝えられることによって、「情報提示」が成立する。図で示すと次のようになる。

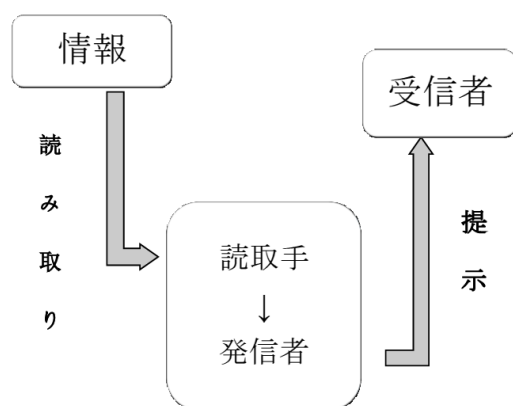


図 5-3. 情報理論から考えた「情報提示」

この図から見ると、情報を読み取る人がいて、その人が、読み取った情報を他者、つまり、受信する人に発信しようとする時、その人が、読取手から発信者に変身するわけである。つまり、「読取手」は、他者に「情報を伝える」という行為が発生した時点から、「発信者」となり、「情報の伝達」が成立することになる。もし「受信者」が不確定な場合、ただの「情報の提示」であると言えるのではないだろうか。

世の中の物や事柄はすべて「情報」となりうるが、情報の認識者が、それを「情報」とする時点で、情報の認識者は何かを目指す。この中には、梅棹（1995）が述べているような「行動に影響をあたえる」というようなプラグマティックな目的も含まれている。さらに、このような「情報」を提示しようとする時に、元の「情報」の読取手はその時点で、「発信者」に転身することになる。

この梅棹の「情報が行動に影響を与える」というプラグマティックな視点から、「ティール」の「情報提示」のプロセスについて分析していきたいと思う。

5.4 「立証のための情報提示」の「テイル」

5.4.1 談話分析による考察

まず、第5章の冒頭で既に挙げた次の二つの例を見ていくことにする。

(1) 女子アナ界ばかりかテレビ界全体に激震が走っている。きっかけになったのは11日の「ワイドナショー」(フジテレビ系)で元NHKアナ・堀潤氏(38)が放った一言。

「(NHKの)有働(由美子=46)さんは今年の紅白が終わったら、来年あたりフリーになるかも。この間、本を出したでしょ。NHKでは本を出すと辞めるんですよ」「事務所の争奪戦になるでしょうね」などと話したことだ。確かに有働アナは昨年10月「ウドウロク」(新潮社)を出版している。そこで気になるのは「争奪戦」の方だ。どんな展開が予想されるか。芸能評論家の肥留間正明氏が言う。

(日刊ゲンダイ 2015年10月14日芸能ニュースより)

この記事は、有働アナの元後輩が有働アナが来年あたりNHKを辞め、フリーに転身するかもしれないという予言に関する内容である。有働アナは現在人気絶好調のアナウンサーであり、彼女はなぜ辞める可能性があるのかという予言の根拠として、「昨年10月「ウドウロク」を出版している」と述べている。なぜこれが根拠になるのかというと、「NHKでは本を出すと辞める」というジンクスが既にあるからである。彼女は昨年10月に本を出版しているので、今後辞めるという前触れになるわけである。そのため、「ウドウロク」という本は既に出版されたものであるが、「テイル」構文を使い、予言の根拠づけとなる。

この「テイル」の使い方を見ると、「本を出版している」ということ自体は単なる過去の事実であり、決して現在にその実質的な「影響」や「効力持続」があるとは言えない。特に、現在有働アナがこの本を出版したことによって、何かほかの出来事が起きているわけではないので、明らかに「影響」や「効力持続」では説明できないと思われる。これは、ただいづれ有働アナが辞めるだろうとの予言を証明しようとする根拠として、「本を出版している」という事実を使っているだけである。つまり、「テイル」構文を使う理由は過去の出来事自体が現在に対して何らかの「影響」を持っているわけではなく、発話者がその過去の事実を「情報」として利用して、現在の主張や結論を立証しようとする根拠として、使っているのではないかと考えられる。この関係を図にすると、以下のようになる。

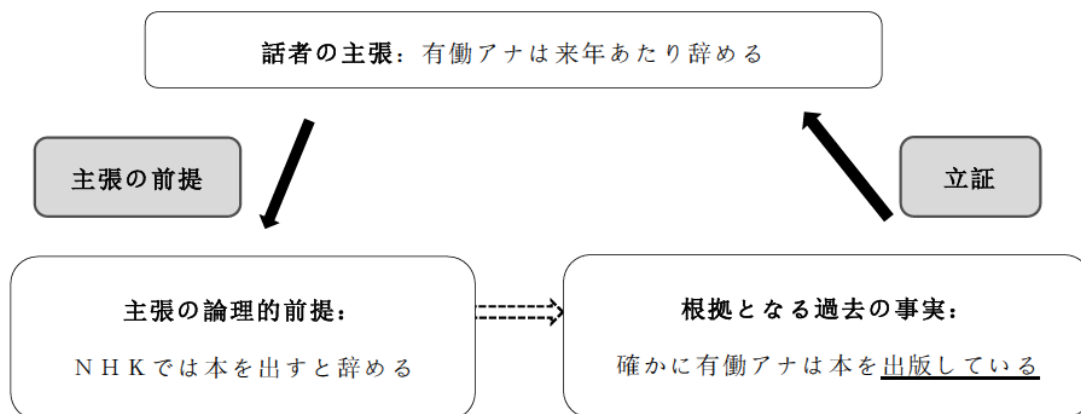


図 5-4-1. 例 5-(1)の図式

つまり、例 5-(1)の場合、まず、「NHK では本を出すと辞める」というジンクスのようなものがあり、話者はそれを前提に、「有働アナは来年あたり辞める」という自分の主張を出している。また、自分の主張を立証するために、有働アナは「確かに本を出版している」という過去の事実を提示し、有働アナは来年あたり辞めるという主張の根拠を示している。この根拠付けとなる過去の事実を表すのに、日本語では、「テイル」が使われるものと考えられる。

次は、例 5-(2)について詳しく分析する。

(2)続いて玉川さんは、「火山噴火予知連絡会」の会長も務める、「東京大学」の藤井敏嗣（ふじい・としつぐ）名誉教授を訪問し、「地震と噴火の関係性」について伺いました。「世界的に見て、マグニチュード9に達する地震が起こると、その周辺1000km地域で火山が噴火するのが普通」と藤井名誉教授はおっしゃいます。

(中略)

富士山の噴火は「地震の後」で起きたこともあるといます。1707年の「宝永の噴火」の際は、49日前に「宝永の大地震」が起きているそうです。このケースは、多くの火山研究者が「地震に刺激されて噴火が起こった」と考えているそうです。

「火山噴火を誘発する」と見られている「マグニチュード9以上の地震」。先に挙げた「貞観地震」も「東日本大震災」もそのクラスなのだそうです。「東日本大震災の影響で日本中の火山活動が活発化する可能性はあると考えている。箱根山が噴

火するか否かに関係なく、富士山は将来的に必ず噴火すると思っています」と藤井名誉教授おっしゃっていました。

(テレビ朝日 2015年5月14日モーニングバード「そもそも総研」より)

例5-(2)は「大地震と火山噴火には関連性がある？」という話題について論じている内容であり、下線を引いている部分には「テイル」構文が使われている。藤井名誉教授は「地震に刺激されて噴火が起こった」と考え、それを証明するには、1707年「宝永の噴火」の49日前に「宝永の大地震が起きている」という事実を持ち出した。しかし、これは三百年前のことであり、現在に対して実質的な「影響」を与えているとは考えられない。また、三百年前のことが現在まで「効力持続」しているとは思われない。この場合の「テイル」は「宝永の大地震」が起きて、「宝永の噴火」があったという地震と噴火の関連性を証明しようとして、使っているわけである。また、同時に「富士山は将来的に必ず噴火する」という主張の根拠として使われている。図で表すと以下のようになる。

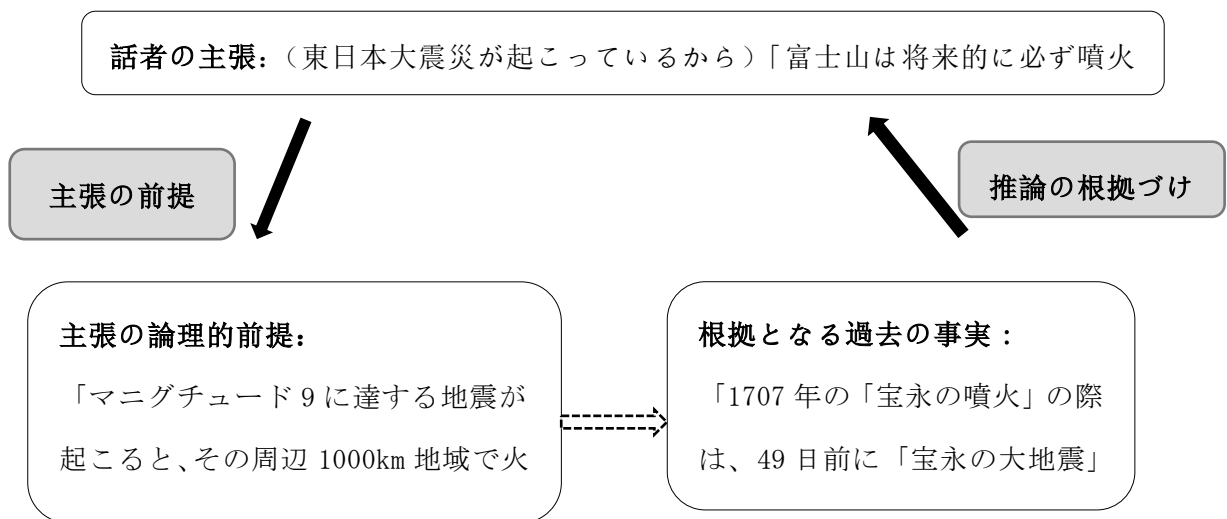


図 5-4-2. 例 5-(2)の図式

つまり、「マグニチュード9に達する地震が起こると、その周辺1000km地域で火山が噴火する」ということは世界的に認められた客観的、科学的な理論である。これを前提に、話者は2011年に起きた東日本大震災もそのクラスの地震だから、「富士山は将来的に必ず噴火する」と主張している。「マグニチュード9に達する地震」と「火山は噴火する」という自分の主張を立証するため、その根拠付けとして、1707年の「宝永の大地震」と「宝永

の噴火」を挙げ、この三百年前のことを現在へ持ち出す際に「テイル」構文を使っているわけである。

つまり、例 5-(2)の「テイル」は例 5-(1)と同様に、話者の主張を立証するために、提示された過去の事実を表していると考えられる。この二つの「テイル」の用例で示された過去の出来事自体は、現在に対して、実質的な影響力も効力も何もない。この場合の「テイル」は、現在の話者の主張を立証するための根拠づけとして提示されているのではないだろうか。そして、主張の論理的前提となるものはジンクス、社会的常識、科学的法則、或いは科学的に証明されているものなどである。この前提に基づいて、過去の事実などの「情報」を主張の根拠として提示している。

また、次の 5-(3)は「TBS ニュース 2015 年 8 月 24 日の社会ニュース」よるものである。

(3) 大阪で中学生の男女の遺体が見つかった事件です。女子中学生の遺体を遺棄したとして逮捕された 45 歳の男は、去年の暮れ頃から福島県で除染作業員として働いていました。事件前後の男の足取りを追いました。

(中略)

23 日午後、身柄を大阪地検に送られた大阪府寝屋川市の契約社員・山田浩二容疑者(45)。うつむき加減の顔は白いマスクで覆われ、その表情をうかがい知ることはできませんでした。

警察によりますと、山田容疑者は今月 13 日、寝屋川市の中学 1 年の平田奈津美さん(13)の遺体を遺棄した疑いがもたれています。遺体は頭部や手首を粘着テープで巻かれ、鋭い刃物で切られたような傷が 30 か所以上ありました。

(中略)

平田さんと星野君は、寝屋川市駅付近で山田容疑者の車に乗せられ、連れ去られたとみられていますが、山田容疑者は、過去にも中学生を車に乗せ連れ去る事件を起こしていました。今から 13 年前の 2002 年、山田容疑者は、複数の男子中高生らに対する逮捕監禁容疑などで逮捕されています。寝屋川市内の路上で、中学 2 年の男子生徒に、「寝屋川市駅へ行きたい。車に乗って案内して欲しい」などと声をかけて車に乗せた後、「俺は警察だ」などと言って、手錠をかけたといいます。また、高校生ら 2 人を同じ手口で車に連れ込み、手錠をかけて粘着テープで縛ったということです。

(中略)

取り調べに対して山田容疑者は、黙秘しているということですが、警察は、星野君の遺体の遺棄にも関与した疑いが強いとみて捜査しています。

(TBS ニュース 2015 年 8 月 24 日社会ニュースより)

例 5-(3)の記事は、大阪中 1 殺害事件について、山田容疑者が犯人であると疑い、警察は捜査を進めているという内容である。また、そこからわかったことは山田容疑者が過去にも同じ手口で事件を起こし、逮捕されているということである。犯罪者は再犯する際に、同じ手口を使ってしまうということが一般的に考えられているので、同じような事件で、同じ手口を使っているということは犯人が同一人物である可能性が非常に高いと思われている。そのため、「今から 13 年前の 2002 年、山田容疑者は、複数の男子中高生らに対する逮捕監禁容疑などで逮捕されています」ということ根拠にし、しかも、2002 年の時も、今回と同じ手口を使っているので、山田容疑者が犯人であると疑って捜査を開始したのである。この内容を図で表すと以下のようになる。

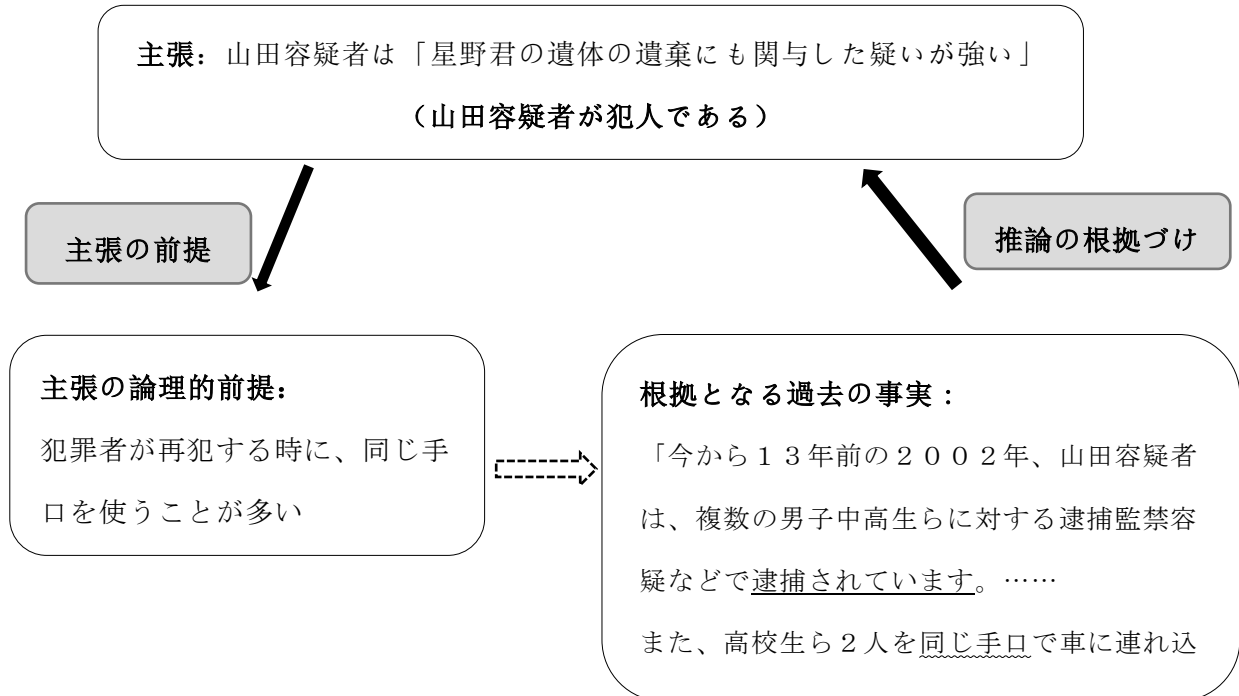


図 5-4-3. 例 5-(3)の図式

つまり、この用例も「テイル」の「立証のための情報呈示」の談話構造に当てはまるも

のである。警察や世間の「山田容疑者が犯人である」という主張は、「犯罪者が再犯する時に、同じ手口を使うことが多い」という一般的に認められている前提に基づいたものである。また、その「山田容疑者が犯人である」という主張を根拠づけるため、13年前の容疑者の犯罪歴を持ち出し、それを犯人を決める決定的な証拠として提示している。この際に、13年前のことについて、「テイル」構文が使われる。

例 5-(4)は「朝日新聞デジタル」のトピックスによる記事である。

(4)福田康夫元首相が7月末に訪中し、中国の習近平国家主席と極秘会談した際、内閣特別顧問の谷内正太郎・国家安全保障局長が同席していたことが、複数の日中関係筋の話でわかった。

安倍晋三首相の側近で外交政策を支える現役高官が、中国の最高指導者と会ったことが明らかになるのは初めて。11月に北京で開かれるアジア太平洋経済協力会議(APEC)での首脳会談の実現に向け、水面下で日中両政府の高いレベルで調整が始まったことを示すものだ。

習指導部は安倍首相に根強い不信感があるものの、谷内氏を通じて首相の対中関係修復への意欲を見定める狙いだったとみられる。

中国側が谷内氏に注目するのは、中国側と関係が深く、日中関係の節目で重要な役割を担った実績があるからだ。

谷内氏は外務事務次官だった2006年、第1次安倍政権発足を受け、小泉純一郎元首相の靖国神社参拝などで冷え込んだ日中関係を打開するため、中国側と水面下で交渉。安倍首相の電撃訪中や「戦略的互惠関係」構築への合意に道を開いた。07年には日中次官級対話で訪中し、浙江省共産党委員会書記だった習氏と会談している。

安倍政権はAPEC直前まで首脳会談の調整を水面下で続ける構えだが、歴史認識など基本的な立場を巡る双方の溝は深く、進展の厳しさは変わっていない。

(朝日新聞 DIGITAL2014年10月12日トピックスより)

例 5-(4)は両国の関係改善に関して、なぜ中国側は谷内氏に注目したのかという内容である。つまり、中国側は安倍首相の「対中関係修復への意欲」を、谷内氏を通じて見定めようとしているということである。しかし、なぜ谷内氏なのか、その理由として、谷内氏は「中国側と関係が深く、日中関係の節目で重要な役割を担った実績がある」からという

根拠を挙げている。それは、「日中関係の節目で重要な役割を担った実績がある」ということは、有力者と人脈があり、この人物とならうまく解決できるのではないかと考えている。そして、記者はその実績がどのようなものであるのかをより明確に証明するために、「07年には日中次官級対話で訪中し、浙江省共産党委員会書記だった習氏と会談している」ということを持ち出している。つまり、現在習近平氏は中国のトップ（中華人民共和国主席、中国共産党中央委員会総書記）であり、その人物とつながりを持っていることで、谷内氏に中国側が注目している大きな理由となっている。つまり、この「テイル」構文により、ただ過去にあった事実だけではなく、有益な情報を提示し、記者の主張を立証しようとしているということである。

また、2006年、谷内氏は「中国側と水面下で交渉」ということも、文字数の制限などで、省略形を使っているが、もし、最後までつけるとすると、「交渉している」となるのではないのでしょうか。このことを図にすると、以下のようになる。

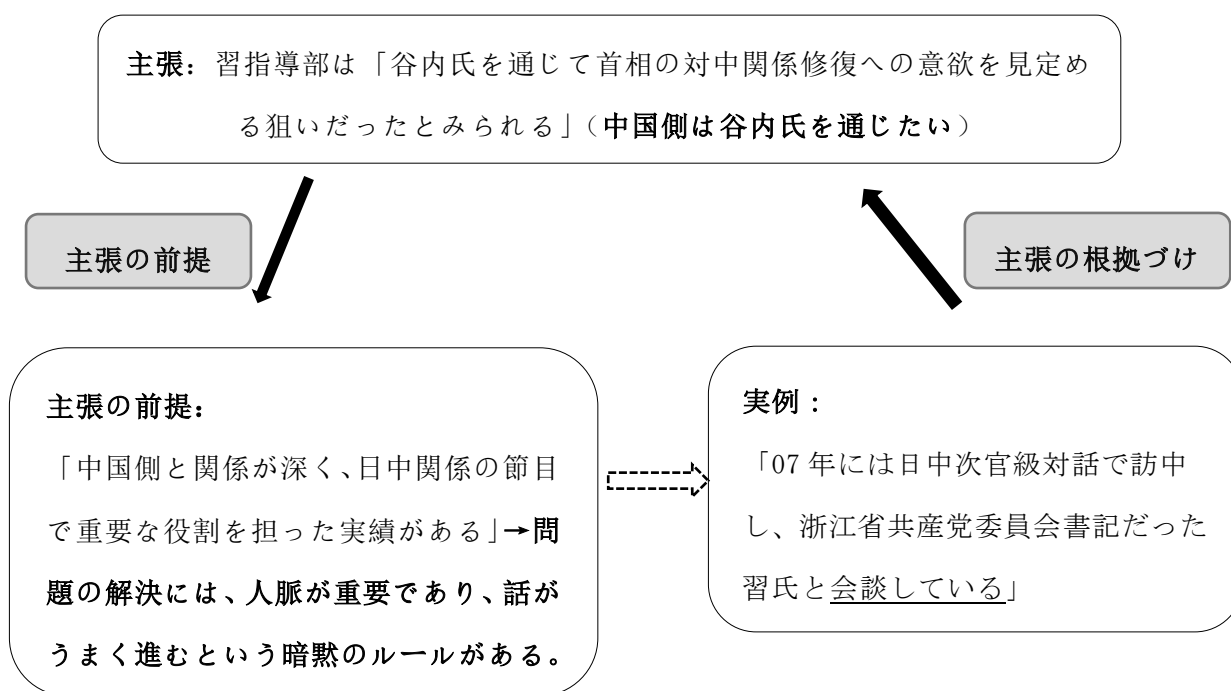


図 5-4-4. 例 5-(4)の図式

つまり、この例も「テイル」の「立証のための情報呈示」の談話構造として、分析可能である。記者は人脈があれば、物事がうまく進むという世間の暗黙のルールに基づき、谷内氏を中国側が注目していることを指摘した。なぜならば、谷内氏は「中国側と関係が深

く、日中関係の節目で重要な役割を担った実績」を持っているからである。その有力な実績とは「07年には日中次官級対話で訪中し、浙江省共産党委員会書記だった習氏と会談している」ということである。この際に、2007年のことに関して、「テイル」構文が使われてくる。

例 5-(5)はフジテレビのドラマ『HERO2』で、容疑者を追い詰めるシーンである。

(5) (容疑者) 大西の指紋が15年前の宝石強盗犯人のものと一致。しかも、時効成立は3日後に迫っていた。 大西は強盗事件関与を否定するが…。

田村検事：大西祐二、36歳、犯行時は21歳のときか。

容疑者：僕はやってません。

遠藤事務官：もうちょっと頑張ったら、時効成立なんだから、口が裂けても、自分がやったとは言えないよね。

容疑者：本当やってないんです。

田村検事：身長は？

容疑者：170……

田村検事：犯人は170cmぐらいだったと警備員が証言してるんだよ。

容疑者：いっぱいいますよ。これぐらいの背。

田村検事：犯人も左利きなんだよ。

容疑者：それだけで僕だって。

田村検事：じゃあ、どうしてハンマーにお前の指紋が付いてたんだ？

遠藤事務官：はい、こちら現場に落ちてたハンマーです。

田村検事：これは、お前の自宅近くのホームセンターで売られていたものだと分かっているんだよ。

遠藤事務官：それを君が購入して犯行に使ったんだよね？

容疑者：店に並んでたんなら、客が何人も触ってますよ。きっと、僕も握ったんです。

田村検事：ふざけること言うな！

遠藤事務官：開き直ったって、この人には通用しないよ。ほら、よく見て、人間を一切信用しない、蛇のような目。

容疑者：指紋がついてたら、それだけで犯人なんですか。

(フジテレビ 月曜ドラマ『HERO2』第1話より)

検事は以前、警備員から「犯人は170cmぐらいだった」という証言を得た。そして、現在目の前の男が犯人だと証明しようとし、容疑者は犯人と同じぐらいの身長だったという以前得た情報を提示し、そのことを指摘する。この際、過去の「警備員の証言」を「情報」として呈示するために、「犯人は170cmぐらいだったと警備員が証言してるんだよ」とつめ寄る。この例では、言葉として明確には言っていないが、検事の意図は「相手が犯人である」という自分の主張を立証するためである。

梅棹の「情報理論」から考えると、検事が以前得た情報が現在の判断（行動）に影響を与えるということになる。

このようなプロセスから考えると、この「テイル」で表されている過去の出来事・事態そのものが現在のことに対して、何らかの影響や効力持続を持っているわけではなく、過去のすでに発生した出来事に関する情報を発話者が現在へ引っ張ってきて、相手に対して、「説得、立証、警告、説明」などをするために、その根拠あるいは証拠となる情報として呈示する時に、「テイル」が用いられているのではないと思われる。このことを図にすると、以下のようなになる。

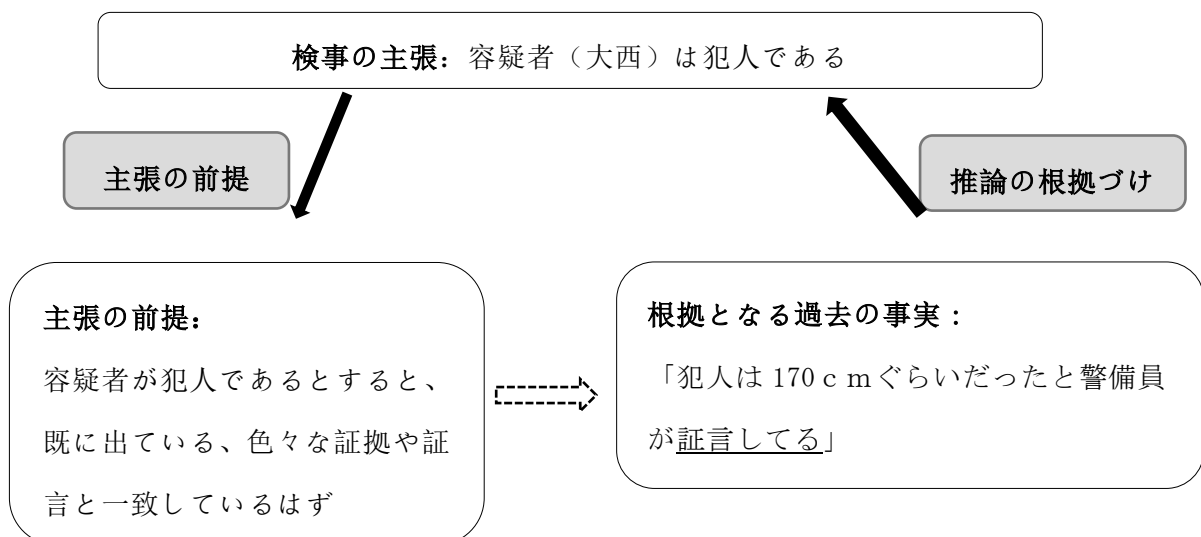


図 5-4-5. 例 5-(5)の図式

つまり、「テイル」の「立証のための情報呈示」を上での談話構造で分析すると、容疑者が犯人であれば、既に出ている、色々な証拠や証言と一致しているはずである。そして、今回の事件は容疑者（大西）が犯人であると検事が疑っている最大の理由は、「大西の指紋が15年前の宝石強盗犯人のものと一致」しているということである。大西は必死に否認しているが、検事は自分の主張を更に立証しようとし、もう一つの証言を容疑者に提示した。それが「犯人は170cmぐらいだったと警備員が証言してる」ということである。警備員の証言が有力な証拠になるので、検事は推論の根拠づけとしている。容疑者は既に、指紋が宝石強盗犯人と一致しており、身長も同じということで間違いなく犯人であるということを検事は確信している。この際に、検事は自分の主張を立証するために、警備員の以前の証言を引用する際に、「テイル」を使っているものと考えられる。

例5-(6)は日本テレビのドラマ『掟上今日子の備忘録』のシーンである。

(6) 第6話のあらすじ（ホームページより）

古本屋のバイトを辞めた厄介（岡田将生）は名門女子中学校の管理作業員として働き始めた。ある日の放課後、厄介は用具室で一人の女子生徒が気を失い倒れているのを見つめる。部屋にはボンベからガスが噴き出し充満していた。厄介は少女を助け出そうとするが、なぜかドアが開かず閉じ込められてしまう。どんどん酸素が薄くなる中、厄介は警報機を鳴らし、一命を取りとめる。

厄介が助けた少女は、逆瀬坂雅歌（さかせざかまさか）（浅見姫香）。現場に遺書が残されていたため、雅歌の自殺未遂と思われた。しかし、あらぬ噂が広がり、厄介が雅歌を殺そうとしたのではないかと疑いがかかる。厄介の無実を証明するには雅歌の証言が必要だったが、彼女は命に別状がないはずなのに、なぜか眠ったまま目覚めない。厄介は、今日子（新垣結衣）に事件の真相を明らかにしてほしいと依頼する。

掟上今日子：ご依頼の内容は少女の自殺の証明ということでしょうか？

（中略）

確認ですが、少女とはホントに面識なかったんですね？

隠館厄介：はい、生徒さんには近づかないようにしてたんで…

掟上今日子：少女に恋焦がれていたなんてことは？

隠館厄介：ありません！

掟上今日子：少女はあなたを殺そうとした。あなたは1度少女に会ってるんです。

トンボちゃん、思い出しましたか？

隠館厄介：あの時の？

(中略)

掟上今日子：薦めた本はきっと少女の好みそのものだったんでしょう。いくらフェイクを織り交ぜていてもプロである店主さんには好みがお見通しだった。少女からすれば隠していた心の内を暴かれた気分になった。

隠館厄介：僕が不用意に本を薦めたから？

掟上今日子：責任を感じることはありません。少女にとっては衝撃の出来事だったかもしれませんが、世の中の一人一人千差万別の感情全てをくみ取って行動するなんてことは不可能です。本を薦めただけで終わっていたなら、今回の事件は起こりませんでした。

隠館厄介：僕が学校に現れたから？

掟上今日子：その点はお互いにとって実に不運でした。古本屋には二度と行かなければいい、そう自分を納得させたのに、毎日通う学校へその男がやって来た。厄介さんからすれば、制服に埋もれた見分けがつかない女生徒の1人ですが、少女からすれば違います。それから少女は自分のことを言いふらされるんじゃないかと、気が気じゃなくなった。あの人が消えてしまえばいいと思った。くしくも第二の少女と似たような心境です。違いがあるとすれば少女は家でも、学校でも

1

人だった。子供じみた小さな殺意は誰にも邪魔されず、止める人もいないまま育って行った。普通に殺したら動機が探られてあれほど恐れていた、自分の心の内が公にさらされてしまうことになるかもしれない、だから自分もろとも消そうとした。少女は細工をした上で、何日もチャンスを待ったんだと思います。厄介さんが1人で用具室の近くへ来る瞬間を。そして、見事畏にはめた。

(日本テレビ 土曜ドラマ『掟上今日子の備忘録』第6話より)

例 5-(6)は誰ともかかわりたくない、心の内を他人に覗かれたくない少女が、行きつけの古本屋に行った時に、そこでアルバイトをしている主人公の厄介さんに好みの本を薦められたことをきっかけに、今回の事件が起きた。自分が必死に隠そうとしていた心の裏側を言いふらされるのではないかと不安になり、少女はその本屋に二度と行くまいとしたが、古本屋のバイトをやめた主人公が偶然にも少女の学校の警備員として働き始めた。しかし、厄介はまったく少女の不安などには気づかず、少女のことすら覚えていなかった。ひねくれ者の少女の心の中に殺意が芽生えはじめたが、殺人動機を探られたくないため、厄介に罠を仕掛け、ものの見事に厄介は罠にはまってしまった。幸い、二人は一命を取り留めたが、厄介は殺人容疑者と疑われ、探偵に無実を証明するよう依頼した。そこで、探偵は、まず、厄介と少女は本当に接点はないかと聞いた。犯人が被害者を殺そうとするには、必ず何らかの動機がある。つまり、どこかで接点があるはずだというのが世間一般の考え方である。しかし、厄介は少女とはまったく面識がないと断言した。探偵は学校に潜って、潜入調査を行ったところ、事件の真相がわかった。つまり、厄介が古本屋でアルバイトしていた時に、実は少女と一度会っているということを明らかにした。しかも、単に会っただけではなく、そのことが今回の事件のきっかけともなる。厄介自身は自分と少女とは無関係だと思っているが、実際には関係がある。そこで、事件の真相を突き止めた。この例も上と同じ構造で分析可能である。

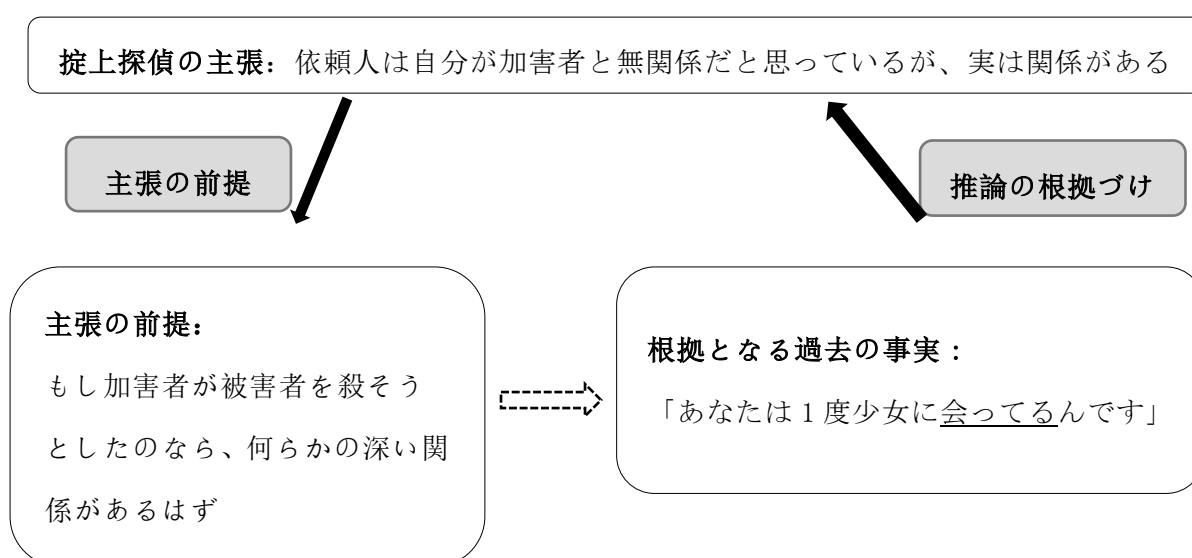


図 5-4-6. 例 5-(6)の図式

つまり、探偵は厄介が少女と何らかの関係があったから、今回の事件に巻き込まれたのではないかと疑った。もし面識があれば、殺人動機の成立につながるかもしれないが、まったく面識がなければ、普通、知らない人を殺したりしないだろうというのが常識で、厄介の無実が証明できる。しかし、調査を進めた結果、厄介は確かに殺人はやってはいないが、今回の事件と深く関係を持っていることが明らかになった。それが「1度少女に会ってる」ということである。しかも、会っていることから、今回の事件を招いた。この「会っている」ことが事件解決にはとても重要な情報であるため、提示する際に「テイル」構文が使われていると考えられる。

例(7)-Aは「和歌山毒物カレー事件」について、「ヤフー知恵袋」で、あるネットユーザーが2009年4月、「和歌山毒物カレー事件。林眞須美が、もしも冤罪だったら・・真犯人は二女なんてことはないでしょうか？」という題で、以下のように自分の推論について書き込みしている内容である。それに対して、もう一人のネットユーザーが(7)-Bのように反論を出している。

(7) 和歌山毒物カレー事件²⁸

A「毒入りカレー事件。もしも冤罪だったら・・真犯人は二女なんてことはないでしょうか？」

無罪を主張している理由の一つに、鍋の近くに一人でいた白いTシャツ姿の女性が目撃されているけど、ますみ²⁹被告は当日黒いTシャツを着ていたそうです。

白いTシャツを着てたのは二女だったそうですね。

ヒ素の使い方のわかっているますみ被告が4人も殺すほど大量にヒ素を入れるでしょうか。

家族はヒ素を持ち出せるし、使い方が分からず大量に入れたということはないでしょうか。

いくら何でもそこまで考えるのは飛躍しすぎですか？

²⁸ ウィキペディア：1998年7月25日夕方に和歌山県和歌山市の園部地区で行われた夏祭りにおいて、提供されたカレーに毒物が混入された事件である。主婦のHが犯人として逮捕され、2009年5月18日には最高裁判所にて死刑が確定したが無実を訴え再審請求中。……当初から直接証拠がなく、状況証拠の積み重ねだけで有罪とされたが、不自然な点が多く識者から冤罪を指摘する声も多く上がっていた。

²⁹ ウィキペディアでいう「主婦のH」のこと。

B 二女は事件当時中学2年生。それはないと思う。

この中日新聞の記事なんかを見ても、確かにあやふやな点が多いようです。

目撃された白いTシャツを着た女性が蓋を空けていたのは、ヒ素の入ってない方の鍋。

二女は鍋を空けてカレーを味見している。

真須美被告は当日黒いTシャツを着ていた。

黒いTシャツを着た女性が鍋の蓋を空けた所は誰も見ていない。

娘も食べるカレーにヒ素を入れるだろうか。

同じヒ素を自宅に持っていた住人は他に近所に6人ほどいた。など不審な点は多々ある。

彼女を犯人に仕立て上げて、舌を出している真犯人が本当に居ないのでしょうかね？彼女が起こした保険金詐欺は22件、儲けた金額も大きい。カレー事件と類似した手口だが、これらの事件では死者は出ていない。むしろ、「死なないようにして、保険金を取った」事件だった。つまり真須美被告には十分なヒ素に対する知識があった。このカレー事件は、無差別大量殺人事件であり、金が入ることは一切なく、逆に自分に疑いがかかってくるのは必至。なのに自分の首を絞めるような事件を起こすだろうか？真須美被告には動機が無い。また、このカレーを我が子が食べる確率は高かった。現に次女は味見して食べている。真須美被告の子供は4人居て、この日は地域のお祭り。カレーの鍋は2つあり、一つだけヒ素が入っていたが、いつ自分の知らない所で子供たちが来てカレーを食べるか分からない。なのに致死量超えるほどヒ素を入れますかね？

(ヤフー知恵袋 2009年4月21日より)

この和歌山毒物カレー事件に関して、例5-(7)Aの主張は逮捕された被告は実は犯人ではなく、二女が犯人だと疑っている。これに対して、例5-(7)Bは二女も犯人ではないと反論している。例5-(7)Aを書いた投稿者が被告が無罪であると主張している大きな根拠として、「鍋の近くに一人でいた白いTシャツ姿の女性が目撃されている」からである。しかし、事件当日、被告は「黒いTシャツを着ていた」ということで、目撃情報と一致しないから、被告は実は犯人ではなく、当日白いTシャツを着ていた二女が真犯人であると考えている。つまり、以下の図のような構造である。

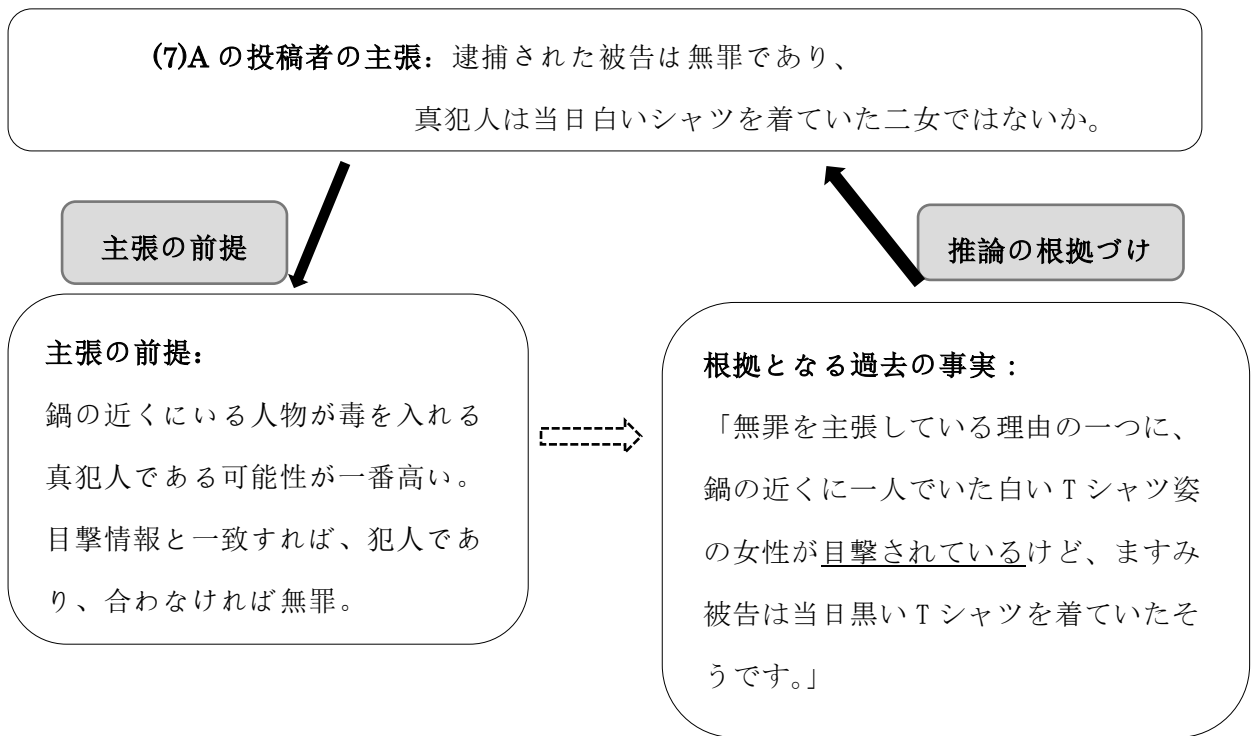


図 5-4-7. 例 5-(7)A の図式

「真犯人は二女なんてことはないでしょうか」という説に対して、Bの投稿者は「二女は鍋を空けてカレーを味見している」、「現に次女は味見して食べている」を根拠として、反論している。この推論、主張の前提となるのは、犯人は自分が毒を入れたカレーは絶対食べないという常識である。つまり、カレーを食べた二女は絶対犯人ではないということの有力な証拠だと考えている。このことを図にすると、以下のようになる。

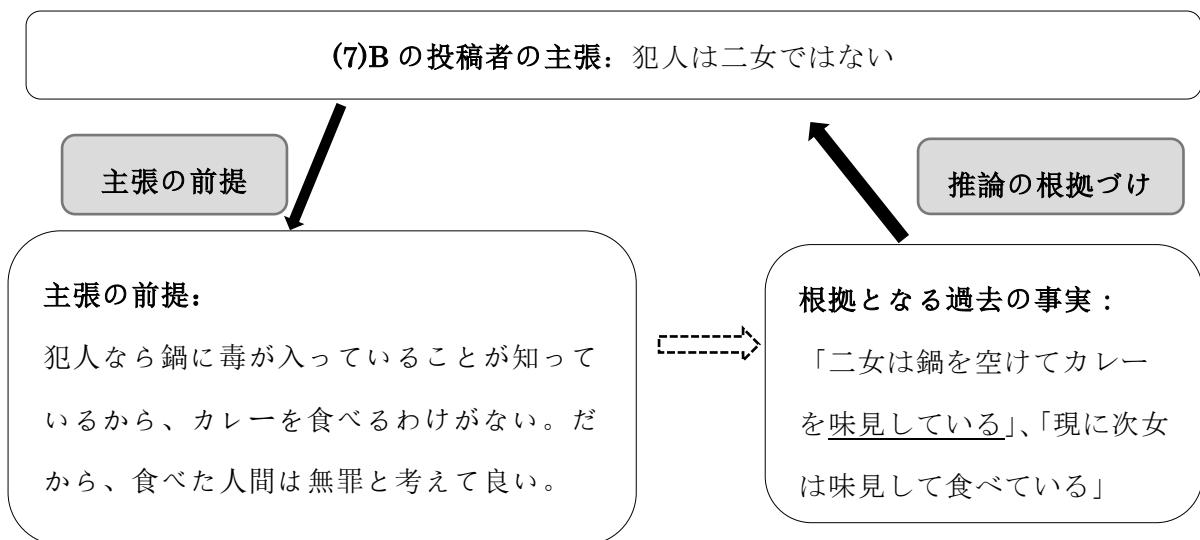


図 5-4-8. 例 5-(7)B の図式

つまり、7(A)も7(B)も、投稿者の主張はすべて、犯人に関する目撃情報や「犯人は自分が毒を入れた鍋を食べない」だろうという世間一般の常識や考え方に基づいて判断したのである。そして、このような前提のもとに、過去の事実を根拠に主張を立証しているわけである。

また、7(B)の「黒いTシャツを着た女性が鍋の蓋を空けた所は誰も見ていない」の「見ていない」も否定の形を使っているが、実はこの「ていない(テイル)」も「立証のための情報提示」に分類すべきものであろう。7(B)の投稿者も被告は犯人ではないと考え、この過去の事実を持ち出した。投稿者の主張の前提となるのはもし黒いTシャツを着ていた被告は犯人であれば、夏祭りという大勢の人が集まる場所で毒を入れる際に、見られているはずである。しかし、全くこのような目撃情報がないということは被告はやっていない、つまり、無罪ということである。この前提に基づいた主張を裏付けるために、過去の事実を有力な根拠として、「テイル」で表している。もし、ただ過去のこの事実を述べるだけであれば、「黒いTシャツを着た女性が鍋の蓋を空けた所は誰も見ていなかった」のように「見ていなかった」を使うべきではないだろうか。

次に、日本語では、以下の例のように、人の経歴や履歴を紹介する際にも、「テイル」を使うことがある。

(8) 前衛の芸術家で、作家としても芥川賞を受賞した赤瀬川原平さんが、26日、敗血症のため、東京都内の病院で亡くなりました。77歳でした。

赤瀬川原平さんは横浜市で生まれ、美術学校で油絵などを学びながら公募美術展に芸術作品を出品し、芸術家として活動を始めました。

さまざまなものを包装紙で包むなどして「梱包」するなど、前衛的な芸術作品の制作やパフォーマンスで活躍し、昭和40年には千円札を題材にした作品が通貨模造に当たるとして起訴され注目を集めました。

(中略)

また、物忘れなど年を取ることに伴う現象を「老人力」と名付けて前向きに捉えるというユニークな発想も提唱し、平成10年の新語・流行語大賞を受賞しています。

(中略)

赤瀬川原平さんと長年、交流があった建築家で、建築史が専門の藤森照信さん

は「普通の人がちょっと気がつかない、おもしろい発想をする人で、戦後の都市の見方など今まで全くなかった新しいものの見方を提示してくれた人でした。細く長く、90歳くらいまでは私たちに新しい考え方を見せ続けてくれるものだと思っていましたが、もう聞けなくなるのだと思うと非常に残念です。人柄は、千円札事件から想像される戦う人というのとは違い、芯は強いが、穏やかで日常的には自己主張しない人でした。『老人力』に見られるように、彼の残したものは、本人にその気がなくても社会を変えてきたし、これからも脈々と息づいていくものだと思います」と話しています。

(NHK「かぶん」ブログ 2014年10月27日より)

この例5-(8)の記事を書いた記者の主張は、記事の中で友人で建築家の藤森氏の言葉「普通の人がちょっと気がつかない、おもしろい発想をする人で、戦後の都市の見方など今まで全くなかった新しいものの見方を提示してくれた人でした」にあるように、亡くなった前衛芸術家の赤瀬川氏がとても才能があり、新しい流行を作り出す天才だということである。この主張の根拠として、「物忘れなど年を取ることに伴う現象を「老人力」と名付けて前向きに捉えるというユニークな発想も提唱し、平成10年の新語・流行語大賞を受賞しています」を持ち出している。この受賞歴を証拠として持ち出したのは、ある人物がある分野で賞を受賞したということは、その人物がその分野で優れた才能があるということの証明となるという世間一般の常識が前提となっている。この受賞歴が記者の主張の根拠付けになっているため、「受賞している」のように「テイル」が使われている。このような用法は、従来の先行研究では、「経歴・履歴」と分類されてきたが、実はこれも「立証のための情報提示」であると考えられる。

このことを図で表すと以下のようなになる。

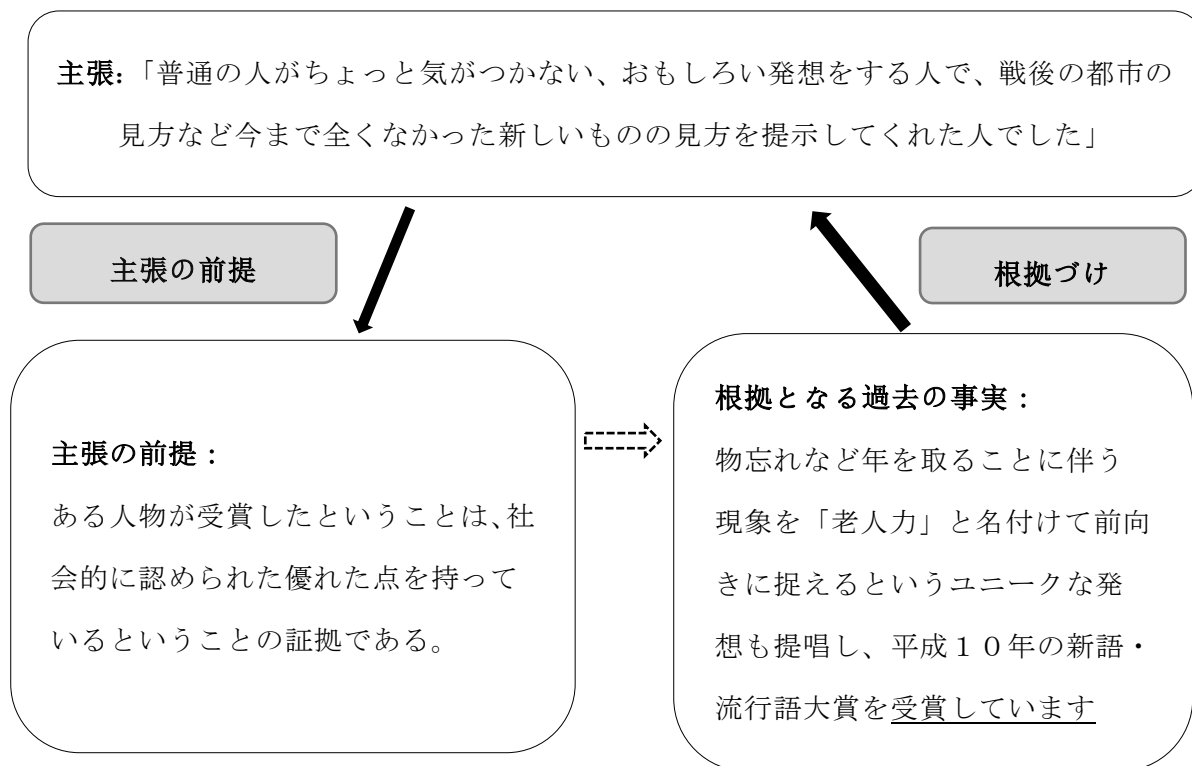


図 5-4-9. 例 5-(8)の図式

次に、留学生が論文やレポートなどを書く際によく間違える引用の「テイル」について、実際の論文の中で使用されている例を用いて分析していきたいが、論文の中での引用については、庵・清水（2003）は「引用した説が出ている論文などが書かれた時点（過去）より、それが存在する時点（現在）の方が重視されるためである」としている。そのほか、「歴史的事実を述べる時も『～している』が使われることが多い」と指摘している。筆者はこのような用例も「立証のための情報呈示」で説明できるのではないかと考える。

(9) 要旨による：

工藤の「パーフェクト」には本来機能的に異なる「完了」と「効力持続」が渾在しており、その結果、かえってその特徴がわかりにくくなっている部分がある。本稿では工藤（1995）に対する有力な批判である岩崎（2000）を参考にしながら、工藤の「パーフェクト」を「完了」と「効力持続」に解体すべきであることを主張した。このパーフェクトという概念は「完了」という用語の問題点を避け、「一てい一」の意味の重要な側面を明らかにした点で重要なものである。

本文による：

この工藤の見方に対し、最近岩崎（2000）が反論を試みている。岩崎は「述語論における形態素主義」の立場からテンスに関する興味深い議論を展開している。その中で重要なのは、工藤の言うパーフェクトを表す「一ていー」と「～た」に関するものである。

まず、「一ていー」に関して岩崎は（6）（7）を挙げ、どちらの場合も「開いてい十る」「食べてい十る」であり、ともに「開いてい」「食べてい」で表される「状態」及び「効力」が「る」によって発話時に位置づけられているのであり、両者の間に本質的な差はなく、工藤の言う「パーフェクト」は「結果継続」（本稿の「結果残存」）のバリエーションに過ぎないと主張している。

（6）³⁰窓が開いている。（結果継続。岩崎（2000）の（9））

（7）ごはんはもう食べている。（現在パーフェクト。岩崎（2000）の（10））

一方、「～た」に関しては、工藤のようにこれを「現在パーフェクト」とした場合、「～た」の基準時は「現在」であるが、「～た」が「現在」を表すというのは形態論的に見ておかしい（岩崎の用語で言えば「形態論的に筋が通らない」）としている。

本稿では岩崎（2000）の主張のうち、「一ていー」に関する部分について重点的に検討する。「～た」に関する部分については本稿の最後に私見を述べるに留める。

（庵功雄（2001）「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」）

例 5-(8)は、庵氏が「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」で、「テイル」と「テイタ」に共通する「「一ていー」の意味」について分析を行っている。日本語の「テイル」の研究、およびテンス・アスペクトの研究に関しては、工藤真由美氏の「パーフェクト」は学界においては、有名な説であるが、庵氏はこの「パーフェクト」の概念の提出に対して、批判を持ち、「パーフェクト」を「完了」と「効力持続」に解体すべきであると主張している。庵氏は自分の主張を立証しようとし、「有力な批判」である岩崎氏の説を参考にしながら、例 5-(8)のように述べている。岩崎氏の 2000 年の論文、つまり、1 年ほど前に書かれた論文を引用する際に、「反論を試みている」、「議論を展開している」、「～と主張している」、「形態論的に見ておかしいとしている」のように、すべて「テイル」を使っていることがわかる。つまり、先行研究は無論、実際に過去に研究者によって書かれたも

³⁰（6）と（7）の通し番号は庵の論文の番号である。

のであり、現在の著者の主張の根拠ともなっているのである。先行研究は著者の主張の根拠付けにする理由は、つまり、前の例でいう「前提」は、先行研究がこの専攻分野の研究者によって書かれているものであるため、いい加減なものでは無論ない、熟慮し、実際の調査や考察などに基づいて書かれたものであるから、信憑性が高いと考えても良いであろう。また、ある先行研究を引用しているということは、自身の論文などの主旨と深く関係していなければ引用するはずがないというのが一般的な考え方である。また、引用した内容に基づいて、自分の理論の展開、更に反論などをしていくわけである。つまり、自分の主張、反論を導き、立証するための先行研究であるので、「テイル」を使っていると考えられる。このことを図で表すと以下のようになる。

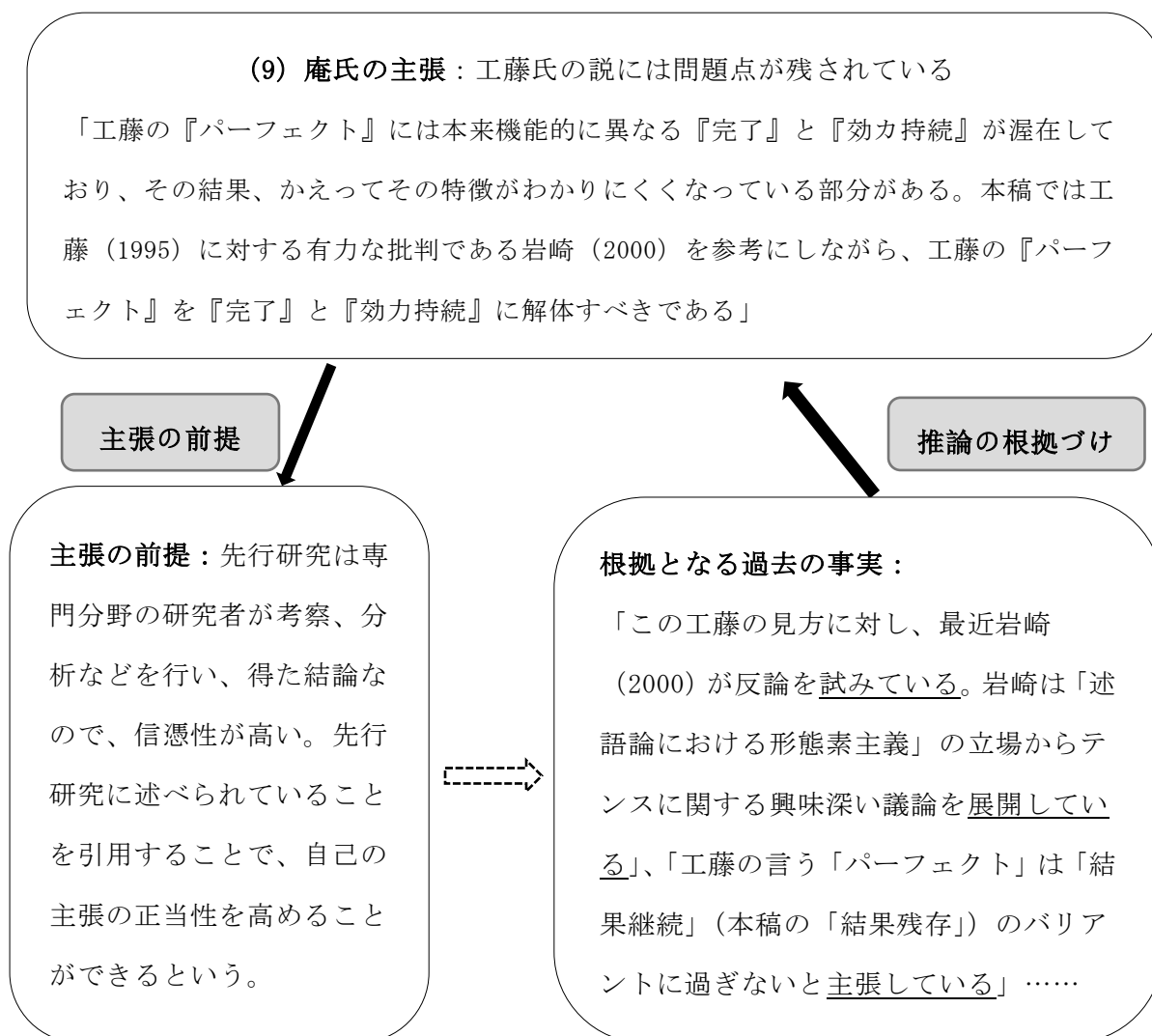


図 5-4-10. 例 5-(9) の図式

また、引用というと、レポート、論文、発表だけではなく、記事や日常生活の発話などでもよく使われている。この際にも、「テイル」構文を用いて引用する場合もある。次に、このような場合の「テイル」について、分析を行っていきたいと思う。例えば、2015年のドラマ「Dr. 倫太郎」では、主人公の精神科医、日野倫太郎は周りの人や患者の病んだ心を解きほぐそうとしたり、自分の言いたいことを主張したりする時に、頻繁に好きなコメディアンのお話を引用する。彼は引用する際に、いつも次の例(10)～(12)のように、「僕の大好きなコメディアンはこう言っています」という言葉から展開していく。

(10) 中畑まどか (倫太郎の妹) : ねえ、ワイドショー見たよ。屋上から落っこちた時に、頭打ったんじゃない？

水島百合子 : 酔っ払ってるだけ。

中畑まどか : ねえ、パート先の人に頼まれちゃったの。お兄ちゃんのサインが欲しいんだってさ。何かひと言いいこと、書いてよね。

日野倫太郎 : 僕の大好きなコメディアンはこう言っている。「名言は好きだが、名言を言おうとする奴は嫌いだ」。

中畑まどか : いいから、書いて。

(日本テレビ 水曜ドラマ『日野倫太郎』第1話より)

主人公の日野倫太郎は「患者の話を丹念に聞き、人々の傷ついた心にとことん寄り添うことで、病める心を解きほぐす」というような治療法が世間でも評判で、大学でも教鞭を執り、多くの著書を出版し、テレビにも出演する人気者である。ある日、ビルから飛び降りて自殺しようとした患者を助けたことで、またメディアに取り上げられ、一層人気を博した。例 5-(10)は、妹がパート先の人に頼まれ、兄の倫太郎にサインを書くよう頼んだ。日野倫太郎はそのようなことはあまり好きではないので、断ろうとする。そこで、ストレートではなく、自分の好きなコメディアンのお話の「名言は好きだが、名言を言おうとする奴は嫌いだ」という言葉を引用し、相手に自分の言いたいことをわかってもらおうとする。つまり、自分の好きなコメディアンが言っている「名言は好きだが、名言を言おうとする奴は嫌いだ」という言葉に自分も共感し、できるだけそうするように心がけているということである。だから、他人にサインして良い言葉を書くなんてことは自分の行動指針に違反しているから、そんなことしたくないと言いたいというわけである。主人公は明確に言っ

てはないが、この例をまとめると、以下のようなになるであろう。

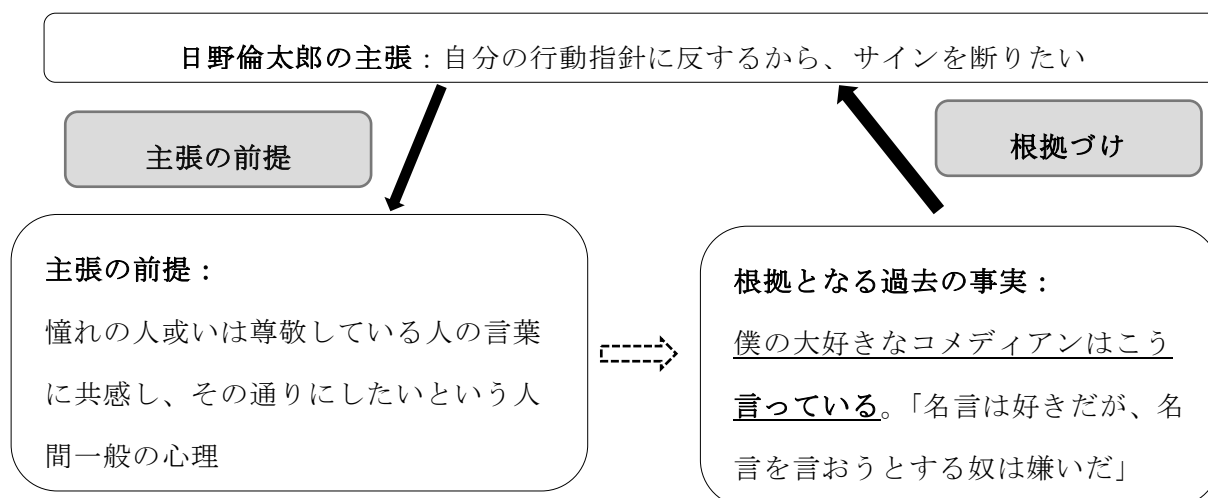


図 5-4-11. 例 5-(10) の図式

(11) (ある日、福原大策という日野倫太郎と同病院の研修医が日野倫太郎に対話精神療法のロールプレイングをお願いしたが、話が途中からただの恋愛相談になっている…)

日野倫太郎：理性を失う非常に危険なものが恋愛というわけです。さらにホルモンバランスの話します。恋愛中男性は男性ホルモンが、女性は女性ホルモンがそれぞれ増大します。男性の場合、アグレッシブになり、仕事もできるようになりますが、優しさが減り、僕達の仕事でいえば、患者さんの話を聞けなくなってしまう。共感的に接することが難しくなってしまう。そういうことも起こり得るのです。

福原大策（研修医）：そうなんですか。

日野倫太郎：福原君は、どんな医師になりたいですか。

福原大策：それは、日野先生のように一人一人の心に寄り添い、どんな患者でも救える精神科医になりたいです。

日野倫太郎：ならば、恋愛は控えるべきです。精神科医にとって恋愛は百害あって一利なしです。僕の大好きなコメディアンもこう言っています。

福原大策：コメディアン？

日野倫太郎：「恋愛とは変態への第一歩である」。

(日本テレビ 水曜ドラマ『日野倫太郎』第2話より)

例 5-(11)では、研修医の福原が恋の悩みについて日野倫太郎に相談しているシーンである。福原はある女性に片思いしており、大変悩んでいる。日野からすれば、精神科医は感情に流されず、専門性を保つべきであり、特に恋愛感情からは遠ざかるべきだと考え、「恋愛は控えるべき」と主張している。この主張を相手に納得させるため、日野は好きなコメディアンの言葉、「恋愛とは変態への第一歩である」を引用しているわけである。つまり、自分の好きな、或いは尊敬する人物の言葉に深い感銘を受け、自分の行動指針にすることは人間の一般的な考えである。だから、それを引用して、自分の主張の正当性を高めようとしている。この時の引用表現として、「テイル」を使っているわけである。このことを図で表すと以下のようになる。

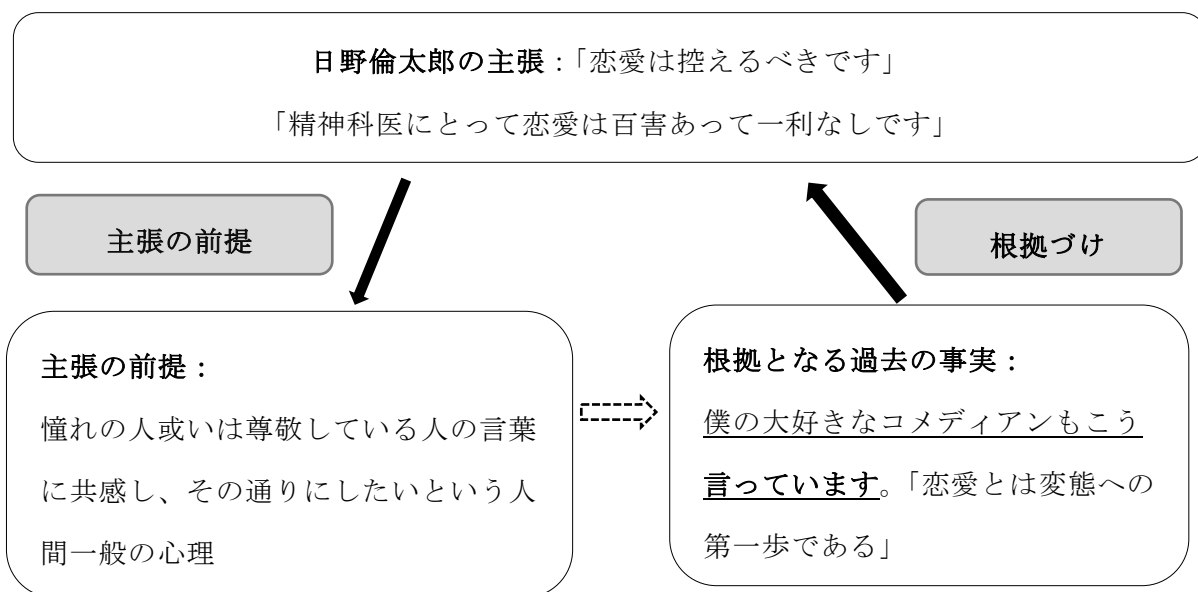


図 5-4-12. 例 5-(11)の図式

(12) ホームページより：ある日、有名なバレエダンサーの三浦牧子（マイコ）が診察中に精神科医の宮川貴博（長塚圭史）からセクハラをされたと訴え、騒ぎになる。しかし、宮川は転んだ彼女を助けただけだったと主張。その後、牧子がセクハラで病院を訴えると言出し、追い詰められた宮川の精神状態は悪化。倫太郎は、危機に陥った宮川を助けようとするが…。

日野倫太郎：失礼します。

（主人公を敵視する精神科医）宮川貴博：な…何の用だ？

日野倫太郎：安定剤が効かないそうですね。

宮川貴博：何だ！俺をバカにしに来たのか？

日野倫太郎：あれ？これは…

宮川貴博：三浦牧子が診察のたびに持って来たんだ。私の関心を引くために。まったく…それが何でこんなことに。

日野倫太郎：宮川先生、僕の大好きなコメディアンはこう言っています。

宮川貴博：コメディアン？君の教養のレベルが知れるな。

日野倫太郎：僕がこの世で最も尊敬する人です。その彼はこう言っています。「人生とは、後悔するために過ごすものである」。

宮川貴博：要するに何が言いたいんだ！私は、はっきり言って、お前のことが嫌いだ。1人にしてくれ。

(日本テレビ 水曜ドラマ『日野倫太郎』第4話より)

例5-(12)は、同じ精神科医の宮川貴博は患者を助けただけなのに、セクハラで訴えると言い出された。それで、追い詰められた宮川の精神状態が悪化し、日野倫太郎はその彼の病んでしまった心を解きほぐそうとし、好きなコメディアンの言葉、「人生とは、後悔するために過ごすものである」を引用した。つまり、この引用の言葉には彼の主張が込められている。日野は宮川に誰でも人生とは後悔することなのだから、いちいち気にして意気消沈する必要はないと諭したいのである。この相手に伝えたい、つまり伝達したいこと的前提は例5-(10)と例5-(11)と同様であり、これは、人間一般が持っている憧れの人或いは尊敬している人の言葉に共感し、その通りにしたいということであり、その好きな名言に従いたい気持ちが前提となっている。図で表すと以下のようなになる。

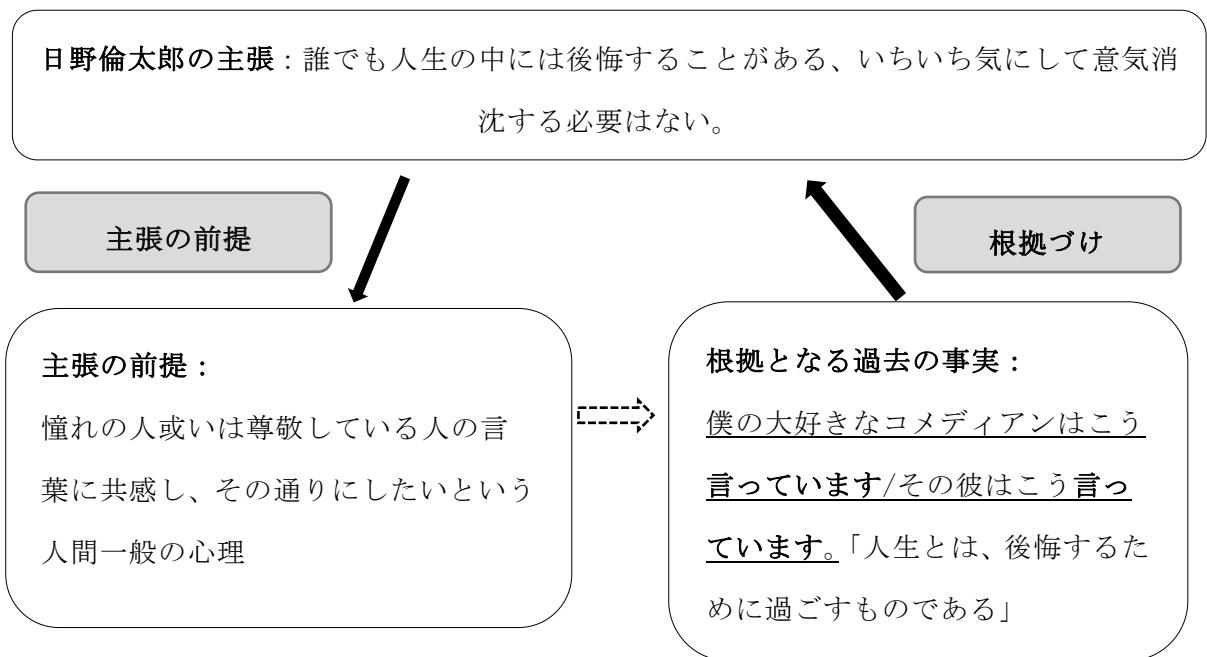


図 5-4-13. 例 5-(12) の図式

例 5-(10)～5(12) は、主人公の精神医日野倫太郎が自分の言いたいことを伝達する時に、或いは相手を説得したい時に、必ず「僕の好きなコメディアンはこう言っている」という言葉から始まる。この引用は、主人公の主張などの根拠づけにもなっているし、場合によっては主人公が言いたいことそのものでもある。この時の言葉の引用として、「言った」や「言っていた」ではなく、「言っている」を使っている。つまり、主人公は患者を説得するために、この引用を行っている。つまり、この「言っている」は自己の「主張の立証のための情報提示」になると言えよう。

では、ドラマから収集した用例を用いて、この「言っている」の意味を検証してみたいと思う。

(13) (検事は容疑者が一人で居酒屋に行ったことにずっとこだわり続け、そのことを追及し続けている。事務官は被害者から告訴の取り下げが来ているので、これ以上の追及は無意味だと思い、検事に中止させようとしている)

久利生検事：なのに、居酒屋に一人で行くの？

麻木事務官：「被害者は訴えないと言っています」

(ドラマ『HERO2』第1話)

(14) (古井は被害者として西高生に殴られたにも関わらず、その事実を認めない)

古井 豊：知らねえって言ってんだろ！

警察：いやいや、西高生は素直に認めてるんだよ。「いずっぱこ」の中で君に暴力を働いたって。

古井 豊：だから、本人がやられてねえって言ってんだよ。

警察：どう見てもやられてるだろ。直接謝罪したいって言ってるよ。

古井 豊：ざけんな、コラ！俺のメンツ丸潰れやんけ。

(ドラマ「ごめんね青春」第5話)

例 5-(13)は、検事が容疑者を執拗に追及し続けているのに対して、事務官は告訴が既に取り下げられているので、これ以上尋問を続ける意味がないと考え、検事に対して追及をやめるように、「被害者は訴えないと言っています」と持ち出している。つまり、事件にもならないのに、これ以上の追及は無意味だと説得しようとして、この言葉を述べたものと考えられる。

また、例 5-(14)は、警察は証拠を掴み、被害者古井が他の高校の学生に殴られたという事実を認めさせようとしているところである。しかし、古井は高校生に殴られたというのでは、メンツが立たないと思い、それを強く否認している。警察は古井に認めさせるため、決定的な証言として殴った加害者本人が「直接謝罪したい」と述べたことを古井に伝えた。これも例 5-(13)と同様に警察官の説得の根拠づけとして用いているものと考えられる。

5.4.2 「言っている」、「言った」、「言っていた」について

日本語学習者にとっては、上で述べてきた「言っている」の使い方のほか、類似した「言った」や「言っていた」との使い分けが難しい。次に、「言っている」と「言った」、「言っていた」を手がかりに、引用、主張の「テイル」に対する「タ」、「テイタ」の違いについて簡単に比べてみたいと思う。

日本語の「言った」に関しては、二つの用法がある。一つは、スピーチなどで用いられる著名人の有名な言葉の引用である。一般に著名人の言った名言の引用に関しては、以下の例のように、「と言った」が用いられる。もし、これが「言っていた」であれば、直接本人に会って聞いたような感じがする。

(15) アインシュタインは「神はさいころを振らない」と言った。自然界では同じ条件ならば必ず同じ結果が生じる、という意味だ。同じ条件でも異なる結果が生じうるといふ量子力学の理論への疑念をそう例えた。

難しい科学論争はさておき、20世紀を代表する物理学者は、こうも考えた。人間は戦争という危険なさいころを振る。そして核兵器使用という最悪の目を出すこともある一と。

広島、長崎への原爆投下に強い衝撃を受けたアインシュタインは、哲学者ラッセルと共に、核戦争による人類滅亡の危機と戦争以外の方法での紛争解決を訴えた。

1955年の「ラッセル・アインシュタイン宣言」だ

(中略)

今回は東日本大震災による福島原発事故を踏まえ、「原子力の平和利用のリスク」も議題に。神のさいころは時に、大災害という想定外の目が出ることも、人類は知ってしまったのだから。

(2015年11月4日 西日本新聞朝刊による)

(16) 発明王のトーマス・エジソンは、「天才とは1%のインスピレーションと99%の努力だ」と言いました。

この言葉は、人間は努力し続けたら必ずいつかは成功できるという言葉として瞬く間に世間に浸透していきました。

しかし、エジソンは、サクセス・マガジンという雑誌の取材で、以下のように答えています。

私は1%のインスピレーションがなければ、99%の努力は無駄になると言ったのに、世間は私の言葉を都合のいい美談に仕立てあげ、私を努力の人と美化し、努力の重要性だけを成功の秘訣と勘違いさせている。

インスピレーションは私の才能であり、その才能を努力によって伸ばしたことにより、現在の成功があるんだ。(トーマス・エジソン)

世間で認識されている言葉の意味は、実は正反対にとらえられていたのですね。
一万回の失敗についてインタビュアーに尋ねられた際に、「失敗ではない。うまく

いかいない方法を一万通り発見しただけだ。」と言っているエジソンだからこそ、
このように誤解されたのかもしれない。

(『rehatora.net』のジェイク・ロナルドソン(2011)

『エジソン・ストーリー The Thomas Edison Story』の紹介記事より)

例 5-(15)では、「アインシュタインは『神はさいころを振らない』と言った」というのは、その後の話の導入として用いられている。このアインシュタインの言葉は現在の話者の主張の根拠というわけではなく、その後続く話のきっかけとして、読者に対する掴みとなるものである。この比喩的な言葉はそもそも実質的な意味を持っていない。

例 5-(16)では、エジソンの有名な言葉「天才とは1%のインスピレーションと99%の努力だ」は、この記事の出だし、あるいはきっかけとして引用されていることが分かる。書いた人の本当の主張は「エジソンの言葉は誤解されている」ということである。この「～と言いました」で表された部分は全く話者の主張の根拠づけにならず、まさに反対のことを言っているのである。ただ、この世の中でよく知られているこの名言は、出だしとして使うと、読者の目を引く効果があり、しかも、これに続く記事の内容に直接関連するものを引用していることが分かる。それに対して、下線を引いた「答えています」の「テイル」が前に述べてきた「立証のための情報提示」であると考えられる。エジソン本人の話を用い、本当の発話の意図を示すことで、実はこの言葉が世間に誤解されているということを証明するための根拠となっていることが分かる。これは、上の「立証のための情報提示のテイル」と同じパターンであるため、分析は省略する。

例 5-(15)と例 5-(16)のように、「言った」は著名人の名言を引用する際に、広く用いられる、ただその言葉をそのまま引いてきたというだけである。つまり、これから始まる話と何らかのかかわりがあり、かつ聴衆や読者の注意を引き付けるという目的があるかもしれない。この引用は単なる引用であり、自己の主張の立証の根拠とするものではない。また、その名言は皆に知られており、よく使われているという特徴がある。

もう一つは、「言った」で日常的な内容を表し、その発言が実際にあったという事実の指摘の用法である。

(17) 今さんぽ行くって言ったでしょ！聞こえたよ！

(ブログ)

(18) ボクが「バイク友達が出来ないって言ったら」

「バイク屋に行ったら自然にできる」って君たち言ったよね？

二ヶ月くらい前にボクに言ったよね？

一人も出来ないんだけど？全然出来ないんだけど？君たちボクに嘘ついたの？

(ウェブ掲示板)

日常的場面での「言った」は内容ではなく、相手が確かに言ったという事実の確認、或いは指摘ではないかと思う。例 5-(17)は犬の飼い主が犬を擬人化してブログに書いた内容である。飼い主が「さんぽ行く？」と誘ったので、ペットの犬は大喜びで、その飼い主の「散歩に行く」という言葉そのものを指摘して、それを確認しているものと考えられる。

また、用例 5-(18)は話者が友達の言ったことに不満を感じ、友達に言いわけをさせないよう「君たち言ったよね」と指摘し、その事実があったから、否定できないと言っているのである。つまり、このような場合、「言った」で表す重点は何を言ったかという内容ではなく、「そのことを言った」という事実そのものを指摘するというわけである。これに対して、「言っていた」は単なる内容の伝達、すなわち「伝聞」となる。

つまり、日本語では、相手の言葉を「言ったよね」、「言ったでしょう」、「言ったのに…」で締めくくると、相手が本当にそのことを言ったという事実を指摘し、相手に言い訳や否認をさせないように用いていることが多い。

(19) 「誰にも言わないで」って言ったのに、いつのまにか周囲に知れ渡っていたなんて、よくある話。

(読売新聞「発言小町」2010年7月22日により)

また、用例 5-(19)のように、「言った」は自分の発言に関しても言える。この場合も一種の事実の指摘である。ただし、これは他人の発言ではないため、ここでは詳しく論じないことにする。

また、日本語では、伝聞を表すには以下の用例のように「言っていた」も使う。

(20) 川尻支部長：でも麻木くんには麻木君のよさがある。

麻木事務官：私のよさ？

川尻支部長：若いのに堂々としてるじゃないか。江上検事が言ってたよ。君がいてくれると、取り調べがびしっと締まるんだそうだ。

(ドラマ『HERO 2』第1話)

(21) 武士沢吉洋：田之倉、遅いね。

青石花笑：大学に寄ってから来るって言ってたので。

(ドラマ「きょう会社休みます」第2話)

(22) 国際交流愛好会の仲間とディズニーシーへ！

写真好きお嬢様が「女性はディズニーに行くと元気になるよ」って言ってたけど、あれ本当だね。

(Facebook)

以上の三つの用例を見ると、「～と言っていた」は直接会って直に聞いた言葉そのままを伝えており、話者の主観的な感情が入っておらず、陳述のようなものである。つまり、過去の発言の内容そのものの伝達ということであろう。この内容の伝達の「～と言っていた」で最もわかりやすい例は、「田中さんが『よろしく』と言っていました」のような文である。「よろしく」はただ相手が言った言葉そのままであり、単なる言葉の伝達であるということがわかる。

以上のことをまとめると、以下のようなになる。

「**言っている**」：話者の主張を立証するための情報提示

「**言った**」：①著名人の名言の引用：話者の気持ちなどが薄い

②日常的な内容：相手が確かに言ったという事実の指摘

「**言っていた**」：直接会って聞いた内容或いは言葉そのものの伝達、伝聞

cf. 「**そうだ**」：単なる伝聞（直接会わなくても良い）

日本語の「タ」と「テイタ」もほかに、様々な用法があるので、ここでは、ただ混乱しやすい文法項目であるため、実際の用例を用いて、比較しながら、「テイル」の特徴を導くだけである。そのため、上の部分では、本論の研究対象「テイル」のみについて詳しく論

じた。

5.4.3 「立証のための情報提示」の意味規定とその関連図式

以上のことをまとめると、日本語では、発話者、或いは著者は自分の主張を相手に提示することにより、自分の主張を立証したり、相手を説得したりするといった目的で、過去から、人為的にある出来事を持ち出し、立証の根拠とする際に、「テイル」構文を使うのではないかと考える。また、これらの主張は一定の前提に基づいているのである。この「前提」の部分には特には制限がなく、事実、ジンクス、社会ルール、一般常識、経験などのように一般的に認められているようなものである。話者はこの「前提」に基づき自分の判断を下しているということである。この過去の出来事は従来の「影響」や「効力持続」で説明できない部分があるのは明らかである。また、この過去の出来事は有益な「情報」であると考え、この「情報」が現在の話者、或いは筆者の主張の根拠づけになっている。この際に、日本語では、過去のことについて述べるときに、「テイル」を使う。つまり、日本語の「テイル」構文は過去の出来事などに関する「立証のための情報提示」という機能を持っている。また、この用法は以下のような談話構造として分析可能である。

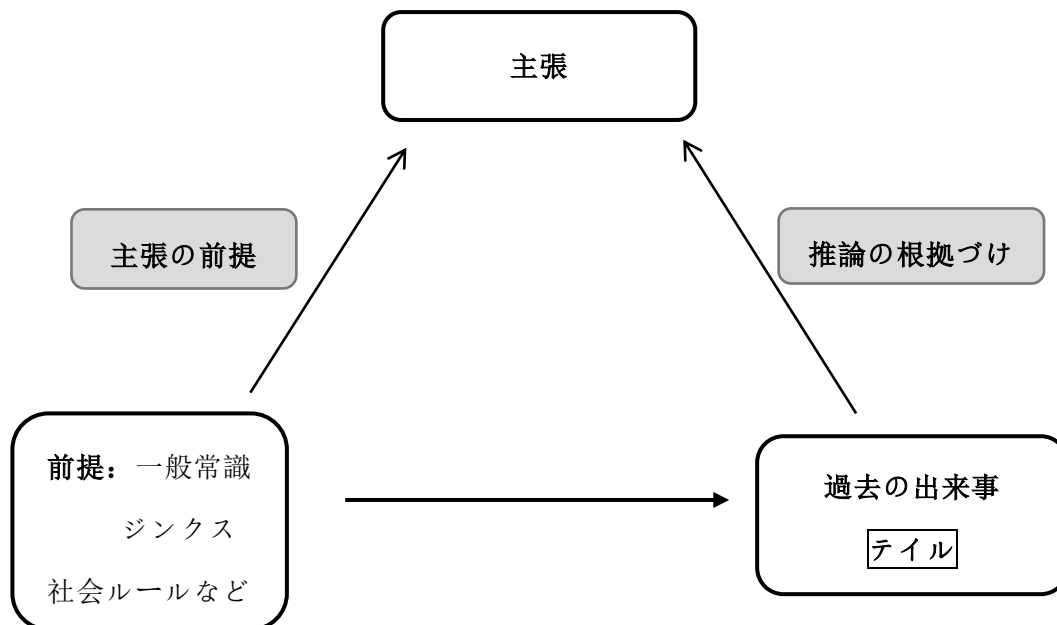


図 5-4-14. 「立証のための情報提示」の「テイル」の談話構造

つまり、談話分析からわかったことは、話者には「主張」したいことがあり、この「主

張」はある「前提」に基づいている。そこで、自分の「主張」を他人に認めてもらうよう、
 或いは他人を説得するために、過去の既に起きた出来事を主張の根拠として持ち出し、立
 証しているわけである。

更に、上の図 5-4-14 の構造を詳しく分析すると、「前提」には「条件」と「結論」とい
 う二つの部分がある。話者が「テイル」で示す過去の出来事が「前提の条件」の部分にあ
 たり、話者が「主張」していることは、「前提の結論」の部分にあたるということである。
 図で表すと以下のようになる。

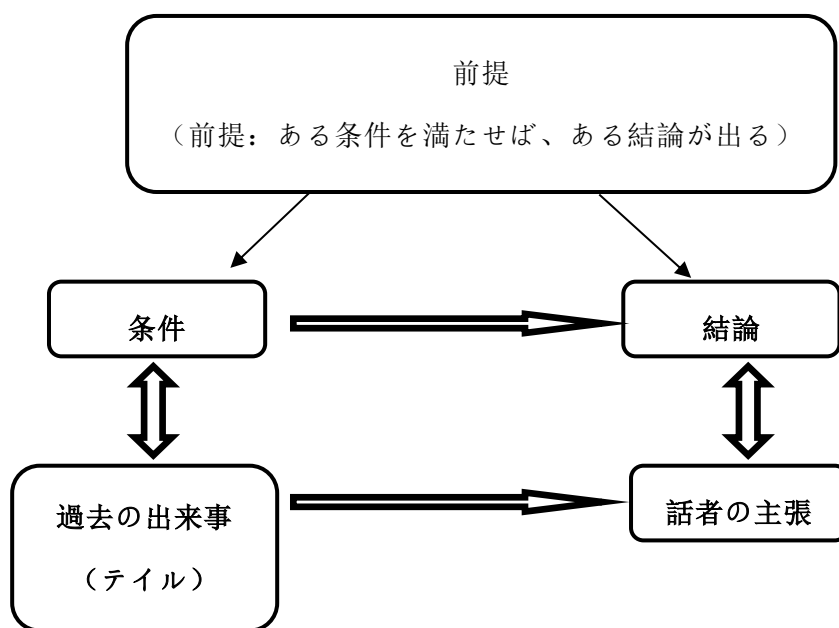


図 5-4-15. 「テイル」構文の談話構造の関係

この図 5-4-15 で示す「テイル」構文の談話構造をよりわかりやすく説明するため、第 5
 章の冒頭に挙げた例 5-(1)を用いて分析を少し加えたいと思う。

(1) 女子アナ界ばかりかテレビ界全体に激震が走っている。きっかけになったのは
 11 日の「ワイドナショー」(フジテレビ系) で元 NHK アナ・堀潤氏 (38) が放った
 一言。

「(NHK の) 有働 (由美子=46) さんは今年の紅白が終わったら、来年あたりフリ
 ーになるかも。この間、本を出したでしょ。NHK では本を出すと辞めるんですよ」「事
 務所の争奪戦になるでしょうね」などと話したことだ。確かに有働アナは昨年 10

月「ウドウロク」(新潮社)を出版している。そこで気になるのは「争奪戦」の方だ。
 どんな展開が予想されるか。芸能評論家の肥留間正明氏が言う。

(日刊ゲンダイ 2015年10月14日芸能ニュース)

この例を「テイル」構文の談話構造を用い、図式化すると以下ようになる³¹。

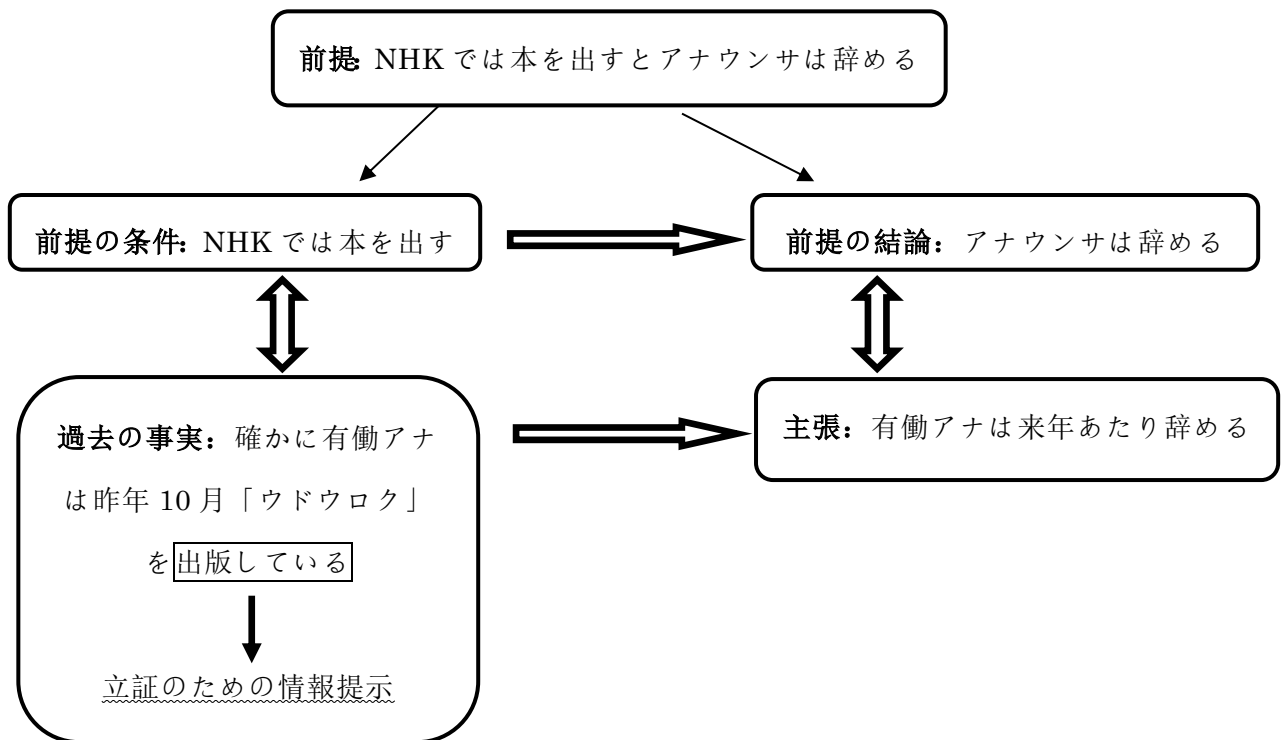


図 5-4-16. 「テイル」構文の談話構造の関係 (具体例)

次に、「テイル」構文の構造から、従来の説と本論の説を比較してみたいと思う。従来の説をまとめると、以下のような図になる。

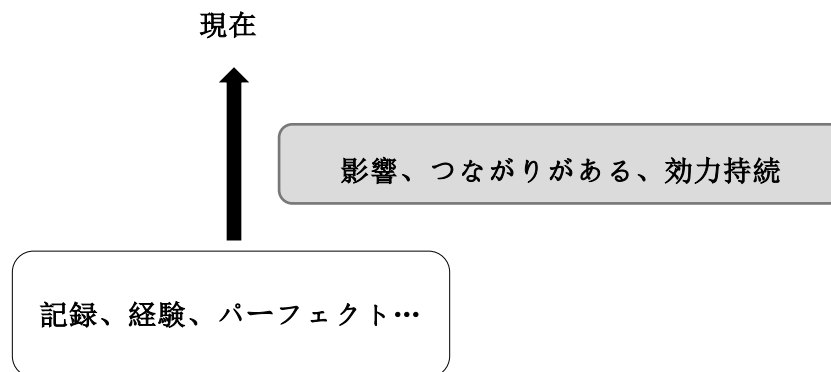


図 5-4-17. 従来の先行研究

³¹ この例の分析に関しては、既に前節で行ったので省略する。

しかし、本研究の結論と従来の結論を図式で比較すると以下のようなになる。

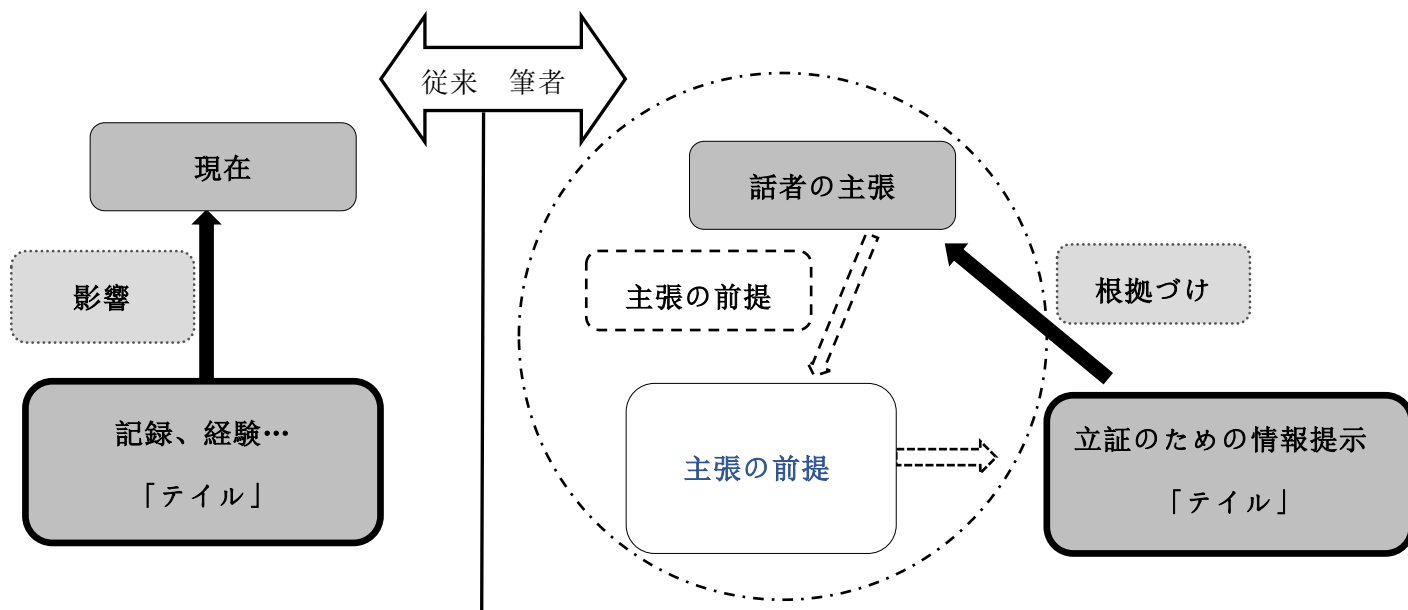


図 5-4-18. 従来の先行研究と筆者の説

第 6 章 結論および将来の展望

第6章 結論および将来の展望

6.1 結論

本研究の目的は日本語の「テイル」構文の意味・用法を再検討し、従来問題となってきた事項を明らかにし、「テイル」の分類を整理することにある。

従来の研究に基づき、筆者は「テイル」の意味・用法を自分なりに分類を以下のように行った。

- 1 「進行中の動作・変化」
- 2 「状態」
- 3 「繰り返し・習慣」
- 4 「長時間の継続・持続」
- 5 「立証のための情報提示」

また、この五つの分類の中で、最も問題が残されている2番の「状態」と5番の「立証のための情報提示」について考察を行った。

本章ではまず、本研究においてどのような結論が導き出されたかをまとめ、そこから得られた示唆について論じる。

第1章 はじめに

第1章では、研究の動機と目的、研究方法、論文の概要について論じた。

第2章 先行研究

2.1 では、「テイル」構文について、主な先行研究をまとめた。「テイル」に関する研究は、かつては、「～シ」、「テ」、「イル」とバラバラに分け、説明され、一つの形態素としては捉えられていなかった時代もあった。そのため、アスペクトの概念も生じにくかった。また、「テイル」のような日常頻繁に用いられる基本的なものは日本人にとっては、当たり前のもので、研究の対象として捉えられることはなかった。これを一つの構文として研究を始め、アスペクトという概念から「テイル」構文を説いたのは金田一春彦である。この節では、金田一春彦とそれ以降、現在に至るまでの藤井正、高橋太郎、吉川武時、寺村秀夫、工藤真由美、庵功雄など主な研究者ごとに、「テイル」の分類に重点を置いてそれらの

研究をまとめてみた。

第3章 「テイル」構文の用法に関する分類

3.1の個々の用法のまとめでは、第2章の個々の用法に関する先行研究の結果をまとめ、以下のように、自分なりに五つの用法に分類した。

1 「進行中の（動作・変化などの）動き」

今、テレビを見ている。

雨が降っている。

雪が目の前でどんどんとけている。

2 「状態」

単純状態：この道は曲がっている。

父に似ている。

結果の状態：雪が積もっている。

花が咲いている。

ニューヨークに行っている。

3 「繰り返し・習慣」

私は毎日朝ドラを録画している。

毎週日曜日に近くのスーパーで買い物している。

4 「長時間の継続・持続」

日曜日は朝から晩まで掃除をしていた。

今日は朝からずっと勉強している。

5 「立証のための情報提示」

あの人はたくさんの小説を書いている。（金田一）

犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。（庵）

3.2 では、1 番の「進行中の（動作・変化などの）動き」の用法は、ある時点で、動作や変化などの動きが丁度起こっている最中で、継続していることを表すものであり、この用法が「テイル」の基本的な特徴である「継続性」が最も良く表れている用法であるという結論を得、以下のような図式に示した。

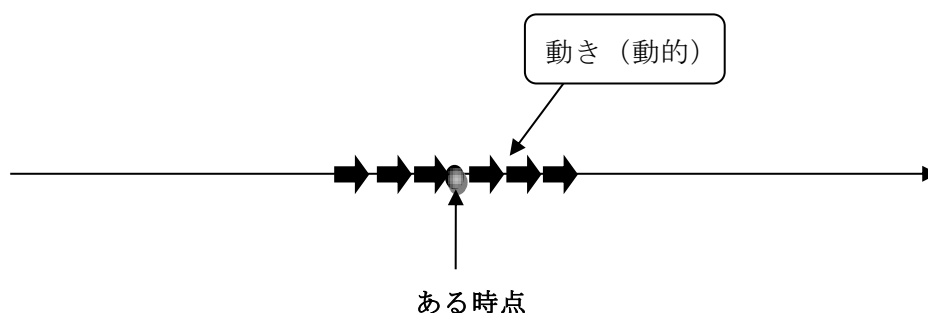


図 3.2 「進行中の（動作・変化などの）動き」の「テイル」

3.3 では、2 の「状態」の「テイル」の用法を分析し、従来の研究では、明らかになっ
てこなかった動詞との関係に問題があるということを指摘し、図式を以下のように示し、
細かい分析は第四章ですることにした。

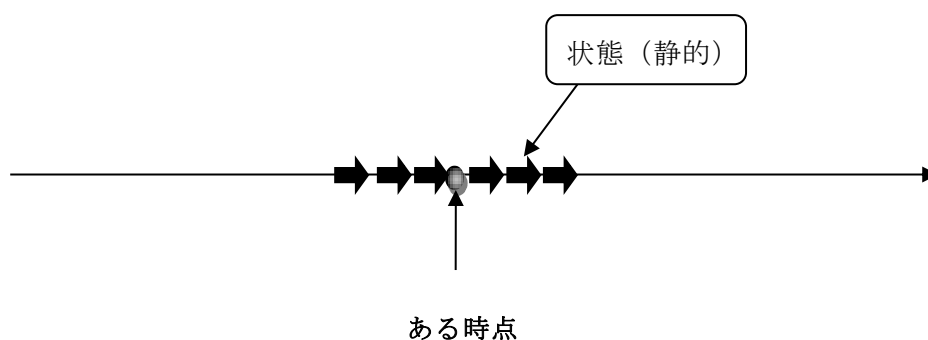


図 3.3 「状態」の「テイル」

3.4 では、3 番の「長時間の継続・持続」の用法について、先行研究にほとんど取り扱
われていなかったことに気づき、新たに提起した用法である。この用法は、「朝から晩まで」
や「一日中」、「一晩中」、「一年中」などのような「長時間」を示すものが文脈上存在する
場合に用いられる。焦点はその時間の長さであり、この点で 1 番の「進行中の（動作・変
化などの）動き」と 2 番の「状態」の「テイル」とは異なっていることが分かる。1 番の
用法と 2 番の用法はすべてある時点での動作や変化或いは状態の様相に焦点があり、典型

的なアスペクトの用法であるのに対し、この「長時間の継続・持続」の「テイル」は長時間に焦点がある用法である。この用法を「長時間の継続・持続」と名づけた。図式を以下のように示した。

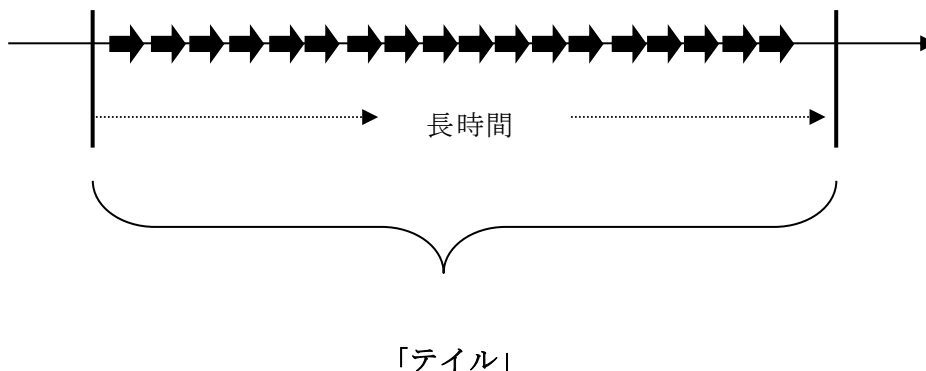


図 3.4 「長時間の継続・持続」の「テイル」

3.5 では、4の「繰り返し・習慣」の用法について、論じた。この用法は先行研究にあるように、同一の主体によって、同じことが何度も反復して行われる行為を指す場合と、複数の主体によって繰り返し行われる動作を指す場合がある。以下は庵（2001）の図式である。

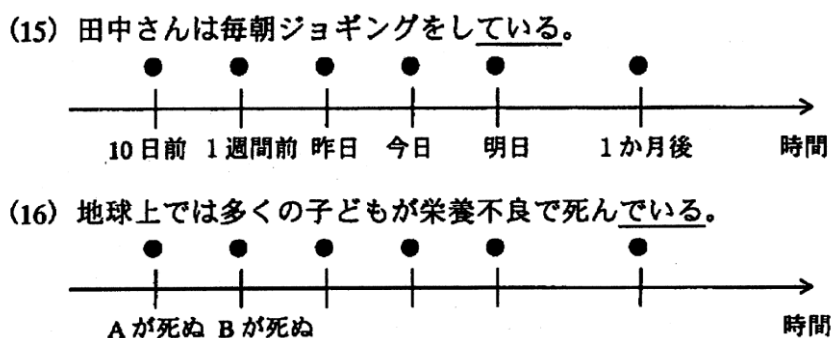


図 3.5.1 「繰り返し・習慣」の「テイル」の二つの用法

また、この「繰り返し・習慣」の「テイル」の用法は「繰り返し・習慣」の「ル」の用法と類似している。この二つの違いは、「ル」が変わらない繰り返しであるのに対して、「テイル」は始まりがあり、将来はいずれ終わるかもしれないという期間のある繰り返しである。

るという結論を得た。これを図式すると、以下のようになる。

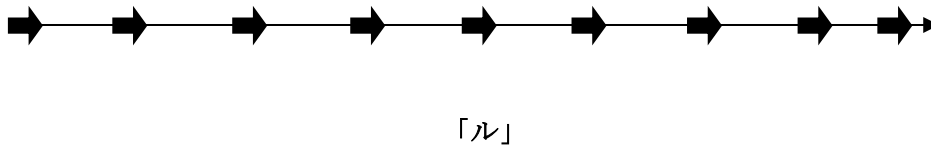


図 3.5.2 「繰り返し・習慣」の「ル」

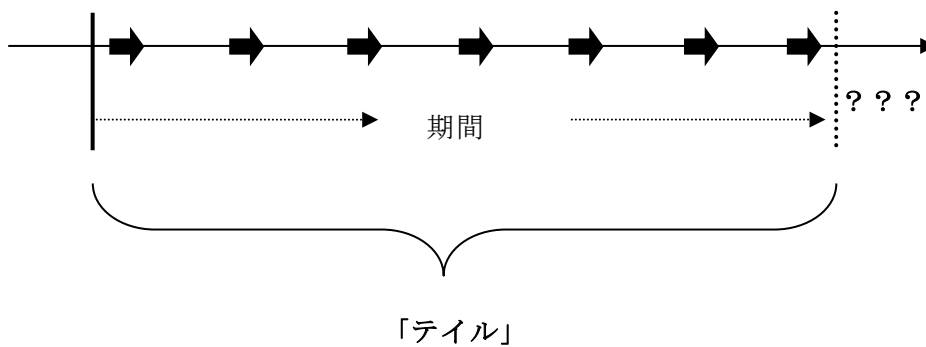


図 3.5.3 「繰り返し・習慣」の「テイル」

3.6 では、5 番の「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」については、従来「経験」という用法で論じられてきたが、このように様々な見解があるため、ここでは、例文のみを提示し、詳しくは第五章で分析することにした。

第 4 章 「テイル」構文の「状態」の用法について

第 4 章は 3.3 で述べたように、2 番の「状態」に関する「テイル」の用法に関して、詳しく分析を行った。

4.1 では、先行研究で述べられてきた「単純状態」と「結果残存」は、分析の結果、実は共通した部分があるということがわかった。それは、発話時点から見て、両方の用法が表しているものは、すべて動作性がなく、状態性を表しているということである。その結果から、それらを「状態」の「テイル」として、一つにまとめ、以下のような図式に示した。

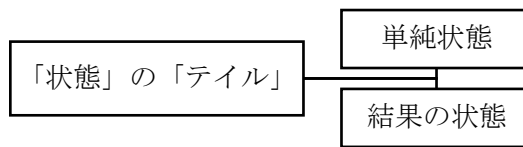


図 4-1 「状態」の「テイル」に関する構造

4.2 は上の図の 4.1 の「単純状態」の用法について分析した。その結果、「単純状態」を表すのは、従来言われてきた「そそり立っている」、「曲がっている」、「すぐれている」などの形容詞的状态を表す動詞以外に、「住んでいる」、「勤めている」、「休んでいる」、「さぼっている」などの動詞もあることがわかった。これらの動詞に共通していることは、多様な動作によって構成されており、具体的な動作が感じられなかったり、何もしないという意味で、全く動作性は感じられないなどの特徴を持っていることがわかった。このような動詞を「動作性状態動詞」と名付けた。これらの結論をまとめ、以下の図に示す。

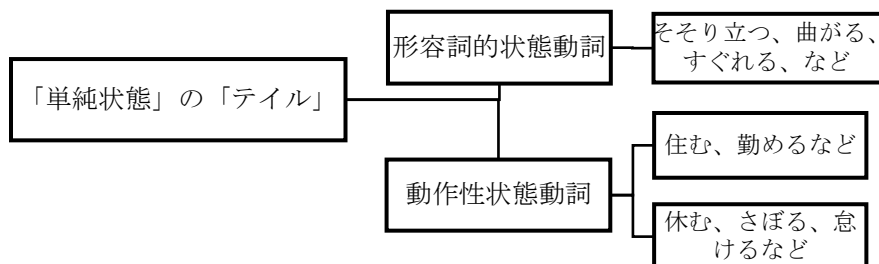


図 4-2 「単純状態」に関する動詞分類

4.3 では、4.1 で示した「結果の状態」について分析を行った。その結果、従来言われた「瞬間動詞」以外に、2 種類の性質の異なる動詞も「テイル」を付けると、「結果の状態」を表すことになることがわかった。その一つは「咲いている」、「痩せている」、「疲れている」、「曇っている」のような動詞であるが、これらの動詞の存在が従来の研究では、気づかれてはいたが、特殊な「瞬間動詞」として分類されたりした。しかし、「花が咲く」や「痩せる」、「疲れる」、「曇る」などの変化は決して瞬間的な変化ではなく、むしろ逆に非常に変化が緩慢で、その変化の途中を観察することが不可能である。この種の動詞を「瞬間動詞」と区別するために、「緩慢変化動詞」と名付けた。また、もう一種類は移動を表す「行

っている」、「来ている」などのような動詞であり、これらは到着後の状態を表していることが分かる。しかし、「行く」、「来る」などの移動には、ある一定の時間が必要であるにもかかわらず、従来瞬間動詞として分類されてきた。また、他の移動動詞すべてがこの性質を持っているわけではないにもかかわらず、その問題には触れられることがなかった。今回は動詞一覧表を用い、他の移動動詞について分析し、「行く」、「来る」、「帰る」、「戻る」は他の移動動詞とは全く異なる性質を持つことがわかった。さらに、これらの分析した結果、これらは、移動にある一定の時間を要するにもかかわらず、移動の途中は表さず、その結果のみを表すという特殊な性質をもつことがわかった。そのため、これらを「移動結果動詞」と名付けることにした。その結果、「状態」を表す「テイル」を大きく、二種類に分け、それに属する動詞を分類し、以下の図式を得た。

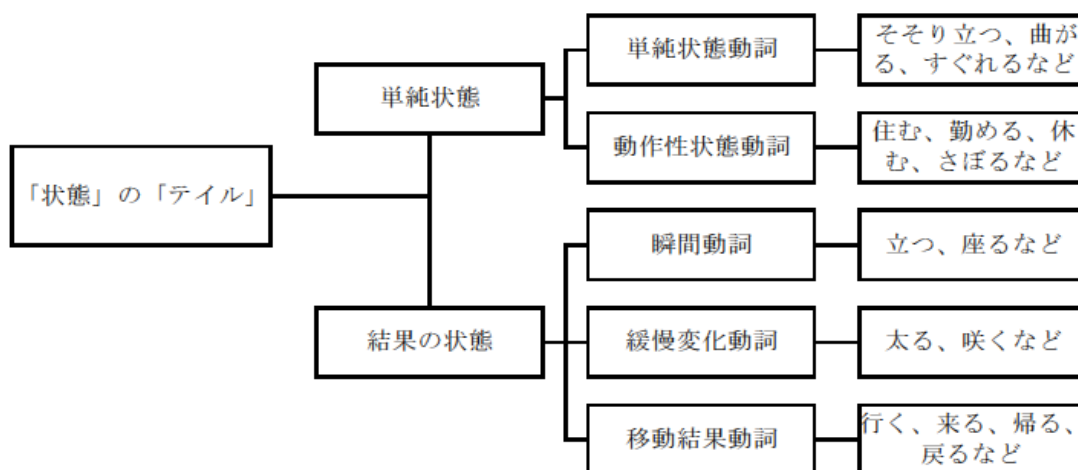


図 4-9 「状態」の「テイル」に関する構造

第 5 章 「テイル」構文の新たな第 5 の用法——立証のための情報提示

5.1 では、従来問題にされてきたいわゆる「経験」の用法について論じた。この「経験」という名称は藤井正（1966）が名付けたものである。その後、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」などの諸説が現れた。これらの中から、藤井正、高橋太郎、吉川武時また、工藤真由美、庵功雄、江田すみれの説を分析し、その主張を以下の図式としてまとめた。

藤井正、高橋太郎、吉川武時など



図 5-1-1. 従来の「経験」の説

工藤真由美



図 5-1-2. 工藤の「パーフェクト」の説

庵功雄、江田すみれなど



図 5-1-3. 庵・江田などの説

5.2 では、従来の先行研究では、「テイル」構文を使う理由に関しては、それは過去の出来事自体が「影響」や「効力持続」という要素を持っているから、現在へのつながりができていると分析されている。この節では、筆者は従来と異なり、短文ではなく、「NHKの有働アナ引退説」と「富士山将来噴火の可能性」といった内容の二つの文章を取り上げ、「テイル」構文について、分析をした。その結果、従来の説では、説明しきれないことに気付いた。この「テイル」の用法は、過去の出来事自体何の「影響」も「効力持続」も持って

いるとは言えないのではないかと問題提起をした。

5.3では、5.2で分析した結果から、この二種の文章に出てくる「テイル」は従来の「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」などには当てはまらないということから、これらが何か「情報」のようなものを表しているのではないかと考えた。5.3においては、この観点から梅棹の「情報理論」について、分析を行った。その結果、「情報」というものは、情報を読み取る人がいて、その人が、読み取った情報を他者、つまり、受信する人に発信し、そのことによって、「行動に影響をあたえる」というようなプラグマティックな目的も含まれているということがわかった。

5.4.1では、この梅棹の「情報が行動に影響を与える」というプラグマティックな視点から、先の「NHKの有働アナ引退説」と「富士山将来噴火の可能性」に対して、分析を行い、次のような結論として、図式を得た。

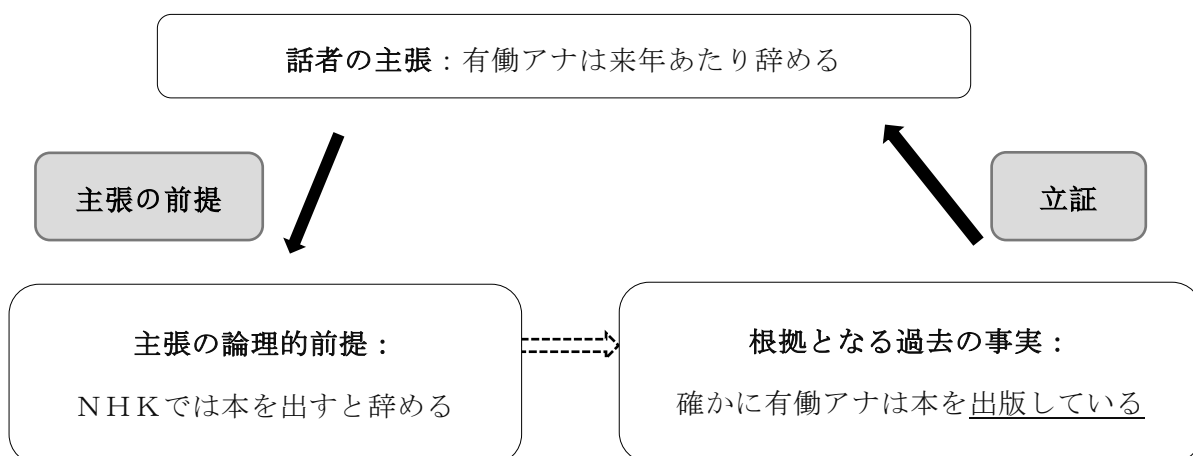


図 5-4-1. 例 5-(1)の図式

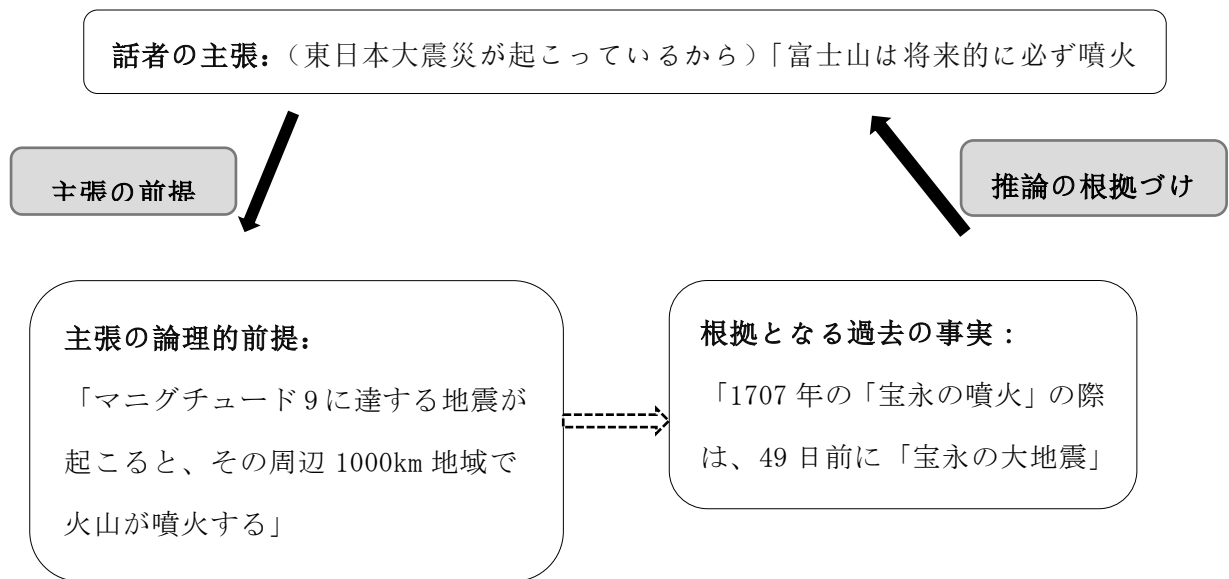


図 5-4-2. 例 5-(2) の図式

これらを他の 12 個の文章例に当てはめ、談話分析を行い、それぞれ似たような談話構造になることがわかった。

5.4.2 では、この結果を踏まえ、引用の「テイル」に関して、「言っている」、「言った」、「言っていた」に的を絞り、この引用の「言っている」も、この図式に当てはまるということを示した。

以上の談話分析の結果、5.4.3 では、日本語では、発話者、或いは著者が自分の主張を相手に提示することにより、自分の主張を立証したり、相手を説得したりするといった目的で、過去から、人為的にある出来事を持ち出し、立証の根拠とする際に、「テイル」構文を使うのではないかと考える。また、これらの主張は一定の前提に基づいている。この「前提」の部分には特に制限がなく、事実、ジンクス、社会ルール、一般常識、経験などのように一般的に認められているようなものである。話者はこの「前提」に基づき自分の判断を下しているということである。この過去の出来事は従来の過去の出来事の「影響」や「効力持続」では説明できない部分があることは明らかである。また、この過去の出来事を有益な「情報」と考え、この「情報」が現在の話者、或いは筆者の主張の根拠づけになっている。この際に、過去のことについて述べるときに、「テイル」を使っていると考えられる。つまり、日本語の「テイル」構文は過去の出来事などに関する「立証のための情報呈示」という機能を持っている。また、この用法をまとめると、以下のような一般的な談話構造として分析可能である。

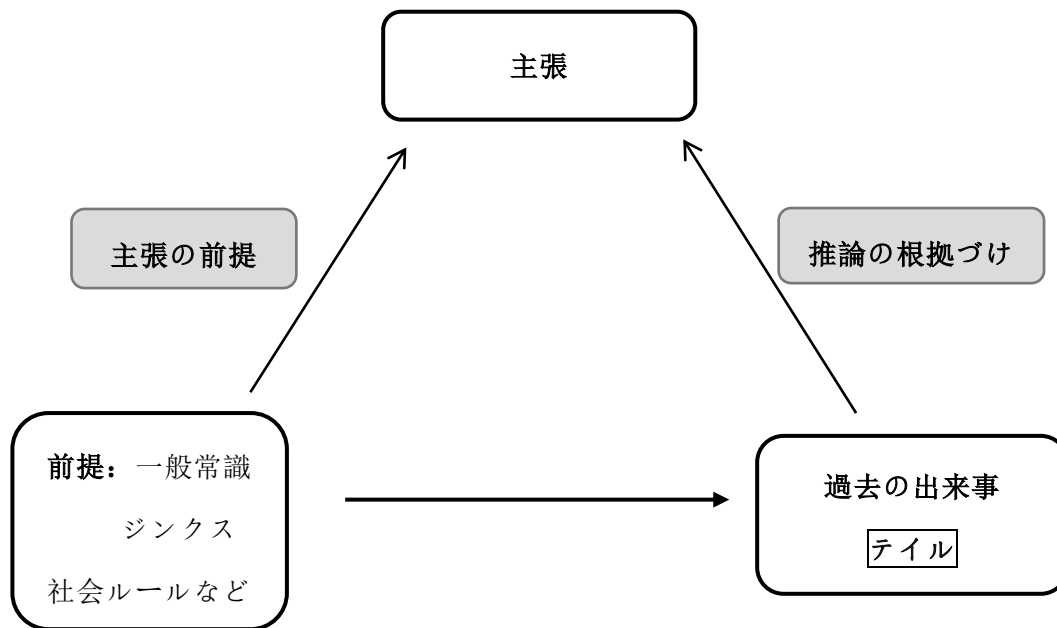
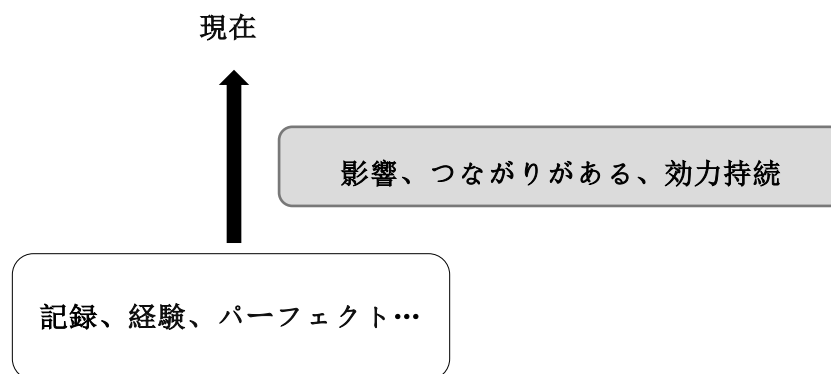


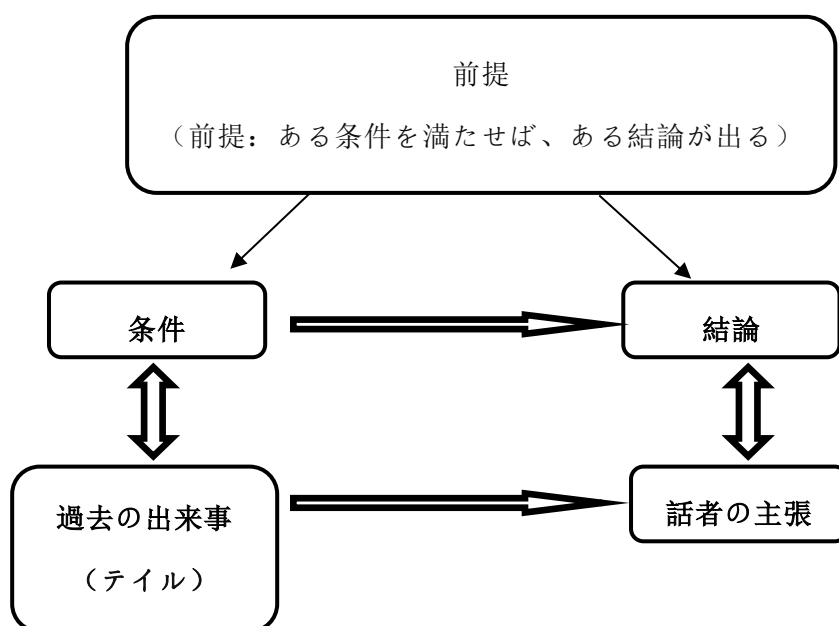
図 5-15 「立証のための情報提示」の「テイル」の談話構造

次に、この説と従来の説との違いについて述べたが、それぞれ、以下の図式のようになる。

従来の先行研究



本稿の説



以上が本論文の結論である。

6.2 将来の展望

今回の論文で、「テイル」の用法について、「進行中の（動作・変化などの）動き」、「状態」、「繰り返し・習慣」、「長時間の継続・持続」、「立証のための情報提示」の5つに分け論じた。しかし、「状態」の「テイル」に関しては、動詞との関連性が深いということがわかったが、「動作性状態動詞」については、今回は十分に考察をする時間がなかったので、今後の課題としたい。また、有対自他動詞の自動詞に「テイル」をつけると、「状態」になるのではないと思われるが、この有対自動詞は膨大な数があるため、今回やりきれなかったので、本稿では、これについて全く触れていないが、将来これについても考察を行っていききたい。

また、今回は引用表現の「言っている」については、「言った」と「言っていた」と比べながら、軽く触れただけであった。引用表現は、日本語学習では、大きなカテゴリーの一つであり、将来本格的にこの件について、分析していききたいと思う。そのほかに、「タコトガアル」や、「テイタ」など、「テイル」と類似した表現についても、どのような使い分けされているのかも分析したいと思っている。

最後に、本稿の結論をどのように教室で具体的に指導していくか、その指導法を考案していききたい。

<参考文献>

- 阿部保子(1998)「思考動詞のテイル形に関する一考察」『北海道大学留学生センター紀要』
2 p. 1-p. 12 北海道大学留学生センター
- 飯嶋美知子(2012)「論説文中におけるテイルの日中対照研究—論作文作成指導のために—」
『北海道情報大学紀要』第23巻 第2号 北海道情報大学 p. 101-p. 110
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語ハンド
ブック』 スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語ハン
ドブック』 スリーエーネットワーク
- 庵功雄・清水佳子(2003)『日本語文法演習 時間を表わす表現—テンス・アスペ
クト—』 スリーエーネットワーク
- 庵功雄(2010)「第1回 アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育
研究』創刊号, pp. 41-48, 中国語話者のための日本語教育研究会編
- 庵功雄(2011)「第2回 アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育
研究』第2号, pp. 59-67, 中国語話者のための日本語教育研究会編
- 庵功雄(2012)「新しい文法教育のパラダイム構築のための予備的考察」『日中言語研
究と日本語教育』第5号 好文出版
- 石川守、『くりかえしの「～ている」と確定の「～た」の用法をめぐる考察』、語学研究 第
45号、昭和61年
- 石田尊(2001)「テイル構文の項構造と解釈の関係について」 八洲学園大学紀要 第7
号 p. 25-p. 38
- 李 善姫(2009)「日本語の移動動詞の研究」東京外国語大学博士論文
- 稲垣俊史(2013)「テイル形の二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」『中国語
話者のための日本語教育研究』第4号, pp. 29-41, 中国語話者のための日本語教育研
究会編
- 上原由美子(2003)「テイルの反復解釈について」『神田外語大学大学院紀要』第9号
p. 55-p. 79
- 鵜殿倫次, 韓泳共著(2008)「日本語『ている』に対応する中国語の表現」愛知県立大学大
学院国際文化研究科論集 p. 1-p. 29
- 梅棹忠夫(1995)『情報の文明学』中公叢書

- ERDENE-OYUN URANBILEG 「日本語とモンゴル語の時間表現について—『過去』、『現在』、『未来』についての日本語とモンゴル語の対照—」 拓殖大学言語教育研究科博士論文
- 大浦真(2008) 「日本語の『ことがある』構文とテイル形」 京都大学博士論文
- 奥田靖雄(1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一段階—」 『宮城教育大学国語国文』 8 宮城教育大学国語国文学会
- 加藤泰彦, 福地務共著(1989) 『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 15 テンス・アスペクト・ムード』 荒竹出版
- 鎌田精三郎 (1996) 「現代日本語の『テイル』形アスペクトの意味解釈」 『城西大学研究年報』 人文・社会科学編 20, p. 15-p. 38
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 金田一春彦 (1955) 「日本語のテンスとアスペクト」 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」 『武蔵大学人文学会雑誌 第13巻 第4号』 武蔵大学人文学会 pp51-88
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房
- 『広辞苑』 第四版(1998) 岩波書店
- 江宛軒 (2015) 「存在様態のシテイルについて—格体制の変更から—」 お茶の水女子大学 『比較日本学教育研究センター研究年報』 第11号 お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター p. 229-p. 234
- 古賀悠太郎(2012) 「移動動詞『行く/来る』文と日本語話者の視点—中国語との対照研究を念頭に置いて—」 第29回中日理論言語学研究会発表資料
- 江田すみれ(2011) 「『ている』の論理的な文章中での使われ方—『効力持続』『長期的な動作継続』を重点にして—」 国立国語研究所論集(NINJAL Research Papers)2:pp19-47
- 江田すみれ(2013) 『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト—異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法—』 くろしお出版
- 『日本国語大辞典』 第三巻(1997) 小学館
- 『日本国語大辞典』 第四巻(1997) 小学館
- 『日本国語大辞典』 第五巻(1997) 小学館

- 崔亜珍 (2009) 「SRE 理論の観点から見た日本語テンス・アスペクトの習得研究—中国人日本語学習者を対象に一」『日本語教育』142, pp80-90
- 鈴木重幸 (1957) 「日本語の動詞のすがた (アスペクト) について—～スルの形と～シテイルの形—」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 砂川有里子 (1986) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 2 する・した・している』寺村秀夫企画・編集 くろしお出版
- 砂川有里子ほかグループ・ジャマシイ編著 徐一平ほか訳 (2002) 『日本語句型辞典』北京教学与研究出版社
- 曹倩 (2013) 「『V+テイル』構文と『トコロ』構文」『拓殖大学大学院 言語教育研究』14号 拓殖大学大学院言語教育研究科研究年報編集委員会
- 曹倩 (2014) 「『テイル』構文の第六の用法について」『拓殖大学大学院 言語教育研究』15号 拓殖大学大学院言語教育研究科研究年報編集委員会
- 曹倩 (2014) 「情報伝達の『テイル』について—情報伝達の各様式と『テイル』様式—」日本語教育学会 2014 年研究集会第 7 回 (四国地区) 於: 鳴門教育大学
- 曹倩 (2015) 「『テイル』の『状態』の用法について—『行っている』『来ている』『戻っている』『帰っている』を中心に—」『拓殖大学大学院 言語教育研究』16号 拓殖大学大学院言語教育研究科研究年報編集委員会
- 曹倩 (2015) 「テイルの第六の用法についての一考察—『情報伝達』の下位分類とその関連図式について—」日本語教育学会 2015 年研究集会第 6 回 (関西地区) 於: 園田学園女子大学
- 曹倩 (2015) 「引用と伝聞の『タ』『テイル』『テイタ』に関する一考察—日本語の『言う』と中国語の「説」を中心に—」日本語教育学会 2015 年研究集会第 7 回 (四国地区) 於: 香川大学
- 曹倩 (2016) 「『テイル』構文のコアに関する一考察—第 5 の用法『立証のための情報伝達』を中心に—」日本語教育学会 2015 年研究集会第 10 回 (四国地区) 於: 桃山学院大学
- 孫逸珊 (2015) 「動詞一覧表」拓殖大学博士論文
- 対外日本語教育振興会編 (1971) 『Intensive Course in Japanese Elementary Course Volume 2』ランゲージ・サービス
- 孫敦夫 (2012) 「アスペクトの情報伝達機能 —『タ』形と『テイル』形を中心に—」『日本語学』・『日本語教育』 (安田尚道教授退任記念号)

- 高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 高梨信乃 (2013) 「大学・大学院留学生の文章表現における文法の問題—動詞のテイル形を例に—」『神戸大学留学生センター紀要』第9号 神戸大学留学生センター p. 23-p. 41
- 武井由紀 (1999) 「継続動詞テイル形に関する一考察」『フランス語フランス文学研究 4』 p. 134-p. 136
- 谷口秀治 (1997) 「テイル形の3つの性質 (客観性、現象描写性、報告性) について」広島大学留学生センター紀要7号
- チフトゥチ ウムハン (2015) 「現代日本語における形容詞的動詞をめぐって—連体修飾の『ル』『テイル』『タ』形を中心に—」名古屋大学課程博士論文
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中川良雄 (1993) 「留学生の多様化と機能シラバス: 日本語『～ている』文の発話機能」『日本語・日本文化研究』第1巻 p. 29-p. 41
- 中村渉, 簡卉雯共著 (2009) 「中国語母語話者による『動詞+テイル』の習得に関する事例研究: コレスポネンス分析による解析」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第4巻 p. 69-p. 79
- 藤井正 (1976) 「『動詞+ている』の意味」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 松下大三郎 (1924) 『標準日本文法』紀元社
- 宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪廓』三省堂
- 山本雅子 (2005) 「テイル形式の認知的意味」『言語と文化 愛知大学語学教育研究室紀要』 p. 89-p. 101 愛知大学語学教育研究室
- 柳沢浩哉 (1993) 「テイル形の従属性—語りにおけるテイル形の機能—」『国文学攷』(139), p. 1-p. 12 広島大学国語国文学会
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクト研究」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 吉川洋 (2011) 「『テイル』構文の意味と曖昧性」兵庫県立大学環境人間学部 研究報告第13号

謝辞

最後に、本研究を行う時お世話になった方々へ感謝の気持ちを伝えたいと思います。まず、本研究を指導してくださった指導教授石川守教授に心から御礼を申し上げます。そして、本研究の副査木村政康教授、小林孝郎教授、また本研究を行う際貴重な意見やアドバイスや感想などをいただいた言語教育研究科の諸先生や研究室の方々、研究に協力してくださった人々に深く御礼を申し上げます。

また、研究だけではなく、日本での留学生活を送る際に経済的にも精神的にも支援をしてくださった日本の文部科学省、平和中島財団、公益財団法人樫山奨学財団、拓殖大学大学院言語教育研究科に心から御礼を申し上げます。

このように本研究は先生方を始め多数な人々の支えや支援があったからこそ完成したものであり、私一人ではとても完成させることが出来なかったと思います。そして最後に、本研究を行う際にお世話になった方々はもちろんのこと、それに私が留学しに来日してから8年間に渡り、いろいろな面で支えてくださった方々に改めて心から深く感謝していることを伝えたいと思います。